
IS 【Three Heroes ~白・黒・灰~】

オブライエン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS【Three Heroes（白・黒・灰）】

【Nコード】

N3886S

【作者名】

オブライエン

【あらすじ】

IS。女性にしか動かせない超兵器。それを世界で唯一操る事のできる男子【織斑一夏】。そして、彼の前に現れる【語られぬモノ】と【迷い猫】……。IS学園を舞台に巻き起こる、様々な事件と幾つもの謎。その先にあるのはどのような結末か。原作、アニメを追いつつ、オリジナル展開を進めていく予定です。処女作なので色々と至らぬ点もありますが、よろしく願います。

プロローグ Black (前書き)

処女作です。アドバイスや駄目だし募集中です。

プロローグ Black

「 ちら、こちら 機関、緊急事態が発生した！ISの起動実験に失敗、研究用の原子力ジェネレーターが暴走した、このままではマルチダウンしてしまう！こちらで何とか制御を試みているが、長くは持たない、誰かこの通信を聞いている者がいれば救援を求む！至急、救援を 」

以上が、とある研究機関の残した最後の通信記録である。

その機関は、ISが世界に普及した頃から、ロシアの極地に確かに存在していた。

大規模ではなかったが高い技術レベルを持っていた機関である。彼らの目的は、IS技術の更なる発展や、適応者の育成とはまた少し違っていた。高い技術力を結集させ、戦場にも即時適応するハイレベルな適応者を造り出すということに主眼が置かれていたのである。一体でも十分、二体や三体輩出されれば大成功といった塩梅だった。

その研究機関は、《ラボ・アスピナ》という。

アスピナは、《A》から《Z》までの26人の被験体を揃え、データを用的したシミュレーションを行わせていた。単純なシミュレーションだ。あらゆる戦場、あらゆるシチュエーションを再現しておきながら、最終目的は一つ。敵性存在と設定された。たった一機のISを撃破すること。

しかしアスピナは、先ほどの通信を最後に、ある日突然地図上から姿を消すこととなる。

原因はIS用原子力ジェネレーターの暴走による爆発。研究員と被検体は全員死亡し、周囲数キロに高濃度の放射能汚染が撒き散らされ、爆心地付近は今でもA級汚染地帯とされている。ISの起動実験中の事故から起こった悲劇とされるが、数少ない記録を紐解いてもその記述に幾つかの疑問点が残る。

プロジェクトの核となったISは、コードネームを《アンサンング》と聞いた。

某国、某地域にある某企業の本社。

近隣住民からバベルの塔と揶揄される百階建ての超高層ビル。その九十九階のある一室に一人の青年がいた。

青年がいる一室は高級ホテルのスイートルームにも匹敵する程の豪華な部屋であったが、酷く殺風景な雰囲気を漂わせていた。青年は始めから部屋に備えられていた備品以外は一切、持ち込んでいないのだ。

青年は窓から見える星空を見つめながら、歌を唄っていた。

「

」

「

特筆すべきところなんか無い。人が人を好きになって、お互いに結ばれて、結婚しましよっつという歌詞を耳に心地いいメロディで唄う。そんな田舎者の恋の歌だ。

「~~~~~」

ラブソングを唄っているというのに青年の眼を鋭い。顔をしかめて、まるで睨むように星空を見上げ、唄う。

「相変わらずいい歌声ね、ジーク」

突然、背後から声が聞こえてきた。

青年 ジークは唄うのを止め。不機嫌さをあからさまに出した
声音で応える。

「世辞はいい。なんの用だ、スコール」

いつからそこに居たのか、鍵を閉めていたのにどうやって入ったのか、などは今さら聞きはしない。スコールと呼ばれた女は相手の事実など基本的に考えないのだ。それこそ本当の『お構い無しスコールの雨』
のようだ。

「仕事の依頼よ。貴方にはある場所に行つて欲しい」

「ハッ。また、どこぞの軍事基地でも襲撃してこいつてか？傭兵使いの荒エこつて」

ジークは口元を歪めて挑発的に笑うが、スコールは柔らかな微笑みを浮かべて首を振った。

「いいえ。今回の依頼は襲撃ではなく、調査の依頼よ」

「アア？そりやまた珍しいな。基本そういう仕事はオータムのアホがやるもんだと思つてたんだが」

「そう言わないで。今回の依頼は貴方に探し求めている”アレ”に関わつてくるモノかもしれないから」

「 なんだと」

ジークはぐいんと首を回し、スコールの方へ視線を向けた。その瞳は獲物を前にした肉食獣のように爛々と輝いている。スコールは肩を竦めて苦笑した。

「……相変わらずね。”アレ”のことになると」

「ツたりめエだろ。何のためにテメエらみてエな得体の知れねエ連中に雇われてると思つてんだ？」

「酷いわね。結構良い待遇にしていると思うのだけれど」

くすくすと微笑むスコール。ケツとジークは吐き捨てる。

「んなことはどうでも良い、ささっと本題に入れ。オレは何処に行きやあいい？」

「ここよ」

スコールは書類をジークに手渡す。ジークの顔が一瞬で曇った。

「マジで言ッてのか」

「ええ」

スコールが手渡した書類はパンフレットだった。正確には日本にある特殊な高等学校のパンフレットだった。

スコールは笑顔で告げた。

「貴方にはES学園に行ッて貰います」

ブローグ Black (後書き)

リアルが忙しいので更新は遅くなるでしょうが、頑張ります。

プロローグ Gray(前書き)

オリ主その2のプロローグ。

果たしていつになったら本編に入れるのだろうか……

プロローグ Gray

彼にとって「灰」は死に瀕した時、自らを取り巻いていた色だ。

粉塵と煙で灰色に染まった空と大地。それ以外の唯一の色は地面に燻る炎の赤と己から流れ出る血の朱だけ。降り注いできた瓦礫で左腕は潰れてしまった。己の血で出来た血だまりの中で仰向けに倒れながら、彼は思う。

ああ。ぼくは、ここで死ぬのかー

自分のことだというのに、まるで他人事のような俯瞰的な思考だった。

廃墟となった町を思う。自分が今まで生きてきた場所。狭いけど温かかった。自分にとっての世界の全て。閃光が一度瞬いただけで、灰色の世界に変わってしまった。父や母、他のみんなも屑のように死んでしまった。

意識が薄れていく、視界に霧がかかる。後はただ、みんなと同じように誰にも知られず死んでいくだけ。

その時、白い騎士を見たような気がした。

幻かもしれない、とは思わなかった。

無意識に右手を伸ばした。

意味は無くても構わない。まだ生きているのだから、生きているなら、足掻かなければ、何も出来ずに死んでしまった人達がいるのだから、そうしなければ嘘だ。彼の頭の中にあるのはそれだけだった。伸ばした右手はひらひらと情けなく宙を踊る。

生きているんだ。

まだ、生きているんだ。

それを、誰かが証明した。

「生きたいか？」

問いかけてきた声は、幻聴ではなく確かなものだった。彼女がいつからそこにいたのかは分からない。

見詰めてくる顔。空の色も、嘘みたいな灰色。彼女の表情もよく見えなかった。

声が出せない。

頷く力なんてものは残っていない。

だから彼は、伸ばした右手で拳を作った。強く、命あるものの意地であるかのように、強く。

「いいだろう。……私と、こい」

彼女は、拳を優しく握ってくれた。

その後のことは彼は覚えていない。だけど、彼女の手の温かさは例え地獄に堕ちても鮮明に思い出せると断言できる。

これは、十年近く前の、彼の始まりの記憶だ。

少年はバスの中で最早立方体と呼べそうな厚さの参考書と格闘していた。まだ、15〜16歳という若さだ。周りの座席に座っている乗客から冷ややかな視線を向けられていたが、気にする余裕など無かった。

しかし、彼を邪魔するように胸ポケットに入っていた携帯電話が振動した。参考書から目を離さず、携帯電話を耳に当てる。

「もすもす？ひねもす？」

ぶつつ。ー切った。そして切れた。

ブーブーっ。もう一度振動する携帯電話。もう一度耳に当てる。

「はい、みんなのアイドル・篠ノ乃東ここに「切りますね」わーわー！？切らないでスミスミ！？」

スミスミと呼ばれた少年 シオン・スミカは大きくため息をついた。

「そのあだ名はやめてくださいって何度も言ってるでしょ」

「OK〜！スミスミ」

シオンはもう一度、今度は肺の中の空気を全て吐き出すような深いため息をついた。

「で、何のようなんですか？僕は今忙しいんですけど」

「ん〜とね。IS学園に入ったら篝ちゃんの隠し撮り写真を送って欲しいなと思って」

「いい加減にして下さい。螺曲がったシスコン」

「なんだどう〜〜！私の純粋な愛情の何処が螺曲がっているというのだ!？」

「妹の隠し撮りを他人に頼む姉を純粋とは言いません！第一隠し撮りである必要は無いでしょう、普通に写真を撮らせて貰えばいいじゃないですか!？」

「東さんに送るための写真を篝ちゃんが撮らせてくれるわけがないじゃん!」

「そういう所だけは妹のこと解ってるですね!？」

ぎゃあぎゃああとバスの中で携帯電話に向かって叫ぶシオン。周りの乗客の目が冷ややかなものから、怒りの視線に変わったが彼にそんな物を気にしている余裕などない。先程とは別の意味で。

これはとある傭兵が雇い主からちょっと女子高に行ってきた、とむちゃぶりを受けたのと同時刻の出来事である。

プロローグ White (前書き)

プロローグー夏編。ほとんど原作通り……仕方ない事とはいえ、
なんか情けない気分です。

文才が欲しい……切実に

プロローグ White

「えーと……あれ？ これ、どうやって二階に行くんだ？」

二月の真ん中、中学三年の少年、織斑一夏は現在受験まったただ中だった。そして中学三年なのに絶賛迷子中だった。

彼は昨日起きたカンニング事件のせいで各学校が入試会場を二日前に通知するという政府のむちゃぶりを受け、ぶちぶちと愚痴りながら試験会場である名前は知っているけどどこにあるかは知らないという典型的な公共事業の産物こと多目的ホールに来たのだが。その多目的ホールが曲者だった。

設計は地域出身のデザイナーに頼んだらしいが、なんというか「常識的に作らない俺カッコイイ」と言わんばかりの設計だったのだ。詰まるところとてもわかりにくい設計をしていたのだ。

「……ええい、次に見つけたドアを開けるぞ、俺は。それで正しい正解なんだ」

一夏はそう腹に決めて。発見した正体不明のドアを開けた。

「あー、君、受験生だよな。はい、向こうで着替えて。時間押してるから急いでね。ここ、四時までしか借りられないからやりにくい

つたらないわ。まったく、何考えて……」

部屋に入った途端、神経質そうな三十代後半の女性教師に言われる。どうやら相当忙しいのか、その忙しさで判断能力が鈍っているのか。おそらくその両方なのだろう、一夏の顔を見ずに指示だけして出ていった。

（着替え？はて、今日日の受験は着替えまでするのか？ああ、カンニング対策か。大変だなあ、どこの学校も）

そう思ってカーテンを開けると、奇妙な物体が鎮座していた。

それは口で説明するなら『お城に飾ってある中世の鎧』だ。それがまるで、忠誠を誓う騎士のようにひざまずいている。

知っている、これは、『IS』だ。

一人の天才が創り出したマルチフォームスーツ【インフィニット・ストラトス】。

宇宙開発を目的に製作されたそれは、現行のあらゆる兵器を上回

る性能を秘めていた。

故にインフィニット・ストラトス 通称ISは結果としてその姿を兵器へと変えていく。が、それを恐れた国々はISに関する一つの条約を制定する。

それが【アラスカ条約】である。

その結果、ISはスポーツの一分野として定着した。

だが、ISのコアは限られていた。

世界で唯一、コアを作ることの出来る科学者、【篠ノ之 束】はコアの量産を是としなかった。

ISはコア無くして成立せず、そしてコアは数が限られている。

故に、世界にISは限られた数しか無く、各国は高性能の機体を作り上げることに躍起になった。

強力なISと多くのISは国家戦力の比として扱われるからだ。

しかし、ISには致命的な欠陥が存在していた。

「男には使えないんだよな、たしか」

そう、ISは女性にしか使えない。女性以外には、ISは反応しないのだ。

だから、今日の前にあるのは置物と同じだ。何もしないし、できない。ただの物体だ。　　そう思って、触れた。

「!？」

キンツと金属質の音が頭に響く。

それと同時に、意識に直接流れ込むおびただしい量の情報の数々。数秒前まで知りもしなかったISの基本動作、操縦方法、性能、特性、装備、行動範囲、活動時間、センサー精度、レーダーレベル、アーマー残量、出力限界、etc, etc……
まるで長年愛用してきたモノのように、修練した技術のように、理解、把握できる。

視覚野に接続されたセンサーが直接意識にパラメーターを浮かび上がらせ、周囲の状況が数値で近くできる。

「な、なんだ……?」

動く、動くのだ。ISが。女性にしか使えないはずの超兵器が。それこそ、まるで自分の手足のように。

肌の上に直接何が広がっていく感触　　スキンバリアー 皮膜装甲展開……完了。

突如、体が軽くなる無重力感

スラスト 推進機……確認。

右手に加わる重量感

近接ブレード……展開。

知覚精度が急激に高まる清涼感

ハイパーセンサー最適化…

…終了。

それら全てが解る。知りもしないのに、教わってすらいないのに、解る。

そして、『IS』から送られてくる情報で見る世界は、まるで

この時を境に織斑一夏の「世界」は大きく変貌する。

ブローグ White (後書き)

漸くブローグ終わり。次からやっ和本編です。

黒の暗躍 灰の苦悩（前書き）

仕事が忙がしかったので間が開いてしまった上に短いですが、
しかも、本編に入れなかった……

黒の暗躍 灰の苦悩

「くそツたれ、滅茶苦茶疲れた」

彼、ジークは疲れ果てていた。

彼はIS学園の制服（女子用）を手に笑顔で迫ってくる国際テロ組織の女幹部とその恋人のテロ組織下っぱから逃げる事一時間、女子高に通うことなど断固拒否すると宣言し交渉（武力も含めた）する事二時間、合計三時間の激闘の末なんとか二十も越えたのに女子高に通うなどという最悪の事態から逃れる事に成功した。

そう！彼は人としての尊厳を勝ち取ったのだ！！ そんな事に体力を全て使い切ってしまったが。

ジークが現在いるのはIS学園から一番近い位置にあるマンションの一室だ。これからの行動拠点として買い取ったのだが経費は落ちなかったので自腹を切るはめになった、抗議したら「本来掛かるはずのなかった費用だから当たり前でしょ（笑）」と言われた。では何か二十越えた男が女子高に入学するのが当たり前なのかとぶちギレたくなつたが雇い主とのこれ以上衝突するのは避けたかったので自重した。

彼の目的のために雇い主である『亡国機業』ファントム・タスクの力は必要なのだ。

「くそ、今日はもう寝るか」

計三時間の攻防の後直ぐに飛行機に乗って日本に来たので疲労と時差ボケが重なり、猛烈な睡魔に襲われていた。ジークが備え付けのベットにダイブを決めようとした時。

ピンポンっと、間の悪いことにインターホンが鳴った。

新聞勧誘か何かだったらブチ殺そうと思いつつもフラフラと玄関に向かいドアを開けた。

「スコール・ミュゼルさんからお届け物です！」
「はア？」

営業スマイルを浮かべた宅配業者のおっさんが口にした予想外の名前に一瞬目が点になるジーク。

とりあえず受け取りのサインをして段ボールを受けとる。妙に軽かった。

「一体、何を送ッてきやがッたんだ？しかも宅配便で」

テロ組織がク ネコヤ とを使用しているのかと疑問に持ちながら、梱包を破って中身を確認する。

「……………」

ジークの思考は完全に停止した。

それは白色だった。

それは着るものだった。

それは制服だった。

しかも下はスカートだった。

それはどこからどう見てもIS学園の制服（女子用）だった。

因みに添えられていた手紙にはこう書いてあった。「気が変わったら何時でも言ってね。準備は万端だから」

沈黙。

「オウラア!!」

ジークは感情に身を任せ思いっきり段ボールを蹴り上げる。くの字に大きく折れ曲がり宙を舞う段ボール。

「セイヤア!!」

そして追撃の手刀。床に叩きつけられてバウンドする段ボール。

「ラストオオ!!」

最後に全力でサッカーボールキックをお見舞いする。猛スピードで飛び、そして壁に叩きつけられる段ボール。グシャアと潰れてそのままゴミ箱の中へと落ちていった。

「……………一体何を考えてもやがるスコールのヤロウ。そこまでしてオレをIS学園に行かせてエのか」

本気で雇い主を変えた方がいいのかもしれないと思ってきた。確か亡国機業と言えば第二次世界大戦中に生まれ、現代まで活動して

いる大組織では無かったのか。

国家に寄らず、思想を持たず、信仰は無く、民族にも還らない。

故に目的不明、存在も不確か、その規模もわからない。

まさに 亡霊。そんなアニメや漫画の悪の秘密結社のような組織では無かったのか。

少なくとも、雇った傭兵を女子高に潜入させようとする組織では無いと、ジークはそう思っていた。

「チクシヨウ……目が覚めちまった。仕方がねエ、仕事するか」

スコールに対する怒りで眠気がどっかに行ってしまったので、仕事をなるべく情報端末を立ち上げる。

そして、逆探知された時のために適当なPCにハッキングして踏み台にしてからIS学園のデータベースにハッキングを仕掛けた。

今回の仕事 任務はIS学園内の専用機持ちが持つ最新鋭のIS及び世界で唯一の特殊ケース織斑一夏の調査だ。

「へえ、ここがIS学園かあ」

シオンは色々と苦勞をしたが何とかIS学園正門前に辿り着いた。道に迷って民家に迷い込み警察に通報されたり、警察から逃げている途中で色んな意味でブツ飛んでる女からの電話がかかってきて心身共にに追い詰められたりと大変だった。

「ああ、思い出したら泣けてきた」

警察との追いかけてこはたいへんだったなあ、燃えカスのような灰色の髪に褐色の肌という外国人オーラばりばりの男が庭に立っていたら通報するのが普通だからそんなに文句は言えないけど、思いながら笑顔ではらはらと涙を流すシオン。

はたから見たら完全に不審者である。当然そんな不審者を職員が見逃すはずがなく、後ろから肩を捕まれた。

「おい、その男。何をして - - お前、シオンか？」

「あ、お久し振りです。師匠^{せんせい}本当にここで教師をやってたんですね」
振り返る。話しかけてきた職員はシオンのよく知る人物だった。黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身、よく鍛えられているがけして過肉厚ではないボディライン。組んだ腕。狼を思わせる鋭い吊り目。織斑千冬。世界で唯一の男のIS操縦者織斑一夏の姉にして、引退した今でも世界最強のIS操縦者と名高い女傑だ。

「その呼び方はかわってないな……だが、まあいい。本当に久しぶりだな」

「ええ、三年振りですね」

千冬の穏やかな微笑みを浮かべ、対してシオンは子が親に向けるような満面の笑みを返す。

「で、どこをほつつき歩いてたんだ。お前が急に日本出たと聞いたときは、流石の私も肝を冷やしたぞ」

「ええっと、フランスでISの勉強をしました」

「フランスでか？彼処のIS技術はそこまで高くはなかったはずだが」

「暮らしていくのに都合が良かったので」

「……そうか。 で、それが例のISか？」

千冬は怪訝そうな目でシオンの首に付けられている灰色の首輪を見詰める。シオンはどこか困ったような表情を浮かべた。

「ええ。僕の相棒で篠ノ乃東特製『世界で唯一男でも使えるIS』……らしいですよ。ま、僕にしか使えないように設定してあるそうですけど」

『世界で唯一男でも使えるIS』

それが男であるシオンがIS学園に来ることになった理由の一つだ。IS最大の欠陥である女性にしか使用できないという点を克服した機体、それもIS開発者である篠ノ乃東が開発した機体となれば世界各国狙われるハメになるのであらゆる国家、組織の干渉を受けないIS学園に入学することにしたのだ。

「東のヤツめ、やり過ぎるなと言っただはずなんだがな」

「ハハ。そう言ってあげないで下さい。このISは東さんに僕が頼んで造って貰ったモノですし」

「……まあいい。で、どうするんだ？ここ、IS学園に入学するか？」

「するに決まってるじゃないですか。じゃなきゃ何のために日本に戻ってきたんですか」

「まあ、そつだろつな。じゃあ、転校という事で処理しておつ。」
「ありがとうございます、師匠」

「お前のクラスは一年一組だ。また明日から来い。後、学校では師弟ではなく教師と生徒として接しろ」

「わかりました。……元気にしてるかな、一夏……」

「ああ、元気だよ。それだけが取り柄だからな」

「一夏も相変わらずヒーローやってるみたいだな」

千冬と別れた後、シオンはポツリと独り言を漏らす。その表情から憧憬の表情を見てとれた。

シオンにとって織斑一夏という少年は憧れだった。それこそ、漫画やTVのヒーローのように憧れて千冬に一夏を過大評価し過ぎと呆れられた程だ。

恩人たる千冬の弟ということもあったが、それ以前にその在り方が彼にとって眩しくて仕方がないものだった。

「世界で唯一男でISを起動できるなんて 本当に凄い」

シオンも男でISを使用するがそれは、篠ノ乃束の力であって彼

の力ではない。そのISの力だつて、体に特種処理を施し、特種な操縦法を学ぶ必要があつた。体にかかる負荷も凄まじく文字通り血へドを吐く訓練を受け続けて、ようやく動かせるようになった。それでも機体本来のスペックを引き出せてはいないのだ。

だが、織斑一夏はISを動かした。

男にも動かせるISではなくても、何の処理を受けなくても、操縦法を学ばなくても、血へドを吐く訓練を受けなくても、何の弊害も無く動かした。

「 本当に……凄いな……………」

彼に表情は先程の憧憬のモノとは変わった。様々な感情がぐちゃぐちゃに混ざりもつれあつて彼自身にもその感情を何なのか把握できなくなつていた。

彼が織斑一夏に対してどんな感情を抱いているのかは、彼自身にも解らない。

黒の暗躍 灰の苦悩（後書き）

男でも使えるISは無人機が出来るならその技術を応用すれば出来ると思っただんですが……どうですかね？

白、灰、紅、そして黒（前書き）

まずい……一夏を主人公ぽく書けない……
文才が欲しいです……いや、マジで。

白、灰、紅、そして黒

「全員揃ってますね。今日はなんと、転校生を紹介します!!」

一年一組の副担任山田真耶はそんなことを言った。

転校生?こんな時期に?

と思いつながら、織斑一夏は前を向いた。

それこそ入学式からまだ1日しかたつていない。そんな時に転校してくる奇妙な奴一体どんなやつだと、一夏は思う。

「失礼します」

「……………」

教室のドアが開いて、転校生が入ってきた。クラス全員が口をポカんと開いて啞然とした。それもそのはず、教室に入ってきてのは、灰色の髪に褐色の肌の少年だったのだ。

「シオン・スミカです。これから一年間、よろしくお願いします」

「お、男……………」

誰かが震えた声でそうつぶやいた。

当然だ。IS学園に男子生徒などありえない。確かに、織斑一夏という前例もあるが、それは彼が世界で唯一のISを起動できる男だからだ。

そう、唯一の（・・・）だ。

だからこそ、ISの操縦者養成教育機関であるIS学園に織斑一夏以外の男子生徒などありえない。そのありえない転校生シオンは笑顔で理由を説明する。

「はい。僕は男でも使えるISのテストパイロットでしてデータ採取と此方の在学している織斑」

「おまえシオンか！？なんでおまえがIS学園に、しかもテストパイロットでどういうことだよ！？」

訂正。説明しようとしたが空気の読めない男に遮られた。

だが、一夏を責めてはいけない。女の園IS学園にいきなり幼馴染み（しかも会うのは三年ぶり）が現れればパニックになって当然だ。

その女の園で普通に学生やってるオマエが言っなよ！とか言うてはいけない。

「ハア」。あのさ一夏、自己紹介の途中だからまた後でね」

「俺はかまって欲しい子供かよ！？」

「え、違うの？」

「相変わらずだなおまえ！？」

自己紹介そつちのけでぎゃあぎゃああと口喧嘩を始める男子生徒二人。そして二人の間であわあわとつろたえてる山田先生。目が涙目になっっているように見えるのは気のせいではないだろう。

パアアアアンツ！！　いきなり頭を叩かれて悶える二人。

「自己紹介もまともにできんのか。馬鹿者共」

「千冬姉」

「せんせい
師匠」

パアアアアンツ！！再び頭を叩かれる二人。因みに物凄く痛い。出席簿というものは存外硬いものだ。

「織斑先生と呼べ。学習しろ」

「はい、織斑先生」

いそいそと席に座る一夏と自己紹介を再開するシオン。二人とも織斑千冬に逆らってはいけないということは体に染み付いているのだ。

「きゃ……」

「きゃ？」

「きゃあああああああー……っ！！」

ソニックウェーブというやつだろうか。冗談ではなく、クラスの中心を起点に歓喜の叫びはあっという間に伝播する。

「男子！二人目の男子！！」

「しかもうちのクラス！」

「そして、千冬様の弟子！」

「織斑君とは違う、線の細い美形！」

「地球に生まれてよかったー！」

『ねえ、一夏』

シオンは、めせんて、なかまをよんた！

『なんだ、シオン』

『助けて』

『無理』

しかし、なかまはあらわれなかった！

「あー、騒ぐな、静かにしろ。」

千冬の援護が入り、シオンは逃げることに成功。自己紹介の締めくくりをする。

「まだ僕はこの学校に慣れていないので、困った事があつたら助け
てくれると幸いです。それでは、この一年間よろしく御願います」

シオンは爽やかな微笑みを浮かべ、深々と一礼する。こうして、
波乱だらけの自己紹介が幕を閉じた。

一時間目が終わって休み時間。「だ、駄目だ……」と言って机に倒れ込む一夏を見て、シオンはため息をつく。

「そんなので大丈夫なの？クラス代表を決める際になぜか推薦され、それが我慢できないと言い絡んできたイギリス代表候補生セシリア・オルコットと口論の末、売り言葉に買い言葉で決闘することになった授業内容も解らない織斑一夏君」

「なんで説明口調……？そういうならISについて教えてくれよ」「無理。僕のISは普通のISとは仕組みが違うから」

ガツクリと項垂れる一夏。シオンは再度ため息をつく。

「……だったら、篝ちゃんを頼ればいいんじゃないの？というか一体なにをしたのさ？篝ちゃんの機嫌が悪すぎて、挨拶にもいけないんだけど」

シオンは親指で窓際最前列の席を指差す。長い髪をポニーテールにした女子が眉間にシワを寄せて不機嫌そうな顔で二人をチラチラと見てきていた。

彼女は篠ノ之箒。IS開発者の篠ノ之東の妹にあたり、一夏とシオンの幼馴染でもある。

「なんで箒の機嫌が悪い。俺の性なんだよ？」

「こついつ時は毎回一夏が原因だったという経験則」

下らない事言っていないでキリキリ吐けよコラ、という感じのオーラ全開のシオン。一夏は逃げ切れないと悟り、嫌々ながらもポツポツと語りだした。

「つまり、昨日寮の自分の部屋に行ったら風呂上がりの箒ちゃんがいる、部屋が箒ちゃんとの相部屋であることが判明。不適切な言葉と行動で箒ちゃんを怒らせて頭を竹刀で叩かれたりしたと」

「……まあ、だいたいそんな感じ」

何か釈然としない言われ方だが、間違ってもいないので肯定する一夏。シオンは思案顔でうんうんと頷く。

そして数秒の間を置いた後、満面の笑顔を浮かべ。

「一遍死ねよ、テメエ」

底冷えする声と共に渾身の左ストレートを一夏の顎へ放った。

そんなこんなで、午前もいよいよ最後の授業である。

コアに関する講義が行われた。

そこで一つの問題が起こった。

IS開発者【篠ノ之 束】が、篝の姉であるとバレてしまったのだ。珍しい名字である以上、いつかは分かる事なのでそれ自体は仕方ないことだ。

だが興味本位で騒がれたことが、彼女の何かに触れてしまった。

「あの人は関係ないッ!!」

一喝。シン、と教室全体が静まり返った。

「声を荒らげてすまない。だけど、私はあの人じゃない……教えられないような事は、何も無い……」

明確な拒絶。否、敵意と呼んだ方が正しいであろう感情。

それを吐き出すと篤はつい、と窓の方を向いてしまった。

シオンはメモ用紙にメッセージを書き、講義を続けている真耶にバレないように前の席の一夏に渡す。一夏も返事を書き、後ろに渡す。二人しかいない男子という理由で前後の席になっていたのが幸いした。

『一夏、わかってる？』

『いや。篤のヤツ束さんとそんなに仲、悪かったか……？』

『束さんは唯一、ISのコアを作る人だ。そんな超重要人物が行方不明になったらどうなるか………簡単だよ。その行き先を調べるために家族に取り調べがいく。そのあとは、ISを利用しようとする死の商人に襲われるかもしれないから家族全員に重要人物保護プログラムをかけて、家族全員離ればなれにした上で、西へ東へ引越し。ひよっとしたらIS学園に入学するまでは執拗な監視や聴取があったのかもね』

グシャリ。と、一夏は渡されたメモ用紙を握り潰した。そして強く拳を握り締める。

『……………だからか？』

『多分ね。一夏だって、色々大変だったんじゃないの？』
『そういや、そうだったな……』

もう一度、一夏は箒を見る。

「……………」

その姿は何処か寂しげに見えた。

『じゃあ、僕是对セシリア・オルコット用の準備があるから箒ちゃん
のフォローよろしく。学食集合ね』

『悪いな色々』

『いって、別に。それよりも箒ちゃんを慰める言葉を考えるなよ』
『……………分かってるって』

授業も終わり、昼休み。

一夏は早速、先程のフォローをするべく動いた。

「箒、今日は食堂に行ってみないか？シオンも待ってる」
「……………行かない」

予想通りの返事。やはり、へソを曲げてしまっているようだ。

昔から箒は、集団から外れる事が多々あった。その度に、一夏とシオンが迎えに行っていた。

「まあ、そう言うなって。ほらほら、立った立った」

一夏は箒の腕を掴むと、強引に引き上げる。こういう場合は強引に動かすのが正解だというのは経験で解っている。

「なにをっ……こら、腕を組むなっ!」

「おばさん達には世話になったし、なにより幼馴染で同門なんだ。世話ぐらい焼かせるよ」

「なっ……!?!」

赤くなっている箒を無視して引きずっていく。

「いい加減機嫌直せ。シオンもこのままじゃ挨拶にもいけないって悲しんでたぞ」

ピタリと箒の抵抗が止んだ。

「シオンが……?」

「……………」

分かっていてやった事だったのだが、どうにも釈然としない。

自分にはいつもツンケンして、怒鳴って、竹刀で叩いたり何だりしてくるくせに、シオンとはものすごく仲が良いのだ。

子供の頃、箒が自分に見せたことがない、素直な笑顔をシオンに向けて楽しそうに会話していた事を良く覚えている。

一度「もしかして、シオンのこと好きなのか？」と聞いてみたら、顔を真っ赤にして「バカ」「朴念仁」「鈍感」などと罵られながら殴られた。

六年経った今でも、箒はシオンの名前だけで機嫌をあっさりと直した。

それがなんかよく分からないけど、悔しかった。

「何してるの二人とも……」

「いや、オマエに言われた通り箸を引つ張って学食にきたんだけど……」

「いや、そこじゃなくて……」

なんで、腕を組んでんの？

箸のムスツとした顔を見て、またいつものお人好し属性の発動したのかと理解する。

（箸ちゃんも照れてなにも言えなくなってるし……）
ムスツとした顔で視線だけを天井に逃がす箸。その頬がうつすらと朱色になっているのを見て、6年たっても変わってないな、と悟る。

ああ、相変わらず勝ち目無しか……

ずっと昔から分かっていた事を再度理解した、それだけの事なのにシオンはちくりと胸が痛むのを感じた。それを振り払うように首を振り、自分もランチを注文する。

「そ、その……ありが……」

「はい、日替わり二つお持ち」

「ありがとう、おばちゃん。おお、うまそつだ」

「……………」

「セイツー!!」

ズドムツ！とシオンの左正拳づきが一夏の脇腹に突き刺さった。

「痛っつてええ！何すんだよ！？しかも左で！」

「うっさい。篝ちゃんがお礼言おうとしてるのに他の人と喋るなバカ」

「馬鹿とは何だ馬鹿とは」

「黙れ、死ねよ朴念仁」

「い、一夏……その、ありがとう……シオンも……」

「ああ、気にするなよ。幼馴染みだろ」

「そっだよ、篝ちゃん」

「ふふっ、お前ならそういうだろうな。それとシオン、そんなことを乱暴な扱いをして左腕は大丈夫なのか？」

心配そうに尋ねてくる篝にシオンは左手を開いたり閉じたりしながら答える。

「問題なし。むしろ生身の方より頑丈で、調子が良いくらいだよ」

「頑丈って分かってるならそっちで殴るなよな……」

「うっさい黙れ」

脇腹押さえながら泣き言言ってる一夏をバツサリと切り捨てて、早速今日の特訓の事を話した。

「……練習機を借りたのか？ 随分と早いな……」
「どうも候補生と世界唯一の特殊ケースの良いデータ取りになるから、みたい……放課後は頼むよ篤ちゃん？」
「任せておけ。剣の腕ならまだしも、ISで遅れはとらん」
「お、おう……頼むぜ？」

まるで剣道全国一位の篤より、自分の方が強いように聞こえるが、気のせいだろうと一夏は思い直す。

それが気のせいでないとな数時間後、一夏は知ることになった。

「……どづいつ事だ？」
「いや、どづいつことって言われても……」

IS《打鉄》を身に付けた篤の怒りとも取れる視線の先には、同じく《打鉄》を付けた一夏がいた。こっちは息を切らして倒れている。シオンは少し離れた所で苦笑い。

「何故、こんなにも弱くなっている……?」

「……受験勉強してたから、かな?」

「……中学は、何部に所属していた?」

「帰宅部。三年間皆勤賞」

まあ、実際は家庭を助けるためにバイトをしていたのだが。

「ッ!!!」

「ストップ!? 篝ちゃん落ち着いて!?!」

勢いよく太刀を振り上げた篝を必死に羽交い締めにするシオン。

当然の事ながらシオンもISを装着している。シオンの『男でも使えるIS』《ストレイド・リンクス》は、中世の騎士を思わせるスマートのフォルムをした灰色のISだ。左腕部には精密射撃特化のアサルトライフル、右腕部にはマシンガン、両背中にはミサイルポッドを装備した中距離射撃型である。

「……だいたい、無茶過ぎるぞ二対一なんて……」

息もたえだれな一夏は元気にドタバタやってる二人、というかシオンを睨む。シオンが一夏に言い渡した特訓メニューは酷く簡単なもので、篝とシオンを相手にした模擬戦で感覚をつかんで貰うというものだ。

「この程度でへこたれるな軟弱者め」
「仕方ないだろセシリア・オルコットのISは僕の《ストレイド》
と同じ中距離射撃型……しかも自律兵器を使ったオールレンジ攻撃
ができるんだから、こうでもしないと対策にならないよ。それとも、
啖呵切つといて不様に負けたいの？」

「ああっもう、わかったよ！！ だったら、とことんやってやる！
こい、二人ともツ！！」
「いい覚悟だ……手加減はせんぞ、一夏ツ！！」
「というか、最初から手を抜く気はないんだけどね」

澄んだ金属音と発砲音が、何度も響き渡った。

一方、ジークはIS学園のデータベースにハッキングを成功させ、
データを閲覧していた。だが、彼はキーボードとディスプレイを使
用していない。目を瞑り、思案顔で座っているだけだ。

より正確に言うなら、首筋に埋め込まれている金属製のジャック

から伸びた細長いケーブルが情報端末に接続されていた。

そのジャックは彼の生身の脳に直結されており、機械から直接情報を受け取れる。

もちろん人間が感知できる情報に翻訳する必要があるため、万能とはいかないが、十本指のインターフェイスでは不可能なこともできる。

額の裏辺りで高速で情報検索を続けながら、ジークは空いた手で携帯電話をいじくる。

通常の回線ではなく盗聴、逆探知防止用の秘匿回線で通話をかける。

『IS学園に入学する決心はついたのかしら、ジーク』

「冗談も大概にしとけよ、スコール。テムエの言ッてた《アレ》の可能性があるIS 織斑一夏の専用機とイギリスの第三世代との模擬戦が組まれたらしい」

『それで？』

「確か光学迷彩機能を付加させる後付^{イユイサ}装備が有ッただろ。アレを送ッてくれ」

ジークは口を三日月のように歪めて、いかにも楽しそうに笑った。

「直接乗り込んで確かめる」

白、灰、紅、そして黒（後書き）

次は戦闘パートの予定です。早くジーク君も絡めたいな……
当分先になるだろうけど（泣）

白と黒の胎動（前書き）

今回でセシリア戦を終われせる予定だったのですが、リアルが忙しくて書くのに時間がかかりそうなので取り合えず出来た分だけ上げます。

誠に申し訳ありません。 m () () m

白と黒の胎動

IS学園。それはIS運用協定 通称アラスカ条約に基づいて日本に設立された、IS操縦者育成用の特殊国立高等学校である。

操縦者に限らず専門のメカニックなど、ISに関連する人材はほぼこの学園で育成されており。また、学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、学園の関係者に対して一切の干渉が許されないという国際規約が存在し、それ故に他国のISとの比較や新技術の試験にも適しており、そういう面では重宝されている。

そのためIS学園は各国の最重要軍事機密である最新鋭ISを抱えている。当然それを守るために軍事基地なみの防衛設備を誇っており、正規の手続きも無しに浸入しようものなら蜂の巣にされるか、ミサイルで撃ち落とされることだろう。

だが、何事にも例外というものは存在する。

IS学園第三アリーナ直上100m地点。確かにそこには一機のISが空中に制止していた。学園の防衛設備の作動範囲内だというのに全てのセンサーやカメラはそのISには反応しなかった。そのISの搭乗者 ジークは眼下の第三アリーナを見下ろしている。

ジークは男であるがISを操ることができる。別にジークは一夏の

ような特別な人間ではないし、ジークのISも多少特別な造りをしてはいるがシオンの『ストレイド・リンクス』のように男にも使えるようには出てはいない。だが、ジークは自身の半身とも言えるISを起動させ、操ることができ、彼のISはジーク以外の男どころか女にすら操ることが出来ない。

その理由はジーク自身にも解らないし、今更調べる気もない。

（しかしスゲエな、こりゃあ。流石は亡国企業の『存在しない兵器』）

ジークは彼のISが今回使用した後付け装備の余りにもぶっ飛んだ性能に感嘆の息を漏らした。光学迷彩により目視の感知を不可能とし、あらゆるレーダーやセンサーによる探知もすり抜ける、戦闘機動さえしなければISのハイパーセンサーさえも誤魔化せるらしい。そのお陰で軍事基地並の防衛設備を誇るIS学園にもすんなりと潜入し、今もこうして居座ることが出来ている。

ジークが得体の知れない組織である亡国企業に傭兵として雇われているのは、凄まじい情報網とこういった秘匿された兵器を使用できるが故だ。

「二機の戦闘データとスペックデータの採取とは、つくづく面倒臭エ仕事だぜ」

ジークは、ぼやきながらISのハイパーセンサーを解析モードに切り替える。今回の潜入調査の目的はISの調査のみであり戦闘は厳禁と、スコールにキツク言われた。言われなくても三十機以上の

ISがいるところに喧嘩を売るなど御免被る。スコール達はどうか
ら織斑一夏の専用機だけではなくイギリスの第三世代IS、『ブル
ー・ティアーズ』にも興味があるらしく、織斑一夏の専用機だけで
はなくちゃんと二機とも分析してこいと言われた。

「そついやあ『ブルー・ティアーズ』のデータを元に二号機を開発
する、つウプランが上がってたな……………まさか二号機を強奪しよ
うとか考えてんじゃあねエだろうな……………」

その可能性は十分にありえる。そしてたぶんあの他人の事情を考
えない女は「ちよつと強奪してきて」と、お使いを頼むような軽い
調子で命令してくるだろう。できれば同じくISの強奪を主な任務
としている『マドカ』のヤツに御鉢が回りますようにとジークは祈
る。面倒な仕事など御免なのである。

正直言つてジークは雇い主である亡国企業の考えも目的も興味
がない。亡国企業に雇われているのは、仕事の対価として二つの・
・探し物を探して貰うためであつてスコール達の考えに賛同した
わけではない。というか目的も考えも聞かされていない。

だが、それでも構わない。もしも、亡国企業の目的が世界征服や
ら第三次世界大戦の勃発であつたとしても、そんな事はどうかだつて
いいことだ。

ジークにとって探し物を見つけて目的を果たすこと以外のこ
となど、全て些末事なのだから。

「頼むから《アレ》であッてくれよ。ヤツと見つけた手がかりなんだ」

ジークは楽しそうに口元を歪めた。だがそれは極めて狂暴な笑みだった。

一夏、シオン、箒の三人は第三アリーナAピットに来ていた。無論、クラス代表を決めるための試合、イギリス代表候補生セシリア・オルコットとの決闘のためだ。

だが、一つ問題が発生していた。

「……来ないな。大丈夫なのか？」

「正直不味いね。対策訓練もやつたし、適当に罵倒と挑発して冷静さを欠かせておいたけどやっぱりただの訓練機じゃ専用機とのスペック差が激しい」

「罵倒と挑発で……おまえそんな事もしてたのか……」

そう、まだ一夏の専用機が届いていないのだ。試合開始の時間までそう時間が無い。しかも彼の機体はまだ準備が出来ておらず、未だに待つだけの時間を過ごしていた。

「まだなのかよ。俺の機体は？」

「そう焦るな、もう少しで来るはずだ。なにも心配する事は」

「ない」そう言いかけた千冬だが、その言葉はピットに駆け込んできた真耶の言葉により遮られた。

「来ましたよ！ 織斑君の機体が！」

そう真耶が叫ぶと鈍い音がして、ピットの搬入口が開く。斜めに噛み合うタイプの防壁扉は、思い駆動音を響かせながらゆっくりとその向こう側を晒していく。

そこに、『白』が、いた。

白。真っ白。飾り気のない、無の色。眩しいほどの純白を纏ったISが、その装甲を開放して操縦者を静かに待っていた。

「これが……」

「はい！織斑くんの専用IS『しろこくま白式』ですー！」

真っ白のそれ。無機質なそれは、けれど一夏にはそれが自身を待っているように見えた。そう、こうなることをずっと前から待っていた。この時を、ただこの時を。

「すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ。できなければ負けるだけだ。わかったな」

千冬にせかされて、一夏は純白のISに触れる。

「あれ……？」

試験の時、初めてISに触れた時に感じた電撃のような感覚がなかった。ただ、馴染む。理解できる。これが何なのか。何のためにあるのか。理解できる。

「背中を預けるように、座る感じでいい。後は機体がやってくれる」

妙な感覚だった。生まれたときから我が身だったかのような一体感。融和するように、適合するように、《白式》が『繋がる』。

解像度を一気に上げたようなクリアな感覚。それが全身に広がり行き渡る。ISのハイパーセンサーが起動し、視界が360全方位に開ける。

戦闘待機状態のISを感知。操縦者セシリア・オルコット。
ISネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特
殊装備有り。

映し出されるデータはまるで昔から見慣れた物のように、違和感
なく認識される。

「ハイパーセンサーはちゃんと機能しているな。気分はどうだ、
一夏？」

ISのセンサーが僅かな声の震えを拾う。センサーがなければわ
からないほどの小さな震えであったが”織斑”ではなく”一夏”と
呼んでいることから、一夏には姉の心情が読み取ることが出来た。

「大丈夫、問題ないよ」
安心させるように、頷く。

一夏はそれとなく、箒達の方に意識を向ける。シオンは色々な感
情が混ざりあってしまっているような表情で。箒は何か言いたそう
な、けれど言葉を言葉を迷っているような、そういう表情をしてい
た。これも、おそらく普段ならわからないレベルだ。

「箒」

「な、なんだ？」

「行ってくる」

「あ……ああ、勝っていい」

その言葉に首肯で応えて、一夏はピット・ゲートに進む。かすかに体を傾けると《白式》はふわりと浮かび上がって前へと動いた。

「ここで負けたらヒーロー失格だよ、一夏」
「相変わらずおまえの期待は重いな……」

それに応えてこそその漢でしょ、と笑うシオンに苦笑いで答える一夏。

さて、無駄話はこちらまでだ。もう裏方に意識を向けている場合ではない。ゲートが開く。敵は既にそこにいるのだから。

クラス代表決定戦！！（前書き）

ようやくセシリア戦。なんか色々と詰め込み過ぎた気がします…
…なんか上手い修正案が思いついたら、上げようと思います。

クラス代表決定戦！！

「ようやく、来ましたわね」

アリーナ中央に鮮やかな青色の機体が浮いていた。イギリス製第三世代IS『ブルー・ティアーズ』。その外見は、特徴的なフィン・アーマーを四枚背に従え、どこか王国騎士のような気高さを感じさせる。手には二メートルを超す長大な銃器、六七口径特殊レーザーライフル『スターライトmk?』が握られていた。

その姿はシオンに嫌というほど見せられた戦闘映像のものとは違っていた。いや、外見はまったく変わっていないのだが、セシリアの身に纏う雰囲気が何か違う。一夏は思わず呟く。

「なんか、怒ってる？」

白人特有の透き通ったブルーの瞳は血走っているし、普段は高貴なオーラを出しているロールがかった金髪は今は憤怒のオーラを発している。一目で分かるほど明らかに怒っている。

ピクリツとセシリアの眉が動いた。どうやら一夏の小さな呟きを『ブルー・ティアーズ』が拾ったようだ。余計なことに。

「……………怒っている？ですって？当たり前ですわ！彼処まで虚仮にされて黙っているわけがないでしょうッ！！」

セシリアの高貴さの欠片もない咆哮に一夏は背筋を震わせる。心の中で（あのバカ、いったい何を言ったんだあッ!?）と叫ぶ。因みにそれを第三アリーナAピット内で聞いたとある少年が「計算通り」と言つて、笑つたとかなんとか。

「速攻で片付けて差し上げますわ！」

キュインツ！という耳をつんざくような独特の音と共に六七口径から閃光が放たれる。アリーナ・ステージの直径は二〇〇メートル。発射から目標到達までの時間、〇・四秒。強大な威力を秘めた光弾は正確に一夏の左肩を目掛けて飛び。

「うおっ!?!」

大きく身を捻って回避した《白式》の胸部装甲を掠めただけに止まった。

「回避された!?!」

中距離での射撃。ミドルレンジ自身の最も得意な攻撃を回避され、セシリアは僅かに動揺する。

バリアー貫通、ダメージ27。シールドエネルギー残量、5

73。実体ダメージ無し。

ISバトルは相手のシールドエネルギーを0にすれば勝利となる。相手に与えるダメージには二種類あり、一つはシールドダメージ。これは攻撃を受けた際、バリアーに使用されているシールドエネルギーを消耗し、0になれば負けである。

二つ目は実体ダメージ。バリアーを貫通して攻撃が通った場合だ。実体ダメージはその後の戦闘に大きく影響を及ぼす。

腕に受ければ武装が、推進機関スラスターに受ければ機動力が殺される。

更にISには【絶対防御】というものがあり、それが搭乗者の命を守っている。だが、貫通した攻撃が当たりこれが発動すると、大きくエネルギーを消耗してしまう。

しかし逆を言えば、これを相手に発動させられれば逆転も可能と言える。

今の場合は、バリアーは通されたが直撃はなく、絶対防御も発動しなかった。という報告がされたのだ。

「ええいッ！このッ！ちょこまこと！」

射撃射撃射撃。次々と放たれる光線の豪雨。だが、一夏は掠めることはあっても直撃することは無かった。

『いいかい、一夏。まず射撃というものは弾丸を見て避けることは不可能だ』

訓練の最中、そんな事をシオンに言われた。

だから見るべきなのは相手の目と呼吸だ。相手の動きの起こりを見て予測回避する、それはあらゆる武術の基本である。

だからこそシオンはセシリアを怒らせたのだ。感情的に動けば、本来意図的に隠している動きの起こりも浮き彫りになってくる。そうすれば相手の動きも読みやすくなる。

加えて、射撃戦闘には三次元座標認識、弾道予測、距離観測、反動制御、一零停止、特殊無反動旋回アフトリユートターン、弾丸特性、武装間相互干渉を含めた思考戦闘など、複雑な計算が必要となってくる。

苛立ちが募らせ冷静さを欠けば、当然それらの計算が疎かになり射撃精度を落としていく。

射撃手は常に冷徹であれ。

感情的になりやすいという時点で狙撃手としては二流だ。と、同じ距離射撃形のISを駆るシオンはセシリアを評価した。

(といっても、避けてるだけじゃ勝てない、装備は!?)

白式に問うと、すぐさま現在展開可能な装備の一覧が表示された。いや、それは一覧と言っているのか激しく微妙なものだった。

「一個しかないんだが……」

表示されたのは『近接ブレード』のみ。確かに近接戦の訓練しかして来なかったが、これはいくらなんでもあんまりだろう。

「ええい、ままよっ!」

素手でやるよりはいい!と、一夏は近接ブレード《名称未設定》を選択、呼び出し(コール)、展開する。

キィィィン。

意識を右手に集中する。光の粒子が集い一つの形を成していく。それは片刃、渡り一・六メートルの長大な『刀』と成って一夏の手の中に収まった。

「中距離射撃型であるわたくしに、近距離格闘装備で挑もうだなんて……笑止ですわ!」

ウンッ。と、音を立てて背部のフィン・アーマーから四つのビットが外れ、飛翔する。それこそが、『ブルー・ティアーズ』。機体名の由来にもなっている全方位攻撃を可能とする思考性無線誘導型BTレーザー兵器。

「さあ、踊りなさい！ 私 《セシリア・オルコット》と、IS《ブルー・ティアーズ》の奏でる円舞曲ワルツで！！」

セシリアが叫ぶのと同時に、ビットは放たれた猟犬の如く統率の取れた機動で一夏を取り囲み、砲撃を開始する。

「くっ……！！」

上下から放たれたレーザーを辛うじて防御、あるいは回避すると、その隙をつくようにセシリアのライフルが発光。レーザーが白式の左肩の装甲に着弾する。

装甲が一撃で吹き飛ぶ。直後、遅れてやってきた衝撃波に左腕がねじ切られるように引っ張られて、神経情報としての痛みが稲妻のように走った。瞬時に白式が自動姿勢制御を行ない姿勢を立て直す。

「クソ、避けきれない！」

白式の装備は近接ブレードのみ。つまり勝つためにはセシリア

の射撃を掻い潜り近距離戦シューターレンジに持ち込まなければならぬ。目の前にあるのは二十七メートルというセシリアとの距離は今の一夏にとつて数キロにも思える道のりだ。だが

「やっつてやるぞ」

引くわけにはいかない。そのための訓練も積んできた。激戦が始まった。

「そろそろ、ファイナル閉幕と参りましょう」

セシリアは笑みとともに左腕を横にかざす。すぐさま、命令を受けたビットが多角的な機動で接近してくる。

「くっ………!!」

四つのビットの先端が発光、レーザーを放つ。それをかろうじて回避、あるいは防御すると、その隙をセシリアのライフルが突いてくる。とにかくこのパターンだ。

練習通りのパターンだ。

セシリアが再度、左手を横に振る。すると、それまで待機していたビットが一夏に向かって飛翔する。

(よし！だいたいわかった！！)

放たれるレーザーをくぐり抜け、一閃。ガインツ！と重い金属を切り裂く感触が手に伝わる。真つ二つにされたビットは断面に青い稲妻を走らせ、爆散。　一つ目。

「なんですって!?!」

驚愕するセシリアに向けて、一夏は上段の構えで斬り込む。それをセシリアは後方に回避、また左手を振るい、ビットを操作する。

「ブルー・ティアーズは、毎回お前の意思を受けないと動かない。そして、その制御に意識が集中するために、お前自身はその間、攻撃ができない……そうだろ!?!」

「……っ!」

一夏は急停止、反転、そして真後ろに向けて飛び、背後に回り込ん

でいたビットの後部推進器をすれ違い様に切り落とす。 二つ目。

残るビットが、前後で挟み撃つ様に動く。

「そして攻撃を確実に当てるため、本命の攻撃は常に俺の”最も反応の遠い場所”つまり、背後から来る」

一夏は攻撃を紙一重の所で躲し、横薙ぎにブレードが振るう。ビットを両断。 三つ目。

「最初から全部お見通しさ。優秀な狙撃手のおかげでなあっ!!」

ブレードの振るった勢いのまま一回転し、逆方向から迫っていたビットのスラスターに回し蹴りを叩き込む。バキィツ!と金属が碎ける音が響く。スラスターから煙を吹き出し、ビットが墜落。

四つ目。

全方位攻撃を目的に作られた自立行動砲台 《ブルー・ティアーズ》。

その全てが破壊された。

「そんなバカな事が……!?!」

自身の最大の武器を破壊された事に深く動揺するセシリアに一夏

は鋒やぶを向ける。

「このまま一気に極めさせて貰う!」

セシリアの武器はライフル一丁のみ。その程度なら距離を詰めることは容易、「さっきから左手を閉じたり開いたりしているだろう。そして相手が近接武器を展開していないのならそのまま決着をつけることができるだろう。」

一夏はようやく見えた勝機に、わずかに心を踊らせた。

「はああ……すごいですねえ、織斑くん」

ピットでリアルタイムモニターを見ていた真耶がため息混じりにつぶやく。確かに一夏はISを動かして間もないとは思えないほどの健闘ぶりだった。

しかし、千冬とシオンは対照的に忌々しげな顔をする。

「あの馬鹿者。浮かれているな」

「え?どうしてわかるんですか?」

「さっきから左手を閉じたり開いたりしているだろう。あれは、あ

いつの昔からのクセだ。あれが出るときは、大抵簡単なミスをする」
「へえええ……。さすがご姉弟ですねー。そんな細かいことまで分かるなんて」

なんてなくそう言った真耶に、けれど千冬はハツとする。

「ま、まあ、なんだ。あれでも一応私の弟だからな……」

「あー、照れてるんですか？照れてるんですね？」

「せんせい師匠、分かり安過ぎるツンデレ発言は控えた方がいいかと」
「……………」

ぐっわしい！と、アイアンクローが二人に炸裂した。

「私はからかわれるのが嫌いだ」

「はっ、はいっ！わかりました！わかりましたから、離し あう
うっっ！」

「せんせい師匠っ！？ミシミシって、頭蓋骨が出してはいけない音を出して
アアアアアア！！」

篝はぎゃあぎゃああと騒ぐ3人を気にもかけずに、ずっとモニターを見つめていた。その表情は険しい。

「……………」

両手を合わせて無事を祈ったり、声を出して応援するような真似はしない。篝はそういった性格ではない。

だからこそ、その表情には計り知れない色々なものが含まれている。

(一夏……)

箒がほんの僅かだけ唇を噛んだとき、試合は大きく動いた。

捕った！

近距離に入った一夏は近接ブレード大上段に構え、振り上げる。
ショートレンジ
近距離では取り回しの効かない大型ライフルは役にたたない。確実に一撃が入るタイミングだった。

その時、セシリアの口元がにやり、と、歪む。

「かかりましたわね？」

腰部か広がるスカート状のアーマーが稼動し、白い筒状のパーツが一夏に向けられる。

「ブルー・ティアーズは六機ありましてよッ！！」

それこそ、セシリアの隠し札。
レーザー射撃行っビットではなく、ミサイルタイプ
弾道型。

一夏は加速している。この状況では、回避は不可能。

ドカアアアンツ！！

赤を通り越して白い爆発と光が一夏を包んだ。

「一夏っ……………!!」

モニターを見つめていた篤は、思わず悲鳴混じりの声を上げた。
さっきまで騒いでいた千冬、シオン、真耶の三人も、黒煙に埋ま
った画面を真剣な面持ちで注視する。

「ふん」

「ハア」

黒煙が晴れた時、千冬は鼻を鳴らし、シオンはため息をついた。けれど、その顔には安堵の色があった。

「機体に救われたな、馬鹿者め」
「いや本当、ヒーローだね。まったたく」

まだかすかに残っていた煙が弾けるように吹き飛んだ。その中心には、純白の機体があった。

そう、真の姿で

フォーマットとフィッシングが終了しました。

真の姿となった白式の背部推進機関は大きく展開して白と金色の翼となった。

IS装甲は、工業的な凹凸は消え、滑らかな流線とシャープさを合わせたものへと変わっていた。

それこそまるで、英雄が身に纏う鎧の如き姿。

ダメージは全て回復し、傷の一つさえ残っていない。

「ま、まさか一次移行ファースト・シフト……！？あ、あなた、初期設定の機体で、今まで戦っていましたの！？」

初期化型と一次移行済みでは、性能は段違いだ。

それは初期化と最適化に容量の殆どを取られ、操縦者へのサポートが殆ど無いからだ。

それが無くなり真正銘一夏の専用機となった、今のあの機体のポテンシャルがどれほどのものか、想像するだけで戦慄を覚える。

だが、何よりも変わったのはその武器だ。

近接ブレード・《雪片ゆきひら式型》

その刀身は、刀より反りのある太刀に近い。鎬にはわずかに溝があり、そこから呼応するように淡い光が噴出されている。

雪片。それは、かつて織村千冬が振るっていた専用IS装備の名称。刀に型成した形名。それが雪片。

……ああ、まったく。つくづく思い知らされる。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

あの三年前時も、六年前も、そして恐らく十五年前も。あの人はいつでも自分の姉だった。いつも自分を守ってくれた。でも、だか

らこそ、そろそろ守られるだけの関係を終わりにしようよ、一夏は心に誓う。

「俺も、俺の家族を守る」

「くっ……まだですわ!」

弾頭を再装填したビットが二機がセシリアの命令を受け、飛んでくる。それに反応し、一夏は右手の雪片を握りしめ　セシリアへ突撃する。

ギンツ！横一閃。両断されたビットは、慣性そのまま一夏の横を通り過ぎて、爆ぜた。爆発の衝撃が背中が届くよりも速く、一夏はセシリアの懐へ潜り込む。

「まずは千冬姉の名前を守るさっ!」

手の中でエネルギーが密度を増していくのを感じる。そして、セシリアの懐に飛び込んだ一夏は、下段から上段への逆袈裟払いを放ち　決着を告げるブザーが鳴り響いた。

『試合終了。勝者　織斑一夏』

篠ノ乃箒は喜悅した。

自分の幼馴染みが帰って（・・・）きたことに。

モニターの向こうで勝利を手にした幼馴染みへ笑顔を向ける。

一週間前に共に訓練をした時は随分となまってしまったと、落胆したが。

あれこそが、織斑一夏だ。

強くて、誰よりも強さの意味を知っていて、そしてなによりカッコイイ。

六年前に離れ離れになってしまい、六年間恋い焦がれて、六年の間孤独だった自分の心の拠り所であった人。

やっと、あの一夏が帰ってきた。自分の前に戻ってきてくれた。

その事があまりにも嬉しくて、箒は頬を緩めるのを止める事が出来なかった。

シオン・スミカは葛藤した。

自分の中にあるどす黒い感情を自覚して。

モニターを見つめている幕を見る。

その喜びに満ちた微笑みを見る。

恐らく自分がどれだけ望んでも、どれだけ努力しても手にいれることはできないだろう。

アレは織斑一夏に向けられるべきモノであって、自分のようなモノに向けられるべきモノじゃない。

いつだってヒロインの笑顔はヒーローに向けられるべきで、自分のような脇役には相応しくないのだ。

だけど、それでも、

あの笑顔を自分に向けて欲しい。あの笑顔を手に入れたい。あの笑顔を奪いたい。と、思うのは罪深いことなのか？

「ぎゃは」

ジークは歓喜した。

探し求めていた探し物の一つを見つけたことに。

それがオレ達オレたちが生まれてきた意味だから。

一夏は試合終了後、手早く着替えを済まして、千冬にIS起動におけるルールブック（アナタの街の電話帳としか見えない程の厚さのもの三冊）を渡され、ささっと帰って休めと厳命された。一夏自身も疲れていたのでささっと帰って休むことにした。

シオンと二人で寮への道をしばらく歩いていると、そこに人影があった。人影は一夏に気付くと、特徴的なポニーテールを揺らしながら、こちらに近づいてきた。

「なんだよ箒、先に帰ってきてくれって言ったのに……」

「いや、何だ……その、聞きたい事があったな……」

先程から、チラチラと向けられる視線。一夏と目が合つと箒は視線を反らしてしまう。

「なんだよさつきから。何か聞きたい事があったんじゃないのか？」

「う、うむ……その、特訓は、まだ続けるのか……？」

「そりゃまあ……千冬姉にも、時間があれば白式を動かさせて言

われてるし……もっともつと強くないと……守れないからな」

そう答え、一夏は少しだけ遠くを見詰める。その横顔は、篝の思
い出にある幼い少年の顔とは違い、一人の男としてのそれであった。

「……………そうか、そうか。なら、今後も私が相手を務めてやろう。
放課後は絶対にあけておくんだぞ？」

「お、おう……………」

「フツ、フツ……………」

篝は何故か嬉しそうに笑う。一夏は何故急に笑い出したのか解ら
なくて首を傾げる。

「ねえ、一夏」

背後から声をかけられた。振り返るとシオンが顔を伏せて、思い
詰めた雰囲気を出していた。

「一つ、お願いがあるんだけど……………」

「お、おう。なんだ？」

シオンの有無を言わせぬ雰囲気は一夏はほとんどの反射で頷く。
シオンは弱々しく、かぼそい声で言った。

「僕と戦ってくれないか？」

クラス代表決定戦！！（後書き）

次はいよいよオリジナルキャラの戦闘……長かった（泣）

行間1（前書き）

オリ主2対一夏……の一步手前。書かなくちゃいけない所があったので急いで書き上げたもの。
感想待ってます

行間1

サアアアア……………

シャワーノズルから熱いめのお湯が噴き出す。水滴は肌に当たっては弾け、またボディラインをなぞるように流れていく。白人にしては珍しく均整の取れた体と、そこから生まれる流線美はちよつとしたセシリアの自慢だ。

しゅっと伸びた脚は艶めかしくもスタイリッシュで、そこいらのアイドルに引けを取らないどころか勝っているくらいである。

その体にシャワーを浴びながら、セシリアは物思いに耽っていた。

(今日の試合)

いつだって勝利をものにしてきたセシリアにとって、この困惑はひどく落ち着かないものだった。

(織斑、一夏)

あの男子のことを思い出す。そして、自分のことを虚仮にしたシオン・スミカの言っていた事を思い出す。

『力と強さの意味もわかっていない君じゃあ、一夏には絶対に勝てないよ』

散々、自分の欠点を言い並べてた後、そう言い残して彼は去っていった。

あの、強い意志の宿った瞳がそういうことだったのだろうか。それは、セシリアの父親を逆連想させた。

名家に婿入りした父は、多くの引け目を感じていただろう。さらに、ISが発表され、父の態度はますます弱いものになった。母は強い人で、それをどこか鬱陶しそうだった。

そう。『だった』。過去形だ。三年前に事故で他界した。いつも別々に暮らしていた両親が、なぜその日に限って一緒にいたのか、未だ分からない。

とてもあつさりと、両親は還らぬ人となった。

手元には莫大な遺産が残り、それを守るための勉強の一環で受けたIS適性テストでA+が出た。政府から国籍保持のために様々な好条件が出され、遺産を守るために即断した。第三世代装備ブルー・ティアーズの第一次運用試験者に選抜され、稼動データと戦闘経験値を得るため日本にやってきた。そして

出会ってしまった。織斑一夏と。理想の強さを持った男と。

「織斑、一夏……」

その名を口にする。どうしようもない程、胸が高鳴り、そつと自分の唇を撫でてみる。水滴に濡れた形のいい唇は、不思議な興奮を生み出した。

熱いのに甘く、切ないのに嬉しい。

なんだろう。この気持ちは。

意識すると途端に胸に広がる、この感情の奔流は。

知りたい。

その正体を。その向こう側にあるものを。

知りたい。一夏の、ことを。

「……………」

浴室には、ただただ水の流れる音だけが響いていた。

某国の某地方にある某企業の本社ビル。地域住民からバベルの塔と呼ばれる百階建てのビルは、亡国機業の活動拠点の一つである。

「で、なんでオレがいきなり日本から呼び戻されるハメになっただ」

ジークは今、ビルの百階の執務室にいる。白式とブルー・ティアーズの模擬戦データと可能な限り分析した二機のスペックデータを

提出したら、いきなり呼び出しを喰らった。

今にも嘔みつきそうなジークに対して部屋の主 スコアは、
柔らかな微笑みを浮かべた。

「だって、アナタをあのまま放置したら単独行動しそっじゃない？
例えば……織斑一夏を襲撃したり……とか？」

ケツ、とジークは吐き捨てる。完全に凶星だったため反論も出来
ない。

「あなたにとっては重要なことでも、こちらとしては困るのよ。あ
まり無茶をされると」

「……んなことはわかッてる。傭兵は依頼主クライアントの言うことには従うさ
……可能な限りな」

「……あなたの任務はMと同じ各国のISの強奪よ。それ以外であ
まりISを使うようなら」

ドンッ！ という空気が破裂する音が響き、部屋にあるものが全
て吹き飛ばす。

ISを部分展開したスコールが暴風の如く速さでジークに突撃。右
拳を叩き込む。

「ふふ、相変わらず速いわね」

「こりゃあ、なんの冗談だ？」

暴風の如きスコールの攻撃をジークはあっさりとISを部分展開した左腕で受け止めた。

スコールがISの部分展開を開始してからジークに向けて拳を突きだすまでの間、コンマ数秒。スコールの攻撃速度もだが、それを見てから対処し、防御したジークの技量は並の操縦者を遙かに上回っていた。

ジークは睨みつけるが、スコールはいつも通りのニコニコとした笑みを崩さない。

「ねえ、ジーク。あなたの目的がなんであるうと、私には関係ないわ。けれど、なるべく『亡国機業』^{ファントム・タスク}の一人、ジーク・キサラギでいてちょうだいね。……プロジェクト『^{アンサンブル}語られぬ者』、被験体NO.

「ッッッ!!」

轟ッ!!と、脚部スラスタを全解放しての瀑布のような回し蹴りがスコールを襲った。

人の身体など一発で真つ二つにするであろうその一撃は突如としてスコールを包んだ金色の繭に受け止められ、スコールの豊かな金髪を揺らす事も出来なかった。

「あらあら、怖いわね」

「テメエがその名で呼ぶんじゃねエッ!!」

獣の咆哮を上げ、視線で射殺さんとはかりに睨み付ける。その瞳

が東洋人らしい深い黒から変色し、光り輝く金色に変わっていた。スコールはやれやれと肩を竦める。

「はいはい、わかったわよ。だから武器を引っ込めて頂戴。部屋が壊れるわ」

「チッ！」

下らない挑発に乗ったことを恥じるように、ジークはISの部分展開を解く。瞳の色も金から黒へと戻る。

「貴方にはまだ暫くIS学園を探ってもらっわ。くれぐれも問題は起こさないようにね。そうすれば第四世代との決着をつける場も用意してあげる……もう一つの探し物である『あの子』も探し出してあげるしね」

「了解」

ジークは短く返事を返して、部屋から去るべく足を進める。

「そういえば、良かったのかよ？あの『世界で唯一男でも使えるIS』を調べなくて」

ドアの前にまでいったところでジークは疑問を口にする。

ジークに言い渡された任務は織斑一夏のISと代表候補生のISの調査だった。

つまり、シオン・スミカの『ストレイド・リンクス』は含まれていない。

「アレは別にいいのよ。私達にとっては、大した価値は無いから」
「なんでだ？正直、なんで動かせるのか分からねエ織斑一夏よりアツチの方が価値は高エと思うが？」

どういった理屈でESを動かしているのかが分からない一夏とは違い、ストレイドは技術として確立されている。データの価値でいけば明らかにストレイドの方が高いだろう。

だというのに、白式とストレイドの模擬戦と重なる時期にこうして呼び出された。まるで、ストレイドには一切の興味が無いかのよう。

純粋な疑問に首を傾げるジークにスコールはニコニコした笑顔を崩さず、言いきった。

「それは貴方に教えてもなんの意味も無いわよ」

それを聞いたジークはチツ、と忌々しげに舌打ちをして部屋を後にした。

「I Daisy, Daisy
Give me your answer do……」

何処にでもありそうな当たり前の幸せを謳った田舎者の恋の歌をジークはいつも通り不機嫌そうな顔で唄いながらビルの通路を歩く。道をしばらく歩いていると、そこに人影があつた。

15、16歳の日本人の少女だ。何処を見るわけでもなく鋭い目つきで空を睨んでいる。

「……なんか用か？ マドカ」

「……どうだった」

訝しげにジークが問いかけると、マドカ 亡国機業エージェン
ト、コードネーム『M』は主語も何も無い問いを返してきた。ジークは呆れたようにため息をつく。

「 織斑一夏のISがオレの標的だった……つウことで、織斑一夏はオレが貰うがかまわねエよな？」

問いかけてはいるが肯定以外は許さない凄みがそこにあつた。言外に否と言うなら殺すとジークは述べている。

だが、マドカは一切のそんなものは異に返さず、鼻を鳴らす。

「別にかまわん。元々ヤツは姉さんのついでだ。 だが、契約を

覚えているだろうか？」

「『互いの目的には最大限協力し、互いの決着には干渉しない』だ
る？」

二人には絶対に決着をつけなければならない相手がいる。

ジークは第四世代IS。

マドカは織斑千冬。

その決着のために二人は亡国機業を利用し、利用される関係にあるが奴等は信用できない。良いように使い潰される可能性すらある。故に二人は手を組み亡国機業とは別に独自で目的のために動いている。いざというときに、亡国機業を出し抜き、決着をつけるために。

「ま、今まで通り宜しく頼むぜ。共犯者」

二人は信頼関係で結ばれた仲間でも、友でも、同士でもない。利害関係だけで結ばれた共犯者だ。

「織斑一夏は勝手にしろ、だが姉さんに手を出すのは許さんぞ」

「了解、織斑千冬には手を出さねえよ。織斑マドカさん」

念を押したマドカの言葉にジークは茶化すように答える。

マドカは、織斑千冬と瓜二つの顔を不機嫌そうに歪めたのち、踵を返して自身の部屋に帰っていった。

ジークはそれを見送った後、再び唄いながら足を進める。

「 I'm half crazy all for the
love of you……」

歌う、吟う、彼は唄う。

それが何のためなのか。誰のためなのか。誰に向けての歌なのか。
それは彼自身にも分からない。それでも、彼は歌い続ける。

その恋の歌はジークにとって、数少ない過去との繋がりだから。

白式VS迷い猫(前書き)

一夏VSオリ主2の戦闘回。色々と独自解釈とか含みます。

シオンのストレイド・リンクスの外見は漫画版ゴーレム1のマントを取っ払い装備を変更して、全身装甲ではなく普通のISにした感じですか。

白式VS迷い猫

風が吹いてきた 誰もいない朝
音もなくやさしく ゆれるゆりかご
見えるものは ただ青く晴れた空

シオンはある意味不運とも言えるし、ある意味幸運とも言える少年だ。

シオン・スミカ、15歳。身長171cm、体重68kg。病気も持たない至って健康体。

ただし、左腕のみ機械義手。

成長に合わせて交換してきたので現在で三代目である。制作したのは篠ノ乃束だ。何度か鉄の城ばりのロケットパンチ機能やら天元突破しそうなドリル機能を付けられそうになったが、毎回千冬の奮闘によって防がれた。

そんなこんなで、彼は義手と共に生きてきた。そんな彼が毎日欠かさず行う訓練がある。

それは至極簡単なトレーニングだ。
卵を割らなければ良い。

義手の左手でそれ丁寧に、曲芸のように弄ぶ。掌でバウンドさせ、甲に乗せ、二本立てた指の背で転がす。卵が遊ぶ範囲は腕にも及び、肘でバランスを取ることもあれば、手首から肩まで伝わせることもある。絶対に落としてはいけないし、力を込めすぎたり衝撃の吸収を失敗してもいけない。ヒビの一つでも入ればそこでトレーニングは終了だ。シンプル故に難しい。

十五になった現在、シオンは三十分間は絶え間なくそれを行えるようになっていた。最初は義手を無理なく動かせるようになるためにやっていたものだったが、今やその動きの精密性は生身の右手より遥かに高い。

昔はよく割ってしまったペナルティとして殻入りの目玉焼きをよく食べたものだが、今となっては朝飯前だ。

「どうして急にあの馬鹿と戦おうと思った？」

早朝。食堂で卵を使用してのトレーニングをしていた時、千冬がいつもの仏頂面でそんな事を聞いてきた。あの馬鹿とは勿論一夏のことだ。

「何でって、戦ってみたくなかっただけですよ」

冗談めかして笑うシオンに対して千冬はくすりとみせず腕を組ながら静かにシオンの瞳を見据える。

観念した。

隠し通すことなど始めからできる筈が無かったのだ。

シオンは照れ隠しのように苦笑し、自分の心境を一番表しているだろう右腕を差し出す。

手は、小刻みに震えていた。

止まらないのだ。ずっと。

一夏に勝負を挑んだ時から自分でも自覚出来るほど体が浮き足立っている。冷静なのは機械仕掛けの左腕だけだ。日課の訓練をやっていたのも単純に何か体を動かしていないと落ち着かなかつたからだ。

「やはりな。これまでの態度から考えておかしいと思っていたが」

「……………狡いですね、師匠せんせいは。何でもお見通しだ」

「当たり前だ。何年の付き合いだと思っている」

千冬は震えているシオンの右手に手を重ねた。昔 始めて会ったときから馴れ親しんだ温もりがシオンの右手を包み込む。千冬は相変わらずの不貞腐れた番犬のような表情だが、そこに険は無かった。

「気休めは言わん。オマエがあいぢかの馬鹿に対してどんな感情を持っているかは、私も少しは分かっているつもりだ」

シオンが一夏に抱いている感情は、情景と嫉妬が、一番当てはまるだろう。

自分の全てを賭けて誰か守りたいと、そのために強く在ろうとする一夏の余りにも純粹な願いを、希望を体現したその姿は、シオンにとって恩人である千冬と共に憧れの対象だ。

だが、同時にシオンが望むものを全て持っている一夏に対して嫉妬を感じているのも分かっている。

思えば、ISという力を手に入れ努力してきたのも、単純に何でもいいから一夏に勝ちたかったからなのしれない。

それらを分かった上で、千冬は言う。

「戦って見極めてこい。そうしなければ解らない事もある。なに、オマエなら大丈夫さ。なにせ、私が仕込んだのだからな」

「……………ハハ、師匠せんせいの期待に応えるのは本当に大変だ」
「何を言っている、私はオマエが出来ることしか言わないぞ」

千冬は口端を吊り上げて不敵に笑う。右手を強く握りしめられた。人の温もりと心地好い圧を感じた所でパツと離される。

自分の右手に視線を落とすシオンの背を千冬は平手で思いつきり叩いた。

「面倒かけてすみません。ありがとうございます」

「礼ならいらん。代わりに結果を持ってこい」

はい、とシオンは力強く頷いた。

いつの間にか、シオンの震えは収まっていた。

「一夏、シオンはいつたいどうしたんだ？最近思い詰めた顔ばかりしているが」

体を休めながら、箒がそんな事を聞いてきた。

時間は放課後、場所は剣道場。今日は箒の訓練機の使用許可が降りなかったので、剣術訓練をすることになった。武装が雪片しか無い白式としては単純な剣術訓練も重要になってくる。

「分からない。……アイツは一人で背負い込むところあるからな」

一夏とシオンは幼馴染みで小さい頃からの付き合いだが、一夏はシオンが泣いているのを見たことがない。小学生の頃髪の色と肌の色が原因でイジメにあっていた時もいつも困ったように笑うだけで泣き言一つ言わなかった。

「相変わらずか……全く、私達を頼れば良いものを」

不機嫌そうに呟く筈に一夏も同意する。シオンはなんでも一人で背負い込んで、一人で解決しようとする傾向がある。それは一夏や筈のような周りの人間にとっては見ていて歯痒いし、そのうち押し潰されてしまうのではないかと心配でもある。

だが、一夏はそれが羨ましいと思う時がある。姉に守られて育った一夏にとっては自分一人で問題を解決していけるシオンには憧れすら覚える。

そして何よりもシオンは千冬に認められている。シオンは千冬を師匠せんせいと呼んで慕っているが、一夏が知る限りは何かを教わっている訳ではなかった。

だけど、あの二人は強い絆で結ばれている。シオンは千冬を師や親のように慕い、千冬はシオンの事を信頼している。自分のようなただ守られているだけの存在ではなく、千冬から認められ信頼されているシオンは正直言って羨ましい。

だからこそ、シオンと戦えるのは嬉しい。

(憧れてるヤツと戦えるのに燃えないのは男じゃない!!)

「さあ、特訓再開しようぜ筈！」

一夏は勢い良く立ち上がり、竹刀を構える。筈は一瞬呆気にとられたが、直ぐに立ち上がり竹刀を構える。

「いい心構えだ。付き合ってやる」
「ああ、頼むぜ」

竹刀の乾いた音が何度も剣道場に響いた。

「「バリア無効化攻撃？」」

聞き返すと、千冬は小さく頷く。シオンとの試合直前、雪片の特性を理解しているかという質問に首をかしげた一夏と箒に千冬が呆れながら説明、今に至る。

「《雪片》の特殊能力がそれだ。相手のバリア残量に関係なく、本体に直接ダメージを与えることができる。そうなるとどうなる？ 篠ノ乃」

「は、はいっ。《絶対防衛》が発動して、大幅にシールドエネルギーを削ぐことができます」

「そうだ。分かったか音無。私がかつて世界一の座にいたのも、《雪片》のその特殊能力によるところが大きい」

「あれ？それなら一撃喰らわせたなら勝てるじゃないですか。無敵じゃないませんか？それ」

「そこだ。《雪片》の特殊攻撃は行つのにもまた、シールドエネルギーが必要になる」

「あー……」なるほど、合点がいった。つまり

「つまり……シールドエネルギーを攻撃に転換しているということですか？」

「そうだ。まあ、欠陥機だな」

「欠陥機！？千冬姉、今欠陥機つて言つたよな!？」

ズドムツ！……みんな、教師に対する言葉遣いは気をつけよう。

「言い方が悪かったな。そもそもISという物は完成していない。白式は他のISに比べて少し攻撃に偏っているだけだ。それをしっかり頭に入れておけばまだまだ強くなるさ。なにせ　私の弟だ」

変な信頼の置かれ方だが、それが千冬の照れ隠しだと分かっているので一夏には別段気にならない。

『こっちは準備終わったよー。そっちは？』

ピットの内に取りつけられたスピーカーからシオンの声が届く。どうやらもう、試合の時間らしい。

「よし。じゃあ、行ってくるよ。箒、千冬姉」

「あ、ああ。頑張ってください」

「不様な姿はさらすなよ」

応援と叱咤の言葉を受け、白式はアリーナの空へと飛び立った。

アリーナの大地に灰色の騎士が静かに佇んでいた。

身体を包む灰色の装甲は蛇腹状になっており、その下には無数のスラスターが見てとれる。全体的にスマートなフォルムが中世の全身甲冑を彷彿させる。

頭部には昆虫の触角のようなワイヤー状のアンテナが付けられたバイザー型のハイパーセンサー。スリット状に開いている装甲の奥に単眼型のセンサーレンズが蠢めきながら一夏をみつめている。

「ルーキーの一夏には悪いけど全力でやらせて貰うよ。師匠せんせいから叩き潰してやれって、言われてるし」

「当たり前だ。手なんか抜いたら本気で怒るぞ」

一夏は雪片を正眼に構える。対してシオンは両腕をだらりと垂らして構えらしい構えをとらない。

「じゃあ、本気で」

「ああ、本気で」

試合開始まで、五、四、三、二、一 開始。

「」ぶっ潰すっ！！」「」

「おおおっ！」

試合開始と同時に一夏はシオンに向けて突撃する。武装が雪片一本しかない白式と違いストレイド・リンクスは豊富な射撃武装がある。間合いで圧倒的に負けているのだから此方から攻めるしかない。先手必勝で距離を詰めれば、一気に戦況は一夏に傾く。

瞬間。ストレイド・リンクスの左腕が蛇のようになつた。

殆どノータイムで大きなあぎとのような銃口を滑らせ、銃声が一発分ほどにも重なる早撃ち。

発射された四発の弾丸は正確に装甲の薄い間接部を狙い撃ち、白式の勢いを殺し、体勢を崩す。

そこに間髪入れず右手の三〇口径マシンガン《ヒットマン》のフルオート射撃。ズガガガツツ！と、火薬が炸裂する音が響き大量の薬莖と銃弾が吐き出される。

「っ、うっおおお！？」

一夏は崩れた体勢のまま無理矢理転がるように回避。だが、完全には避けきれず何発かが着弾し、シールド・エネルギーが削られる。

身体を振り回してなんとか体勢を立て直すと、そこに左手の六五口径アサルトライフル《063AN》の狙撃。

「くっ……！」

大きく後ろに飛んで回避。回避には成功したが詰めるはずの距離を離されてしまった上に、シールド・エネルギーまで削られた。

「くそ、やっぱり簡単にはいかないか」

強い。

凄い。

ファーストアタックで一気に叩き込むつもりだったが出来なかった。シオンは一夏のISに振れて間もないとは思えない機動に内心で舌を巻きつつ、脳の別の部分では冷静にそれを分析していた。

武装はひどくシンプルで、戦術も単純。最高速で突撃を仕掛け、至近距離から切り捨てるという、極限まで「先の先」を突き詰めたスタイルだ。半端な者がそれを行えばただの雑魚であるが、白式にバリア無効化攻撃がある以上厄介な戦法でもある。

構築した戦術の一切を擦じ伏せ戦略を全て台無しにする、天災にも似た純粋な「力」。下手に策を弄したところで、それを頭から否定する「一撃必殺」だ。

だが、やりようはある。

シオンは白式への対応機動を算出し、先の攻防におけるトレース・データをISのコアに乗せした。

見てて下さい師匠^{せんせい}。僕は、負けませんから。

そしてこれが終わったなら箒に自分の想いを伝えよう。間違いない
くフラれるだろうが、それでも伝えないまま引き摺るよりはいいだ
ろう。

「す、凄いですねスミカ君の射撃。特に左腕の早さと正確性が」

ピットの真耶が、驚きを隠せず目を見開いていた。

斬り込もうとする一夏に対してシオンはマシンガンで弾幕を張り、
スピードを乗らせず、その間に距離を取る。被弾覚悟で強引に斬り
込もうとすれば、マシンガンの弾幕に隠れて飛んでくる左のライフ
ルの狙撃がそれを押しとどめ、シールド・エネルギーを削り落とし
ていく。

試合開始からこれが何度も繰り返されている。それを可能とし
ているのが、一夏が仕掛けようとした瞬間に確実に体制が崩れるよ
うに放たれる左手の正確無比な早撃ちだ。

拳動が鋭く、照準が正確で、発射が速すぎた。言うなれば、脳か
ら飛ばした指令を直接フィードバックしているようだったのだ。I
S操縦のラグ、という概念を飛び越えて。

「スミカの左腕の義手はISを使うにあたって専用のカスタマイズがされている」

「ISを使うのに義手をカスタマイズですか？」

聞いたことのない言葉に、真耶は眉をひそめる。

「本来ISの操縦は操縦者の脳とISのコアがリンクして操縦者の動きや思考をコアが受信し、それにISが様々な補助を加えて各部位を動かす。つまり、その間にコンマ数秒以下のラグがどうしても生まれる。だが、ヤツの機械義手はISのコアを通さずダイレクトでISを動かしている」

「なっ……!?!」

千冬の説明に更に目を見開く真耶。言葉にするのは簡単だが、それを実現させるとなれば話は別だ。

「それはコアを通した機体の操縦ではなく左腕がISそのもの(・・・)になるに等しい。故に、ヤツの最も得意な戦法は左腕の瞬発力を利用した高速狙撃だ」

「で、でも、それじゃあISの射撃補助を受けられませんよ!?!」

「その通りだ。だが、一流の狙撃手には時として機械的な補助は邪魔になる事もある。ヤツの腕前は既にその領域だよ」

「そんな、あの歳ですか!?! あ、あのスミカ君は織斑先生の事を師匠せんせいつて、呼んでますけどひょっとして射撃技術を教えたのは」

「

「いや、ヤツが暮らしていた孤児園の園長が大の射撃好きでな、ヤツの才能に気がついた園長が幼い頃から仕込んだんだ。私がやったことはIS操縦の基礎を通信教育で教えたくらいだよ」

「あ、でも、その誇らしげな顔は教え子の成長ぶりが嬉しいんですか?嬉しいんですね」

「……………」

ガシッ！ ヘッドロックが炸裂した。

「私はからかわれるのが嫌いだ」

「す、ス、ミマセンでした……き、キマってます、ギ、ギブです」

いつも通りのやりとりをしている千冬と真耶を他所に箒はモニターに釘付けになっていた。

おそらくシオンの実力は代表候補生のそれに匹敵するだろう。

そして、一夏はそのシオンと押されながらも戦えている。

（二人とも、本当に変わったのだな）

箒が二人の幼馴染みに六年ぶりに再会して二週間程。箒は昔と変わった 成長した二人に驚いてばかりだ。外見もそうだが、戦っているのを見れば解る。二人供本当に強くなった。

だが、それは当たり前前的事でもある。六年もたてば子供だった彼等が心身共に大きく成長するのは当たり前前的事だ。

だったら、自分はどうかだろうか？

恐らく、何も変わっていないだろうと箒は思う。

体を鍛えるのは欠かさなかったので昔と比べれば力はついただろう。だが家族や一夏達と引き離され、一人ぼっちになった箒は何時

も楽しかった思い出にすがって生きてきた。そんな自分が本当の意味で強くなれたとは思えない。

そんな自分が少し、情けなかった。

「ああもう！ いい加減バンバン撃つの止める！ 近づけないだろ
！！」

「だったらそっちはいい加減当たりなよ。避けてばかりでないで
さあ！」

「断る！！」

「まったく、そんな鬱陶しい回避術何処で覚えたんだか！？」

「お前がスパルタ教育で覚えさせんだろ！？」

凄い子供っぽいやり取りをしながら攻防を繰り返す二人。

シオンはマシンガンで一夏を牽制しながら時折マシンガンの弾幕を隠れ簾にライフルで狙撃するが、セリア対策にみっちり射撃回避訓練を積んだ一夏が回避に専念するとなると当てることはかなり困難だった。しかし、一夏も正確無比なシオンの射撃によって攻めることが出来ない。

試合は完全に膠着状態に陥っていた。

どうする、どうすればいい。

マシンガンとライフルで弾幕を張りながら、確かにこちらを見ているシオン。その銃弾を避けながら、一夏は必死に思考を巡らせた。

接近を許されず一定の距離を保たれている、状況は変わっていない。というよりむしろ悪化していると言えよう。回避しきれなかった銃弾が僅かだが確実にシールドエネルギーを削っていつている、このままいけばタイムアップの判定負けになるよりも早くシールドエネルギーが底をつき負ける。

――何か隙さえあればっ!?

一度でも接近できれば勝機はある。見る限りはストレイド・リンクスは接近戦武器を持っていない、仮に持っていたとしても白式のスピードなら近距離にさえ入れれば武器を展開するよりも速く一撃を加えるが出来るだろう。そして、白式のバリア無効化攻撃なら一発逆転も可能だ。

「そろそろ終わらせて貰うよ、一夏あ!」

ストレイド・リンクスの両肩のミサイルポットが前方部が開き、左右一発ずつ大型ミサイルを発射した。だが、その弾速は遅い。

――これなら避けッ!?

一夏が回避機動に移った瞬間、ミサイルの殻が展開し内部から八つのミサイルが射出された。左右合計16発のミサイルが一夏を包囲するように高速接近する。

「そ、そんなのありかよっ!?!」

分裂ミサイルスプレットの絨毯爆撃によってアリーナの一角が爆炎と爆煙に包まれた。

(やって……………無いな)

爆煙に包まれたアリーナの一角を見つめてシオンは一夏の健在を確認する。

だが、一夏は煙から一向に出てこない。
目くらまし。

ISのハイパーセンサーは当初、広大な宇宙空間に置いて星の光から自分の座標位置を認識するために開発された物である。

現在は制限をされているが、視覚能力 見る力というものを大きく引き上げるシステムなのだ。

そこに各種センサーが加わることで、全方位認識システムを構築できるのである。

だがそれでも、実際に見えているのとは僅かにズレが生まれる。故に反応の差異も生まれる。

——中々に良い作戦だけど、甘いよ

バイザー型ハイパーセンサーのアイセンサーが不気味に動く。高速で精密射撃を行うために過剰と呼ばれても可笑しくないほどに搭載されたセンサー群が、爆煙と土煙の中に姿を隠す一夏の姿を捉える。上空、距離200。

——上空からの奇襲、残念だけだ！！

必中の間合い。シオンはそう判断し、真上を見上げる。

「……ッ！！」

それは、一夏の畏だった。

上を向いた時、ストレイド・リンクスの光学センサーを光が埋める。視界が真っ白になる。シオンは照準を見失い、その時、敵のやったことを知った。

太陽を背に！？

一瞬の揺らぎ。

その一瞬は、一夏にとっては十分な時間だった。

世界で最も眩い光を背負って、純白のISが疾駆する。太陽の光は、機体のどんな装備よりも勝る攪乱効果をもたらしてくれた。

『ワンオフ・アビリティ
単一仕様能力、零落白夜発動』

雪片式型が変形し、エネルギーの刃を形成する。

それこそが白式の唯一にして絶対の武器。本来ISが様々な武装使うために存在する拡張領域パススロットの全領域を使って振るわれるその攻撃力は全ISの中でもトップクラス。

「おおっらああー!!」

「ツツツツ!!」

咄嗟に装甲の下スラスタを全解放して後退するシオンに向けて雪片の一閃。

バリアーが風船のように弾け飛び、盾にした右手のマシガンごと胸部装甲がバターのようになり切られる。

「ー浅いつ!」

胸部装甲は斬り裂いたがそれに守られたシオン本人には届いていない。それでは絶対防御が発動されない。

「ーもうー撃つ!!」

「ー夏はバッシュ・ブ・イナード・シャル・キャンセラで慣性を擦り伏せ、地を蹴って後退するシオンへと斬りかかる。」

――負ける。

振りかざされた雪片を見てシオンはそう理解した。

先の斬撃で前面のスラスタの半数が潰され回避は不可能。絶大な攻撃力を誇る零落白夜の前に防御など不可能。

故に、敗北は必至。

実力では此方が圧倒的に上回っていたはずだ。だが、それを一瞬の機転で突き崩された。

そう、このままではシオンは一夏に負ける。

機体と動かすための特殊な通信装置を体に埋め込み、ストレイド・リンクスの要求する特殊な操縦法とIS戦闘の技術を身につける為に千冬にも迷惑をかけながらも必死な想いで訓練を積んだ。今はだいぶマシになったが始めた頃は体にかかる負荷に血へドを吐いた事も一度や二度じゃない。

それらの努力全てがISに触れてわずかに数ヶ月程度の一夏の努力に敗北する。

その事実が自分と一夏の埋められない差を突きつけてきているように感じた。

「フツ……ザケルナアアアツ!!!!!!」

憤怒の叫びを上げ、無意識に左腕を振るう。真っ赤な衝動が腹の底から湧き上がり、ストレイド・リンクスのセンサーレンズが歪んだ光を放ち、シオンの寓意を聞き届けた。

認められない。

「ーなんだそれは、そんな簡単に踏みにじられていいものか、俺の覚悟は、想いは、努力は、そんなに価値の無いモノだったのか！！」

無骨な大口径ライフルが腕部と一体化しているかのように正確に照準し、目にも止まらぬ速さで発砲。狙いは雪片を握る白式の手銃弾は正確に白式の手に着弾し、雪片を弾き飛ばす。ライフルの排莢。衝撃に耐えきれず、重心を崩されコントロールを失う一夏。

シオンはすかさず、クロス・クリッド・ターン三次元跳躍旋回で一夏の背後に飛び、再びライフルを鋭く振るう。硝煙が弧を描き、銃口がぴたりと一夏の背で止まった。

第二射、発砲。魔弾は装甲を失っている部分に喰らいつき、絶対防御を起動させる。

直後には、白式のシールド・エネルギーが0になり試合終了のブザーが鳴り響く。

第一射の葉莢が地面に落ちるよりも早い、あっという間の出来事だった。

おまえが世界に生まれてきたことを

人は祝うだろう 涙の中で

温かな体と ほほえみと夢と

憎しみと 孤独を包むゆりかご

白式VS迷い猫（後書き）

シオンの話も大体終わってきたので、次からちゃんと一夏とヒロイン達を中心に書いていきたいです！！！！！

その後の彼等（前書き）

仕事が忙しかったので間が開いてしまいました。

しかし、今回の話ほど自分の文才の無さを痛感したことはありません。読みにくかったらありやしない。

その後の彼等

シオンが箒を好きになった理由はとても単純で、ただの一目惚れだ。偶然顔を出した一夏が通っていた道場で、見かけた髪の毛の長い綺麗な子。その、意思と活力に満ちた瞳に見とれた。

人というものは、案外簡単に恋に落ちるものだ。

その後シオンは、ちよくちよく暇を見つけては道場に足を運ぶようにした。そのおかげで、一夏共々徐々に箒と仲良くなることができた。

箒と仲良くなって、しばらくたった頃、シオンはある相談を箒からされた。

それは可愛い恋愛相談だった。一夏が好きだけど素直になれないから協力して欲しいという内容の。

シオンはそれを快諾して箒の初恋成就のために色々協力するようにした。

理由は、これもまた単純で一夏と一緒にいる時の箒が一番可愛かったからだ。

だから、シオンは自分の気持ちを誰にも悟られないようにした。それが、原因で一夏や箒との三人の関係が崩れるのも、誰かに迷惑をかけるのも嫌だったからだ。幸いシオンは自分の感情を殺すのが上手かった。だから、シオンが箒に好意を抱いていることを知って

いる者はいない。

人が恋に落ちるのは、唐突で簡単だ。

だが、恋が終わるのも又、唐突で簡単だ。

「それでは、織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでとう〜！」

パン、パパン！

クラッカーが乱射される。一夏の頭の上に乗ってきた紙テープは、その実際重量よりもはるかに重く一夏の心にのしかかった。

「……………どうして、こうなった……………」

「一夏がセシリアに勝ったからじゃないかな」

窓に目をやる。『織斑一夏クラス代表就任パーティー』とデカデカと書いてある。やはり一夏が原因だったらしい。今は夕食後の自由時間。場所は寮の食堂。一年一組全員集合でドンチャン騒ぎの真っ最中だ。

試合が終わり、寮に帰ろうとした所を拉致られてこうなった訳だが、未だにパーティーの主演である一夏は項垂れている。

シオンはフウ、と息をつき、

「いい加減開き直った方がいいよ。」

「そうだよー、これでクラス対抗戦も盛り上がるし楽しまなきゃ損

だよ！」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ホントにねー」

「お前はいつの間に女子とそんなに仲良くなったっ！！」

シオンとクラスメイト達の波状攻撃に一夏は逆ギレするしかなかった。因みに上から、シオン、女子A、シオン、女子B、シオン、一夏の順だ。

「人気者だな、一夏」

「・・・本当にそう思うか？」

「ふんっ」

箒は不機嫌そうに鼻を鳴らすとそっぽを向いてお茶を啜った。

一夏はそんな箒の態度に訳がわからないといった感じで頭の上にくつつもの？マークを乱舞させている。そんな二人の様子を見てシオンはやってられないといった感じで肩を揺らす。

「はいはい。新聞部です。今話題の専用機持ち達にインタビューに来ましたー！」

突然の新聞部の登場でまた場がイエーイ！と、無駄に盛りあがった。

「あ、私は^{まゆみ}黛^{かおる}薫子。よろしくね。新聞部副部長やってます。はいこれ名刺」

受け取って名刺を見るとものすごい名前の画数が多かった。書く

時大変だろうな」と、どうでもいいことを考える一夏とシオン。

「ではではまずは織斑くん！クラス代表になった感想をどうぞ！」
「えーと……」

ボイスレコーダーをずっと一夏に向け、無邪気な子供のよう
に瞳を輝かせている。とてもとても乗り気じゃないが期待を裏切る
わけにはいかない。一夏はそんな弱い日本人である。

「まあ、なんとというか、頑張ります」

ズルツ！と、会場にいた全員が某新喜劇真つ青なずっこけたを披露
した。しかし、飲み物や食べ物が床に落とすようなことは無い。I
S学園の生徒は無駄にハイスペックだ。

「えー？もつといいコメントちょうだいよ。俺に触ると火傷す
るぜ、とか！」

随分と前時代的なコメントである。

「自分、不器用ですから」
「うわ、前時代的！」

自分の事は棚に上げる。まさにこの事だ。

「まあ、適当にねつ造しておくからいいとして。次はスミカ君イッ

「見よう！」

「えっ、僕もですか？」

隣で目から流れる汗を拭っている一夏など気に止めず、薫子は標的をシオンに変更。シオンは一夏と同じ轍を踏まないようなるべく冗談ぽく言った。

「シオン・スミカです。狙った獲物は女の子のハート以外なら外しません」

「なるほどなるほど、『狙った女は必ず落とす！』ね。いやあ、記事になるよ！」

よもや、自分の言ってる事の真逆の内容になるとは思っておらずシオンは仰天した。

「て、何、ただのタラシに捏造してるんですか!？」

『きゃあああああああ!！』

「なんか間違っつて形で広まってるっ!？」

シオンは必死に弁明するがもはや後の祭りである。

「心配するな、シオン。みんな、お前の事を分かってくれてるぞ」

「……一夏、へし折るよ」

「何をっ!？」

結局、シオンが誤解を解くのに数十分を有した。何故、こんなことになったのか考えたくなかった。

諸悪の根源の薫子は笑ってるだけだし、一夏は巻き込まれないように避難してるし、クラスメイト達は黄色い声上げてるだけで人の話を聞きやあしなかった。遠い目をした筈に「お前は変わったんだな」と言われた時はさすがに死にたくなかった。どうしてこうなった。

シオンは本気で泣きたくなかったがなんとか話の軌道を元に戻すことに成功した。

「じゃあ、次は注目の専用機持ち達の集合写真撮るからねー。三人ともくつついてねえー」

「えっ？ そ、そうですか……。分かり、ましたわ」

急にモジモジし始めるセシリアは、ちらちらと一夏を見ている。『チャンス到来、ただし安く見られないように気をつけなくては』
的な雰囲気。

「あの、撮った写真は当然いたたけますわよね？」

「当然」

「でしたら今すぐ着替えて」

「時間かかるからダメ。はい、さっさと並ぶ」

薫子は一夏、セシリア、シオンを殆ど密着状態で並ばせる。

「……………」

「？ なんだよ？」

「べ、別に、何でもありませんわ」

「こっちをじろじろ見てくるので何か用でもあったのかと思った

が、違つたらしい。首を傾げる一夏。

「……………」

「……なんだよ、箒」

「何でもない」

こつちをじろじろと不機嫌そうに睨んでくる箒。分けがわからな
いと首を再度傾げる一夏。

「……………」

「……なんだよ、シオン」

「いや、撃ち込んであげようかと思って」

「だから、何を!？」

フフフと、薄ら笑いを浮かべながらポケットに左手を差し込む
シオンに、背筋を凍らせる一夏。

「それじゃあ撮るよー。35×51÷24は?」

「え? えつと……2?」

「ブー、74・375でしたー」

パシャッとカメラのシャッターが押される。だが恐るべき行動
力をもって、一組全メンバーがシャッターが切られる瞬間に三人の
回りに集結していた。箒はシオンの手によって、キッチンと一夏の隣
のポジションをゲットしていた。しかも腕に抱きつく感じで。

「し、シオン！ オマエは何をやらせるんだ！？」
「箒ちゃん。これぐらいやっとなないと盗られちゃうよ」
「だ、だからと言って、いくらなんでも大胆すぎるだろうっ！」
「なあ、何を騒いでるんだ？」

顔を真っ赤にして騒ぎだす箒にアハハと愉快そうに笑いながらあしらうシオン。それを不思議そうな顔で見る一夏。

結果として撮影の後、幼なじみだからってズルいなどとセシリアを中心として文句を言われるハメになる。

そんなこんなでグダグダ感満載なパーティーは、グダグダと続いていった。

シオンは屋上のベンチに座り星空を眺めていた。女子達のハイテンションに振り回されて疲れてはいたがどうしても寝る気にはなれなかった。

ふと、左腕に視線を落とす。

思い出すのは一夏との試合の勝敗を決めたあの神業と呼べる二射だ。あの二射は明らかにシオンの技量を越えた業だった。シオン自身にも何故あんな事が出来たのか解らない。

そして、センサーレンズが放った謎の光。どこか歪んでいて、毒々しく、不吉な光だった。あの時シオンは、光の向こうに灰色の空を見た気がした。

ISが、シオンのアドレナリンを感知し、その戦闘意思を過剰に増幅させていたというのか。

しかし、シオン自身はまだそこにまで考えが至らない。ただ信じ難い己の所業と、あの時見た歪光と、灰の空と血のにおいて思考がまとまらない状態にあった。

目眩がした。ほんの一瞬、二つの腕が重なって見えた。

今、自分が見ているのは、自分自身の左腕なのか。それとも自身がリンクして動かしているストレイド・リンクス左腕なのか。

この左腕は、誰のものなのか。

「こんな時間に何をしている」

いきなり真横から声をかけられシオンははっとする。どうやら真横に人の気配にも気づかない程に考え事に没頭していたらしい。

シオンは頭を振って左腕のことを頭から追いだそうとする。

「……見回りですか？ 織村先生」

「そんなところだ。後、今は師匠せんせいでいい」

千冬はシオンの隣にどっかりと腰を降ろす。しばらくの沈黙の後、口を開いた。

「あの馬鹿と戦ってみて何か解ったか」

いきなりの前置きも無い問いかけにシオンは目を丸くしたが、すぐに笑みを溢した。どうやら師は試合前に沈んでいた自分の事をずっと気にしていたらしい。存外心配性な師に微笑みながらシオンは答えた。それは、力の無い笑みと呟きだった。

「……はい。まあ、色々……」

あの試合で分かったことは自分が力など関係なく一夏には敵わないということだ。

試合が終わり、ピットに降りた時篤が駆け寄ったのは勝った自分ではなく一夏だった。だから理解した。あの二人の間に自分など入り込む隙などないのだと。

試合が終わったら篤に想いを伝えようと思っていたが止めた。そんな事した所で良くなることなんて一つもなく、今まで築き上げてきた三人の關係に罅が入るだけだとシオンは思う。

失恋のショックは確かにあるが初めから覚悟していたことなので耐えられない事もない。

だけど、情けなかった。

篤が一夏に駆け寄ったの時『何故勝った自分じゃない』と考えてしまった自分自身が。千冬に迷惑をかけてまで力を身に付けたというのにルーキーである一夏に勝てたのは偶然だったという事実が。堪らなく、情けなかった。

矮小で弱い自分が許せない。シオン・スミカは弱くてはいけないのだ。生きたいかと問い、手を握ってくれた人に報いるためにも

呆れた、と言いたげなため息が聞こえた。

突然、シオンの上体が強く引き寄せられる。あたたかい体温と懐かしい芳香が身を包んだ。虚を突かれて息を呑み、数秒してようやく抱き寄せられたのだと知った。後頭部に、ごっつ、と軽い拳骨が当たる。

「……少しは、落ち着いたか」

懐かしい。

シオンは千冬の胸に抱かれたまま、無言でこくりと頷いた。

「お前は背負い込みすぎなんだ、馬鹿者」

シオンの中で肥大化していた焦燥感が静かに消沈していく。

ひどく安心したような気持ちだった。師の言葉はシオンの腹の底に落ち、温かみをもってじわりと浸透していく。思えばもう長いこと、こうして貰ったことが無かった。

シオンは力なく千冬に寄りかかり、ぽつりと呟く。

「すみま、せん」

「謝るな。よく頑張った……今は、それだけで十分なのだからな」

千冬はほとんど家族といって差し支えないこの少年を胸に抱きながら、静かに、優しくそう言った。シオンは始めて会った時のように千冬の体から伝わってくる温もりを静かに、噛み締めた。

そこで、再びシオンの視界に灰色の世界がちらついた。

空も大地も灰色の世界で、左腕が無い名も知らない誰か（・・・）が、生気を感じさせない顔で此方をじっと見詰めていた。

『 『

何かを言っている。だが、聞き取れない。

今は、まだ

その後の彼等（後書き）

早くジークを戦わせたい

行間 2

「どうして、オマエはそんなことができる」

昔。一度だけ彼女に聞いたことがあった。

彼女は、えっ？と、突然の問いかけに首を傾げた。

彼は再度問いかけた。彼は腹立たしいことに彼女の事をよく知っていた。彼女は誰もが塵のように死んでいく『揺り籠』の中でいつも誰かの為に笑い、唄い、そして泣いていた。だからこそ知りたかった。彼には、そんなことをする余裕も相手もいなかったから。

彼女は少し悩んだようだった。それでもすぐに自分の中の答えを探り当て、立ち上がる。そうして彼の顔を真摯に正面から見た。

……私が《アウラ》だからかな。

意味がわからなかった。顔をしかめると彼女はうまくは言えないけど、こう付け加えた。

今の私はアウラで、アウラはみんな好きだからってこと。

未だ顔をしかめる彼に彼女は、ふにゃ、と微笑んだ。

覚えてる？こういう考え方ね、教えてくれたの貴方なんだよ。

知るか　と返そうとして、彼は思い留まった。今更いちいち覚え

ちやいない程度のことだが身に覚えがあった。

私、昔はいつも泣いてた。何も思い出せなくなったのがすごく怖くて。でもね、そういう時貴方が言ってくれたんだよ。『昔が思い出せなくても、オマエはオマエだ』　って。覚えてる？

よせばいいのに、彼女は彼の声真似までした。それは、照れが混ざって思い切りが足りなかった。簡単に言えば全然似ていなかった。言い終えた後むしろそれに照れたらしく、彼女は少しばかり赤面して俯く。彼はせめてもの抵抗に思いっきり白い目で見てやった。

少し顔を上げ、上目に彼を見る彼女の瞳にはある種の憧憬があった。

この人すごいって思ったんだ。周りのことは何もわからなかったけど、でも羨ましくて、この人みたいになりたいって思った。

馬鹿だ、こいつは。と彼は思う。

何が羨ましいだ、自分のような奴に羨む要素などあるものか、羨望を抱いているのだとしたらそれはむしろ

むしろ

昔の夢を見た。

ジークは朝起きてまず、肺の中にあつた空気を全てため息に変換した。

「昔の……しかも女の夢みるとか、どんだけだよ……クソツタレが」

ずいぶんと女々しくなってしまった自分に悪態をつきながら彼は起き上がり流し場に向かう。うがいを済ませ、しゃこしゃこ歯を磨く。

ジークが今いるのは拠点として買い取ったIS学園から最も近い位置にあるマンションの一室だ。

最近ハスコールに言われた通り大人しく情報収集に徹してきたが、いい加減ジークの忍耐力が限界に近づいていた。昔の夢を見たのもそれが原因だろう。

今すぐ織村一夏に襲撃でもかましてやりたい衝動に駆られているがスコールに釘を刺された以上下手な行動はマズイ。亡国企業力を借りるために命令違反は控えなければならない。

(都合良く、事件でも起きねエもんかねエ)

不足の事態が起きれば現場の判断という命令違反の言い訳も出来るというもののだが、そんな都合のいいことが起きる筈がない

『やあ、久しぶりだね』

頭に直接声が響いた。そして、それはジークがこの世で最も嫌っている人物の声だった。

「　　チツ、何の用だクソヤロウ」

ジークは首筋を押さえる。ジークの首筋には接続用ジャックを隠すための人工皮膚があり、そこには小型の情報端末が仕込まれている。端末は自らの位置情報や状態を示すこともできれば、簡単な通話を行うこともできる。高度な暗号迷彩を施した、極秘の通信も頭に声が響いたのはそれだった。

『相変わらず、私は嫌われているようだねえ』

「……………なんの用だツて、聞いてんだよ」

くすくすと笑いを笑いを噛み殺した声に対して、ジークは殺気すら込めた声で先を促す。

声の主は歌うような調子で答える。

『君にとって嬉しい情報を教えてあげようと思っただね。』

戦たいんでしよう、白式と』

キシッ。と、ジークの口を三日月のようにつり上げて破顔した。

セカンド幼馴染み襲来（前書き）

やっとこさ鈴登場。はたして全員揃うのにどれだけかかるのやら。

セカンド幼馴染み襲来

朝。SHRまでの間の時間、一夏はある噂話を聞いていた。

「中国から2組に転校生？　こんな時期に？」

今はまだ4月。入学式からそれほど日は経っていないのに、転校生だという。

IS学園への転入はかなり難しい事である。厳しい転入試験を受けることさえ、国の推薦がなければ受けられないのだ。ということ
はつまり

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「へー」

代表候補生といえは。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

我らが一組のイギリス代表候補生、セシリア・オルコット。今日もまた、腰に手を当てたポーズが似合う。最早、定番となりつつある。

「このクラスに転入する訳ではないのだろうか？　そう騒ぐ事でもあるまい」

自分の席に着いていた筈の筈が、いつのまにか一夏の席まで来て

いた。

事態を黙って見ていたシオンは一夏の周りに牽制し合いに集まってきた筈とセシリアに溜め息をつく。どうしてそう、あからさまなのだろうか。そして

「……どんな奴なんだろ？」

何故、この男は気付かないのだろうか。

「……一夏、そんなに気になるのか？」

「……一夏さん、そんなに気になりますの？」

「ん？ ああ、少しは」

このヤロウ、地雷踏みしめやがった。

「うわ、空気が冷たくなった……」

シオンは左肩を擦る。なんか体と義手の付け目が痛くなってきた。

「お前に転校生を気にしている余裕があるのか？ 来月にはクラス代表戦があるというのに」

「そう！ そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をしましょう。ああ、相手ならこのわたくしが務めさせていただきますわ！！」

『わたくしが』という部分をえらい強調していた。確かに専用機持ち以外だと訓練機の申請と許可、整備に時間がかかってしまうので手っ取り早く模擬対戦するならセシリアに頼むのが早い。まあ、シオンでも別にいいのだが。

因みに、クラス対抗戦とは読んで字の如く、クラス代表同士によるリーグマッチだ。本格的なIS学習が始まる前の、スタート時点での実力指標を作るためにやるらしい。また、クラス単位での交流およびクラスの団結のためのイベントだそうだ。

やる気を出させるために一位クラスには優勝商品として学食デザート
ートの半年フリーパスが配られる。だから女子は燃えているわけだ。
……若干二名は全く関係ない事で燃えているが。

そして、一夏にはやはり不安が多い。

「でも、本気で大丈夫？ あの体たらくで」

「……それを言うな」

言われると頭が痛くなるのか、一夏はガクリと肩を落とした。

(最初に動かしたときはすごい馴染んだんだがなあ……)

昨日の授業中。その日は外での飛行操縦の実践だった。

1組の面々はIS用のスーツを身に付け整列していた。そのデザインは体のラインをクッキリと見せ、その上、所謂ハイレグ水着同然のデザインなのだ。

「あれだよな、目の保養にはなるけど物凄く居心地悪いよね……」
「……だな」

つまり青少年にはなかなか辛いものがあつたりする。

「では、織斑、オルコット、スミカ。試しに飛んでみせる」
「はいつ」「」

セシリアは左耳に付けられた蒼いイヤークラスに、シオンは身に付けた灰色の首輪に意識を集中させる。すると、すぐさま二人の体が光に包まれて『ブルー・ティアーズ』と『ストレイド・リンクス』が展開される。

ISは一度フィッティングしたら、ずっと操縦者の体にアクセサリーの形状で待機している。セシリアは左耳のイヤークラス、シオンは首輪、一夏は右腕のガントレットといった風に。

一夏も白式を展開させようとする。が、うんともすんとも言わない。

「あ、あれ……？」
「集中しろ」

千冬の目に、鋭さが光る。一夏はこれ以上もたつくと起こること
＝拳骨を想像し、身震いする間もなく急いだ。

右手を突き出し、ガントレットを左手で掴み、深く集中する。このやり方が一夏には一番合うようだ。

(来い、白式……っ！！！)

そう心の中で呟く。刹那、右手首から全身に薄い膜が広がり、光

の粒子が溢れてまとまり、一夏の体に白式が装着展開された。

「よし、飛べ」

言われて、飛び立つ。一夏との試合で、破壊されたストレイドのスラスターの修理は完全のようであるの問題もなく飛行できている。最初に目標高度に着いたのはシオン、その後一夏が遅れて飛んでくる。セシリアもその隣についてきていた。

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的ですよ」

「そう言われてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚自体、まだあやふやなんだよ。シオンはどうなんだ？」

「ん、僕？僕のストレイドは他のISとは違ってイメージじゃなくて一つ一つの機動に合わせたコマンド入力で動かしてるからね。そういう苦労は分からない」

「じゃあやっぱり、訓練して地道に覚えるしかないか」

はあ、とため息をつく一夏。それを見逃さなかったセシリアは顔を赤くしてもじもじしながら。

「い、一夏さん、よしければまた放課後に指導してさしあげますわ。そ、そのときはふたりきりで」

『一夏っ!!! いつまでそんな所にいる!!! 早く降りてこい!!!』
「うわっ!?!」

いきなり通信回線から筈の怒鳴り声が響く。見ると、200m程離れた地上で山田先生がインカムを筈に奪われておたおたしていた。

「にしてもすごいな……算のまつげまで見えるよ……」
「ま、これでも色々と機能制限かけてるんだけどね。……あ、せんせい師匠にぶたれた」

『織斑、オルコット、スミカ。そこからの急降下と完全停止、やってみる』

「了解です。では、お先に行かせていただきますわ」

言って、すぐさまセシリアは、頭から地面に向かって急降下する。

そしてそのまま地面スレスレでその身を返し、スラスター脚部 推進機関部で急停止した。

「へえ、上手いもんだな」

派手さはないが、とても綺麗なライディングだった。さすがは代表候補生と言ったところだろう。

「よし、俺も行くか」

一夏も、背中の翼状の突起からロケットファイヤーが噴出しているイメージを浮かべ、地面に向かって飛んだ。

ギョーンッ

ズドオオンッ!!!

一夏は地上には着いた。しかしこれは専門用語で墜落と言うらしい。体はGや衝撃から守られているが、心はクラスメイトのくすくす笑いで瀕死だ。いかにISが高性能であるうと心までは守ってはくれない。

「大馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」「本当になにやってるの一夏」

「……すみません」

「情けないぞ、この間私が教えてやっただろう。大体だな一夏、お前というやつは昔から」

声のした方を向くと、腕を組み、目尻を吊り上げている篤がいた。そのまま篤の小言が始まるかと思ったら、遮るようにセシリアが一夏に向かっていった。

「大丈夫ですか、一夏さん？お怪我はなくて？」

「あ、ああ。大丈夫だけど……」

「そう。それはよかったですわ」

うふふと、また楽しそうに微笑むセシリア。その表情は嫌味でも皮肉でもなく、本当に純粹に楽しいという笑顔だった。

あの試合以降、物腰や態度が柔らかくなり今では初めてあったときの態度が嘘のようだ。なんでだろうなと、シオンに聞いた一夏だが、『君は一度滝にでも打たれるべきだ』とか言われた。意味が解らなかった。

「……ISを装備していて怪我をするわけがないだろう……」
「あら篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然のことですわ。常識です
てよ?」

「お前が言うか。この猫かぶりめ」
鬼の皮を被っているよりマシですわ」

バチバチツ。二人の視線がぶつかって火花を散らした。もちろん
実際は出ていないが、そこにいた人達にはそう見えた。日増しに仲
が悪くなっていく二人に地味に地上に降りてきていたシオンが頭を
悩ませていると、チャイムが鳴った。

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付け
ておけよ」

片付けるといって、一夏の墜落で出来たクレーターのことなのだ
ろう。なんて無茶振りだ……。

ちらつと筭を見ると、フンと顔を逸らされた。手伝ってはくれな
いらしい。

セシリアは　もういなかった。

シオンは　何やら笑顔で此方にライフルの銃口を向けてきてい
る。

一夏は事態を理解した。今、自分に味方などいないということ。

「……………土って何処にあるんだ……………」

「大丈夫だよ、専用機持ちって今のところはウチと四組だけだし、余裕余裕!!！」

「そうそう。目指せ、夢のフリーパス!!！」
「織斑くん、頑張ってね!!！」

と、思考に埋没している頭が現実に帰った。やいのやいのと楽しそうな女子達の気概を削ぐわけにはいかないので、一夏は「おう」とだけ返事をする。

「その情報、古いよ」

教室の入り口からふと聞き覚えのある声があったのでそっちを見ると、テレインツ!、とでも擬音を入れてしまいそうなポーズで、一人の少女が立っていた。

小柄な体格と、スレンダーなスタイル。そして髪を黄色のリボンでツインテールに結んだ少女。

胸元のリボンの色から、一夏と同じ一年生のようだ。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

「鈴……？もしかして鈴か？」

「そうよ、一夏久しぶりね。中国代表候補生、ファン・リンイン鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってワケ」

ふつと小さく笑みを漏らす。トレードマークのツインテールが軽く左右に揺れた。一夏とシオンはフムと頷いて。

「鈴ちゃん、そのいかにも格好つけてますって感じ、物凄く似合っ
てないよ。ぶつちやけかなり痛い、恥ずかしい、見ていて辛い」

「ああ、結構引いたぞ」

「んなつ……！？人が格好つけたのに痛いとか引いたとか言うな
アアアアアア！！」

ズガン、ズガンと地団駄を踏む鈴。

「……………だつてアレは無いよな」

「ねえ。あのポーズとか格好つけた笑いか……本当に……………」

「何、本気で引いてのよ！！残念な子を見るような目で私を見る
なアアアアアア！！」

ズビシッ！と、二人を指差し、髪の毛を振り乱して騒ぐ鈴。その姿が完全な残念な子であることを彼女は気づいていない。

「……なら、取り敢えずそこを退け」

入り口で暴れる鈴の後ろから、ドスの効いた声が響いた。ビクッと
として振り返ると、そこに我らが鬼教官　　千冬がいた。

「ち、千冬さん……」

「さっさと自分のクラスに帰れ、凰。邪魔だ」

「す、すみません……」

すごすごと入り口からどく鈴。その態度は100%千冬にビビっている。

「昼休みになったらまた来るからね。逃げるんじゃないわよ、一夏
！！」

鈴は捨て台詞を残し、二組へ向かって猛ダッシュして走り去って
いった。

「なんだったんだ、鈴の奴……ていうか、あいつが転校生？　IS
操縦者になってたのか……」

「本当にね……そしてどんどん事態が面倒な事になっていく……」

「………何で？」

「………もうやだ、こんなポジション」

「なに涙ぐんでんだよ！？」

（さっきの女子は何なのだ……一夏達と随分親しそうに見えたが…

…)

朝の一件が気になって、筈はなかなか授業集中出来なかった。

(それに、一夏はまるで)

まるで、幼なじみと再会したかのような反応だった。

ムカツ。

(幼なじみは私だろう……！)

込み上げる怒りをどうにか抑えながら、ちらっと一夏の方を伺う。後ろの席にはシオンもいるので、二人を見るようになったが、二人共真面目にノートを取っていた。

(私は授業に集中出来ないというのに、お前達は……！)

完全にただの逆ギレだが、恋する乙女暴走特急にはそんな些細な事は関係のないことである。ますます腹が立った。日本刀を彷彿させる切れ味を持つ視線を向ける。　　少しくらい、私を気にしたらどうだという気になってくる。

(シオンもシオンだ……！)

私のことを応援してくれるんじゃないかなかったのか、という恨みの視線を向けるが、本人は気づかない。それがまた箒の怒りを引き上げた。

(全くあいつらはいつもそうだ。人のことなど構いもせず……！)

殺気混じりの視線を向け、ぶつぶつと一人呟いている箒。かなり怖い。周りの女子は、怖過ぎて声をかけるところか震えている。

「篠ノ之、答えは？」

「は、はいっ!？」

突然名前を呼ばれて箒は素っ頓狂な声を上げてしまう。

うだ、今は授業中。それも山田先生ではなく織斑先生の授業だった

……!

「答えは？」

「……き、聞いていませんでした……」

ばしーん!と小気味のいい打撃音が響いた。相変わらず頑丈な出

席簿だった。

「……………」

教室の後ろの方では、セシリアがノートにシャーペンを走らせていた。しかし、書かれているのは全く意味のない線で、言葉にすらなっていない。

（何なんですか、さっきの方は！）

いやに一夏達と親しげな様子だった女子が気になって気になってしょうがない。ただでさえ、現時点で第という最大のライバルがいるのに、これ以上競争相手が増えたら気が気ではない。

しかも人間関係　一夏との距離においてはさっきの女子の方がリードしている。一生懸命マラソンをしていたら、いきなり中間地点から走り出した選手が自分を追い抜いていった気分だ。

（それはズルですわ！正々堂々と勝負なさい！）

人間関係の正々堂々というのがよく分からないが、とにかくセシ

リアはそう思った。

(しかも代表候補生)

確かに、ここIS学園には代表候補生が二十数名在籍している。だが、一年では四人しかいなかったはずだ。しかも、専用機持ちは一夏とシオンを抜いて二人。かなり大きなリードになるはずだった。なのに……

(専用機持ちって言ってましたわね……)

最悪。最悪である。こちらの手札はキャンセルされて、むこうのズルが通ったようなものだ。

(い、インチキですわ!)

しかし、今更そんなことを言ってもしょうがない。なんとか、なんとか、イニシアチブを取らなくてはいけない。しかも箒や鈴を大きく突き放すほどのものがないと意味がない。

(ISの模擬戦だけでは足りませんわ。もっとなにか、決定打になるような)

「オルコット」

「……例えばデートに誘うとか。いえ、もっと効率的な……」

「……………」

バゴツ！ふんわりとしたブロンドの髪が、出席簿によって圧縮された。

「……………」

シオンは真面目に授業を受けながら頭では別の事を考えていた。

考えているのは鈴の事だ。彼女が何故、急に転校してきたのか彼には手に取るように分かっていた。大方、一夏が入学したと聞きつけて飛んできたのだろう。彼女も駄FLAG量産男である一夏の犠牲者の一人なのだから。

そして、その事は箒とセシリアにもバレている事だろう。証拠に先から箒は此方に殺気混じりの視線を向けてきているし、セシリアはなんかぶつぶつ言っている。

最後にこれから巻き起こるであろう一夏と彼女達の数々のトラブルについて考える。

(これは、面倒な事になった……)

願わくは、それらのトラブルに巻き込まれませんように。

……九分九厘無理だろうが。

クラス対抗戦（前書き）

仕事の出張やらで執筆時間がとれませんでした。その為に更新が遅れて、誠に申し訳ありませんでしたm(_____)m

この話に、亡国企業所属のオリキャラを出します。

クラス対抗戦

夢を見る。

あの、悪魔達に管理された『揺り籠』の夢を。

彼女が幸せの歌を唄っていて。

アイツがコロコロ楽しそうに笑っていて。

自分がいつも顔をしかめて不貞腐れていて。

ドクターがそれを見て苦笑している。

時間にすればほんの二、三年程昔の出来事。絶対に、何があっても、
忘れないと誓った、記憶の夢。

もう、二度と届かない。取り戻すことができない世界の夢を見る。

昼休み。

予告通りに待ち構えていた鈴に捕まり、一夏は食堂へとやって来ていた。

食券を買い、配膳を待つ列に並ぶ。後ろには箒とセシリア、そして最近よく一緒にいる他クラスメイト一行が続く。

「なあ鈴。いつ日本に帰ってきたんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ、一夏。アンタからこそなにIS使ってるのよ。ニュースで見た時ビックリしたじゃない。それにシオンは急に日本飛び出してなにやってたのよ？」

「フランスでISの勉強してた」

席に着いて早速と言わんばかりに一夏は質問を投げかけた。丸一年ぶりの再会ということもあって、空白期間が気になっての行動だったがそれが面白くない者もいる。

「一夏。そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「そうですね！一夏さん、まさかこちらの方と付き合いなさってらっしゃるの!？」

箒とセシリアが多少棘のある声で詰め寄ってくる。他のクラスメイト達も興味津々とばかりに頷いていた。

「べ、べ、別に私は付き合ってる訳じゃ……」

「そつだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼馴染みだよ」

予想外の言葉に鈴はしどろもどろになり、一夏は通常運転。

「……………」

「？ 何睨んでるんだ？」

「なんでもないわよっ！」

いかにも不服そうな鈴、一夏は何故不服なのか理解できず首を捻る。シオンは面倒に巻き込まれたくないので無言で掛け蕎麦を啜っている。

「幼馴染み…………？」

怪訝そうな声で聞き返してきた箒に一夏は「ああっ」と一人合点がいったようにポンツと手を打つ。

「あー、箒が引越していったのが小四の終わりだっただろ？ 鈴が転校してきたのが小五の頭だ。で、中二の終わりに国に帰ったから、会うのは一年ぶりだな。いうなればそう、箒は《ファースト幼馴染》で、鈴は《セカンド幼馴染》ってところか？」

「……………ファースト」

「いや、箒ちゃん。それ、喜ぶ所じゃないから。てか、幼馴染にそんな初めての女と二番目の女的な言い方する人始めて見たよ！」

嬉しそうに頬を染める箒に遂に耐えられなくなりビシッ！ とツッコミを入れるシオン。だが、悲しいかな誰も聞いていない。

「そんな必要はありませんわ!! 一組の代表である一夏さんには、一組の代表候補生であるわたくしが教えるのは当然の事!! 敵の施しはうけませんわ!!」

「何を訳のわからない事を言っているんだ貴様! 私は一夏にどうしても頼まれているのだ! 故に、私が教える! 余計な口を挟まないでもらおうか!!」

「何ですってえ!?!」

ライバルが二人であった事を知り、鈴は戦闘態勢に移行する。

投入された火種による連鎖爆発で辺りは戦場と化した。火種はあつと言つ間に業火へと変わる。

ギヤーギヤーと言ひ合う三人を見て、一夏は一人呟く。

「何で初対面なのにこいつらこんなに仲悪いんだ…… なあシオン、なんでだと て、いない!?!」

自分の隣に座っていた筈の幼馴染みの少年が何時も間にかこつぜん姿を消していた。

ついでに他のクラスメイト達も。

犬も食わない口論を続ける四人をよそに、静かに、バレないように別の席に移動していたシオンは、

「今日も日本は平和だなあ……」

旨そうにお茶をすすっていた。

うんうん。と、同じく逃げてきたクラスメイト達が頷く。今日もISS学園は平和である。

灯りが消された部屋の中で、ジークは待機形態にしてある自分のISSとコードで自分自身を接続して、脳にデータをダウンロードする。膨大な量の情報が脳髓に叩き込まれ、ソレを片っ端から捌く。

エネルギーバイパス、火器管制システム、各種運動系、装備兵装、各種スラスターの出力、e t c .

ISSの様々なデータを閲覧し、自分用に最適化していく。彼のISSは他のISSとは異なり操縦者に合わせた最適化という機能が存在しない、そのため他のISSよりも調整に気を配らなければならない

のだ。

そんな精密作業の中、携帯の着信音が耳に届いた。ジークは誰からの電話か確認し、露骨に嫌そうな表情を浮かべて電話にでる。

『久しぶりだなあ、ジーク君。元気にやっているかい？』

電話から聞こえる高く澄んだ、凜々しい女性の声にジークはハアとため息をつく。

「なんの用だよ、ストーム」

『ん？ 親しい人に電話するのに理由などいるのかい？ 後、私のことは親しみを込めて『ストさん』』

と呼んでくれといつもいつているだろう』

「断るツて、いつも言ツてんだろ」

『つれないぜ、ベイビー』

「ブツ殺すぞ」

おー、怖。とか、軽快に言ってるストーム。今すぐ電話を切りた
いのだが、一応相手がスコールと同じ上司に当たる人物なので切っ
たりできない雇われ構成員ジーク。

なんでこんなさわやかお化けが、亡国機業の幹部なんてやっている
のだろうか。未だにジークには理解できない。
ファントム・タスク

『まあ、一応要件はあるんだ。最近マドカちゃんの機嫌が悪い。だ

から、君が二人っきりの旅行にでも誘ってだな「よし、テメエ今何処にいる？ 今から首落としに行ッてやるから」と、いう冗談はさておき」

ドスの効いたジークの声に慌てて話を変えるストーム。

『マドカちゃんから君の探し物の一つである第四世代ISが見つかった、と聞いて気になってね』

本気で心配している声を出しているストームにジークは呆れ果てる。

「……………まッたく、どいつもコイツも……………」

どうにも純粋な善意というものは苦手だ。そして、恐らくストームに連絡を入れたマドカはこうなる事を分かっていた事だろう。それが純粹にジークの事を心配したことなのか、共犯者に余計な事をさせないための牽制なのかは分からない。たぶん後者だろうが。

「……………あゝ、ちイツとばかり事を起こすぜ」

『……………ふむ。何か策はあるのかい？』

頭を掻きながら申し訳なさそうに言ったジークの無茶に、ストームは止めも怒りもせず、静かに問いかける。

「詳しくは言えねエが、現場の判断つウことで誤魔化せねエこともねエ筈だ」

『なら良いんだ。スコールの方には私が弁護しておこう』

「ワリイな……………いつもいつも」

スコールとストームの亡国機業内での発言力は同等な為、ストームがジークの行動の正当性を主張すればスコールも煩く言えなくなる。度々、組織の考えから外れた行動を起こすジークとマドカはそのつどストームの世話になってきた。

その事に少なからず申し訳なさを感じている部分がジークにはある。自分やマドカのようなはぐれ者を庇ってばかりいれば、組織の中の立場が悪くなる一方であろう。

だが、ストームはいつも通りの陰りを知らない高く澄んだ、凜々しい声で言う。

『別に構わないさ。仲間を助けるのは当然のことだ。それに、私は君の事を好ましいと思っているのでね』

「ソイツはどうも。今回の礼も含めてなんか奢るぜ」

ジークは、愉快そうに口許を緩める。純粹な善意というものは馴れないが不思議と悪い気はしない。ストームはジークの言葉に気を良くしたようで嬉々してなんか騒ぎだした。

『おおっ！！ なら、マドカちゃんも加えて三人で旅行にでも行くう！そうだな、君とマドカちゃんが二人部屋、私が一人部屋にしよう。そうすれば』

ブツ。なんか言っているが気にせず通話を切る。放っておくといつの間にかペースに乗せられ振り回されるハメにあつ。ストームはそんな嵐のような奴なのだ。

「しっかし、ストームのヤロウは相変わらずオレとマドカのことを勘違いしていやがる」

自分と織斑マドカはただの利害の一致で手を組んでいる共犯者であって、友でも仲間でも恋人でもない。第一に織斑マドカという少女はなれ合いも情も否定している人間なのだ。

なのに、ストームは何を勘違いしてか事あるごとにジークとマドカの仲を発展させようとしてくる。無駄なのに。

ジークはため息をひとつ漏らし、ISの調整に戻る。

一先ずストーム達のことは思考の外に追いやり、作業に没入する。万が一にも調整にミスが生じては駄目なのだ。第四世代との闘いは全力で挑まなければ意味が無い。

そこで、ふと自分に闘いの場を提供してきた自分がこの世で最も嫌いなヤツのことが頭に過った。

ヤツの意図がなんなのか、ジークには解らない。このタイミングで自分と白式を戦わせてもヤツにはなんの特もないはずだ。かえって損にしかならないとジークは思う。つまり、ジークが考えもつかない謀に巻き込まれている可能性もある。

だが。

「そんなモンは関係エねエ、あのヤロウがどんな策を仕掛けようがソレごと潰す」

ジークは眼を開き、前だけを見据えて、誰に言うわけでもなく、再確認するように一人呟く。その声には鋭く、堅い、刃のような覚悟が秘められていた。

「これはオレが選んだ道だ。進むためならなんだってやってやる、なんだって利用してやる。邪魔するモンには容赦なんざしねエ、それがなんであれ、誰であれ、喰い破って進むだけだ」

ずっと、待っていた。

焦がれた時は、もうすぐ側まで来ているのだ。

再び動き出す。あの悪魔達に管理された『揺り籠』に存在した人間達の物語が。

ジークは昂りを抑えるように拳を強く、握り締めた。

「どうしてこうなった……?」

「それを僕に聞いている時点でこうなる事は必然だったんだよ」

「意味がわかんねえ」

「うん。もう諦めてるから大丈夫」

放課後のアリーナ。クラス 対抗戦に向けて、一夏は今日も特訓である。

その筈なのだが。

「ですから、一夏さんのお相手は私が努めますわ!」

「ええい、邪魔な! ならば斬る!」

どういうわけだか、箒とセシリアが戦っていた。

その後、食堂では激戦が繰り広げられた。

「一組の代表を一組が教えるのは当たり前から図々しく出てこないでください」とセシリアが言い、「後からじゃないし。あたしのほうが付き合い長いし」と鈴が返し。

「なら私はもつと早い。一夏は自分の家に食事をしに来ていた」ならばと箒が言えば、「それなら、ウチにも毎日のように来てたわよ」と鈴が反撃。

そして「鈴の実家は中華料理屋なんだ」と、鈍感王一夏は、いつ

も通り空気を読まない。

その余熱は冷めることなく、乙女達の戦いは、延長戦で泥仕合となっていた。

そして現在。

「……僕、帰っていいかな……」

「頼むから一人にしないでくれ……」

乙女達が激闘を繰り広げている他所で、完全に取り残された男子二人。

「一夏っ！」

「何を黙って見ていますの!?!」

「うえっ!?! だって、どっちかに味方したら怒るだろ!?!」

何故、織斑一夏はこういった時だけ勘が鋭いのだろうか。アレか? 夜道に女に刺されないための防衛本能か何かなのか? と、シオンは時々思う。

「当然だ!?!」

「当然ですわ!?!」

「じゃあ、どうしろっていうんだよ!？」

「一夏はもう……いや、始めから逃げ場なんてなかったんだよ」

結局、二人と『寄らば大樹の影』とか言っただけで二人の方についたシオン、計三人を同時に相手をさせられるハメになった一夏。

日の完全に沈んだアリーナでボロボロ雑巾のようになって転がっていた。

「一夏。対抗戦まで時間がないのに……そんな状態で大丈夫？」

「ふん。鍛えていながらそうなるんだ」

「あのなあ……三人がかりで来られたら……誰だっ……こうなる……ぞ？」

ボロボロだが、それでも一夏はこれだけは言いたかった。
お前らしい加減にしろ、と。

「では、私は先に失礼しますわ」

セシリアは優雅に踵を返し、アリーナを後にした。
完全に息が切れている一夏に対して、セシリアはけろりとしていた。さすがは代表候補生。経験の差というものだろう。

「何時までそうしているつもりだ、我々も戻るぞ？」

箒も多少は疲れてはいるようだが、一夏のように疲労困憊というこ
とはない。うっすらと汗に濡れた箒の姿は、独特の艶っぽさを持っ
ていて一夏はすこしドキリとした。 すこしだ。ここ重要!!

「おう」

「はい」

箒は一夏と何故か楽しそうなシオンの様子に苦笑し、ロッカール
ームへと戻った。

「……お疲れさま。はい、タオル。飲み物はスポーツドリンクでい
いよね」

ロッカールームに戻るとそこには鈴がタオルと冷えてないスポー
ツドリンクをもって待っていた。

「サンキュ。あー、生き返る」

一夏は汗まみれの顔をタオルで拭き、スポーツドリンクを勢いよく
飲む。

ちなみに冷えてないドリンクだが、それで正解だ。運動後の熱を持
った体に冷たい液体を流し込むのは意外に体に悪かったりする。

「変わらないわね。若いくせに体の事はすっかり気にしてる所とか」
「あのなあ、若いうちから不摂生してたらいかんだぞ。クセにな
るし、後で泣きを見るのは自分と自分の家族だ」

「ジジくさいよ」
「うるせい」

鈴はなんだがニヤニヤしながら見透かすような目で一夏を見てくる。その視線、自分のことをわかっているような眼差しが、なんだが落ち着かなかった。

(……っていつかこいつ、……こんなに可愛かったっけ……?)

最後に見たのが中二の冬。まだ一年ちよつとしか経っていないのに、やかましいだけだったあの頃にはない『女の子らしさ』がそれとなく感じられる。その変化がちよつとだけ一夏の心の男部分を揺さぶった。

「」
「」

そんな一夏の様子を敏感に察知した篤が顔をしかめて嫌な感じのオラを放ち、その隣にいたシオンが冷や汗を滝のように流していたが、いかせん二人の視界の外だったので一夏も鈴も気づかなかつた。

「ところでさ、一夏。あの約束覚えてる」

「約束？ えーと、確か……」

「う、うん……覚えてるよね？」

急に顔を伏せて、頬を赤らめながらチラチラと一夏を見る鈴。そんな鈴に「何だったっけ？」などと言える筈もなく、一夏は知っていそうな人物に視線で救援を求めた。

その視線だけで全てを悟ったシオンは、『ヒント 酢豚！』とデカデカと書き込まれたフリップを取り出し、鈴にバレないように一夏に見せる。

必死にヒントについて考え込む一夏。何処からフリップを出したのか、何故シオンは何故思い当たったのか、そこは気にならないようだ。

「あの、ひよっとして、あれか……？ 料理が上手になったら毎

日……」

「っ！ そ、そう、それよっ！ー！」

「……酢豚をおごってくれる、だったよな？」

「……はい？」

鈴とシオンの声が見事にシンクロした。

「いや、だから鈴が料理できるようになったら毎日、飯をご馳走してくれるって約束だろ？ いや、ほぼ一人暮らしな俺には有り難い約そ」

パァンッ！！

鈴の平手が、一夏の頬を打った。

いきなりの事に、一夏も箒も呆然としてしまっている。一人、シオンだけが額を手で押さえて天を仰いでいた。

「え、な……………？」

「……………ッッ！！」

鈴は、肩を小刻みに震わせ、怒りに満ちた眼差しで一夏を睨んでいる。瞳にはうつすらと涙が浮かんでいた。

「あ、あの、だな、鈴……………」

「最っつ低……………！ 女の子との約束もちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けないヤツ！！ 犬に噛まれて死ねっっ！！」

そこからの鈴の行動は素早かった。身を翻し、怒りを込めた足取りでロッカールームを出て行ってしまった。

「待って、鈴ちゃん！」

唯一事態を完全に把握していたシオンは急いで走り去った鈴を追いかけていった。

「……………まずい。怒らせちゃった」

鈴の出て行ったドアを見ながら、一夏は深々と溜息を吐く。

シオンは事態を把握していたようだったので任せておけば大丈夫だと思つ。自分が行けば、かえって話が拗れるだろう。

今のは、完全に自分が悪いのだろうと、一夏も思う。何しろ鈴を泣かせたのは自分なのだから。だが、男の風上にも置けないというの

は少し腹が立った。そこまで言われるほどの約束だった覚えは一夏には無い。

「おい、一夏」

「お、おう、なんだ箒」

いきなり背後から底冷えした声が掛けられた。

「馬に蹴られて、死ね!!」

「ええっ!?!」

何故、箒にまでそんな事を言われたのか、一夏には全く意味が分からなかった。

鈴は怒りに任せて寮の廊下を大股で歩いていた。強く口元を結び、瞳から零れそうな涙を必死に堪えながら。

「鈴ちゃん、待ちなつて……！」
「……………」

後ろから、自分呼び止める男の音がする。しかしそれは、鈴が求めていた人の声ではない。

「イヤよ！　なんでシオンが追いかけてくるのよ!?!」
「それは……アレだよ、僕が一夏の親友だからだよ！」
「そんな理由にならないわよ！」

シオンは振りきるように足を速める鈴。だが、体格差があるため当然シオンの方が速い。

シオンは鈴の行く手を遮るように、立った。

「……一体、なんのようよ」
「そりゃあ、勿論フォローを入れにだよ……はあ」

射殺さんとはかりに此方を睨んでくる鈴にシオンは深々と溜め息をつく。悪気の無い一夏のポカのフォローを入れるのは昔から自分の役割だった。つくづく損な立場だとシオンは思う。自分がいなかった中学時代はなんでも五反田弾という少年がやったくれたらしい、シオンは同情を禁じ得ない。

「……アンタ、なんで私が怒ってるかわかってんの？」
「うん、まあ。……あの『毎日味噌汁を』の亜種みたいな約束でしょ?……残念だけど朴念人の一夏には意味が理解できないと思うよ」

まっこと残念な事に一夏は過鈍（過剰に鈍感という意味）な男だ。それこそ寝込みを襲って既成事実の一つでも作らないと此方の想いが伝わらないのではないかと思える程に。いや、ひよっとしたらそれでも伝わらないかもしれない。

「……………それでも、私は、ちゃんと覚えててほしかった」

弱々しく、今にも泣きそうな声で呟く鈴にシオンは出来るだけ優しい声で答える。

「うん。鈴ちゃんが怒ったのは間違いじゃない……………だからさ、思いつきりぶん殴ってやればいい」

「……………アンタ、一夏に代わりにフォローしに来たんじゃないの」
フォローしに来たくせに全然フォローしてないシオンを半眼で睨む鈴。だが、シオンはそんなものは意に返さずケラケラと笑う。

「だっていくら悪気がなかったとはいえ、どう考えても一夏の方が悪い。だから、殴っちゃえばいい」

笑顔でつい先親友と言って人物をぶん殴れなどと物騒な事を言い出すシオンに、鈴は目を丸くしたが、直ぐに笑いを吹き出した。

「あははっ！そうね。よしっボッコボコにしてやるんだから、一夏のやつ！」

「うんうん。その意気だよ、鈴ちゃん」

ようやくいつもの調子に戻った鈴にシオンも嬉しくなって何度も頭を縦に振る。鈴は本人はというと、いい感じの満面の笑顔をして。

「……でさ、アンタが一夏の代理で来たって言うならさ」

「うん。僕に出来ることなら、なんでもやらせて貰うよ」

「一発、殴らせて」

満面の笑顔のまま、右手を握って開いて、また握り込んだ。シオンは背筋に寒いモノを感じ、顔をひきつらせたが、『一夏の代わりに来た』、『一夏をぶん殴るべきだ』、『なんでもする』などと言った手前、後に引けるはずもなく。覚悟を決めた。

「殴る、か……。いいよ、男に二言は無いつ!!」

「んじゃあ、恨みつこなしよ」

「よおおし! 気合いの一発! バッチコオオイ!!」

完全にヤケになって叫ぶシオン。鈴は目を閉じて、深呼吸をひとつ。ぎゅっと親指を握りこんだ。

「あ、でもさすがに顔は」

鈴は、カツ! と目を開く。

一撃必殺!!!!!!

「歯あ食い縛れや、シオオオオオン!!」

「ーやめブルオオアア!？」

鈴の会心の拳がシオンの顔面に（・・・）突き刺さった。そして、そのまま

「どうおりゃああああああつ！！！！！」

カ一杯、拳を振り抜く。シオンは腹部を中心にしてぐるりと縦回転。頭頂部を床にぎやりと、こすりつけ、そのままほとんど一回転半してしたたかに床に叩きつけられた。

「……………顔は、やめてって言おうとしたのに……………しかも、今のグーだったよね……………グー……………一夏にすらビンタだったのに……………グー」

ピクピクと、痙攣するように震えながらもなんか言ってるシオン。鈴は一仕事した後のように額の汗を拭い、爽やかな笑みを浮かべる。

「あ〜、スッキリした」

「ハハ、鈴ちゃんの想いは……………痛いね……………ガク」

鈴の爽やかな笑顔を確認した後、渴いた笑みを溢し、シオンは意識を手放した。

そんなシオンに鈴は優しい微笑みを向け、穏やかな声で囁きかけた。

「じゃあね、シオン。いつもでも一夏の親友でいてあげて」

その言葉がちゃんとシオンに届いていたのか、それを知るものはいない。

その後、廊下に放置されていたシオンが千冬に文字通り蹴り起こされる事になったのは完全な余談である。

翌日。生徒玄関前廊下に大きく張り出された一枚の紙があった。
それはクラス対抗戦リーグマッチの組み合わせ表であった。

一回戦の組み合わせ。

【一組代表 織斑一夏 対 二組代表 凰鈴音】

決戦は 第一試合。

クラス対抗戦（後書き）

ストームは、亡国企業としてはあり得ない程にいい人です。何故、そうなのかは後々書くつもりです。まあ、あくまでサブキャラなんですけど。

次回。やっと、ようやく、ジークのISを出せそうです……長かった（泣）

主人公の一人なのに全然書けなくて今まで凄く歯痒かったんですよ……

VS 甲龍 降り立つ黒（前書き）

鈴との戦闘回。余りに説明文が多すぎる気がする……三機もI
Sを初登場させたせいだろうか……

V S 甲龍 降り立つ黒

第2アリーナで行われる、クラス対抗戦第一試合。

それは、最大の注目カードであった。

全校で代表候補生は数十人。その内、一年には4人しかおらず、専用機持ちは一夏を除いて現在は4人である。

その専用機持ち同士の戦い、しかも片割れは公式戦デビューとなる世界初の男性IS操縦者の織斑一夏なのだ。当然注目度は凄まじい。

アリーナの観覧席は満席。通路は立ち見をする生徒で埋め尽くされている。入れなかつた生徒や関係者は外のリアルタイムモニターで観戦。

余談であるがアリーナの席を『指定席』と言って販売していた二年生がいたが、あえなく千冬の嚴重注意せいじやうちゅういが下され、数日間首謀者の部屋からはうなされるような声が聞こえたそうだ。

更にクラス対抗戦は生徒だけでなく、各国のIS関係者も観覧しに来ている。

未来の国防に関わる人材が生まれるかも知れないのだから、当然

だ。

第二アリーナ・Aピット。二組の代表側のピットにシオンは来ていた。あのビンタ事件、そしてシオンが鈴に殴り飛ばされて四日。鈴の顔を見なかったので心配してのことだったのだが、鈴の顔を見てそれが杞憂に終わったことを悟る。

「あれ？シオンじゃない。なんでこっちにいるのよ？一夏はBピットよ」

「いや、ちょっと鈴ちゃんの様子を見に来ただけど……元気そうでなにより」

シオンは楽しそうに微笑む。それを見て鈴は心底呆れたように溜め息をつく。全く、なんでコイツはいつもこうなんだと思う。

「あなた……自分をおもいつきり殴り飛ばした相手のことを心配する、普通」

「……確かにそうだね。でもさ、悪いのは一夏で僕は一夏の代わりに殴られたんだから怨むなら一夏でしょ」

そう言っつてシオンはニヤリつと、不敵に笑う。シオンが言いたいことを理解した鈴もニヤリつと笑う。

「見てなさいよ、一夏のやつをボッコボコにして病院送りにしてやるんだから！」

「その意気だ。あの駄FLAG量産男に裁きの鉄槌を下してやるんだ
！！」

二人は拳をぶつけ合う。そして、その後直ぐ堰を切ったように笑いあつた。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスに促されて、一夏と鈴は空中で向かい合う。その距離は五メートル。

IS 『シエンロン甲龍』

両肩にやたらと攻撃的な自己主張をしているスパイクアーマー状アンロックユニットの非固定浮遊部位を持ち、背には接近戦用の青龍刀が備えられている。

一夏と鈴は開放回線オーブン・チャネルで言葉を交わす。

「一夏。シオンにも言われたから、本気で潰すからね」

「……あいつは……まあいいか。なら、俺が勝ったら約束の意味がなんだったか説明して貰うぞ」

「んなッ!？」

意味が分からなくちゃ謝ることも出来ないからな、と続ける一夏。対して、鈴は顔を茹でタコのように真っ赤にしてそれはもう慌てた。自分の遠回しのプロポーズの意味をちゃんと説明しろと言われたのだから当然かもしれないが。

数秒間、心身ともに悶えた後、なんとか平静を取り戻した鈴は言い返す。

「い、いいわよ。でも分かってるの、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられるんだから」

それは脅しではなく本当のことだった。操縦者に直接ダメージを与える“ためだけ”の装備も確かに存在する。もちろん競技規定違反だが、つまり、『殺さない程度にいたぶることは可能』という意味にもなる。代表候補生クラスとなればその程度造作もない。

『それでは両者、試合を開始してください』

開始を知らせるブザーが鳴り響き、甲龍が一気に突進。背の青龍刀を抜刀、一気に叩きつける。

「クツ!!」

ギリギリ展開が間に合った雪片で受け止めるが、そのまま弾かれる。甲龍の手の中で巨大な青龍刀がまるでバトンのように回転、弾かれ体制の崩れた一夏に追撃の一太刀。

「せえいッ!!」

「……っの!!」

弾かれた勢いのまま背後に跳び、回避。振るわれた刃が一夏の眼前の空間が唸りをあげて切り裂かれる。

純粹なパワーは白式より甲龍の方が上だ。喰らえばただでは済まない。

「一気に行くわよ!!」

鈴は空いる左手に、武装を展開^{オープン}。右手が持つ物と同じ形の青龍刀が左手にも握られる。

鈴は二刀を掲げ、真っ直ぐに向かってきた。

上段から振るわれた左の刃を躲すと、そこに右の刃が迫った。

「ぐっ!?!」

「まだまだあっ!!」

ブロックするも、再び弾かれる一夏。鈴の手の内で二振りの青竜刀が再びバトンのように回転、はさみ 鋏のように襲いかかり、白式のバリアを打ち据える。

「クソツ!?!」

「逃がさないっ!?!」

鈴は青竜刀を剣舞のように縦横斜めに振り回しながら、一夏を追う。

「ちよっ、うおっ、危なッ!?!」

リット・ターン 上下左右から襲い来る刃を一夏は、セシリアから教わったクロス・ゲ 三次元跳躍旋回を駆使して回避する。

「へえ、この甲龍の攻撃を防ぐし躲す……か。なかなかやるじゃない、一夏」

「そりゃどうも」

「じゃ、これならどうかしら……っ!?!」

右肩のスパイク状の非固定浮遊部位が、アンロックユニット ガシユツと、音を立てて展開した。中心の球体が光った瞬間、一夏は目に見えない『衝撃』に殴りとばされた。

「なっ !?!」

「今のはジャブだからね」

ニヤリと鈴は不敵に笑い。甲龍の左の非固定浮遊部位が展開。アンロックユニット

「　　ッ！！！」

瞬間、一夏は巨大な見えない拳に殴られ、地面に叩きつけられた。

「な、何だあれは！？」

箒はモニターに映る光景に叫んでいた。

鈴の非固定浮遊部位が展開し、中心の球体ユニットが光ったと思
った瞬間、一夏が吹き飛ばされている。

「《衝撃砲》ですね。空間に圧力を掛けて砲身を生成、余剰で生
じるエネルギーそれ自体を弾丸にして撃ち出す。ブルー・ティアー
ズと同じ第三世代型兵器ですわ」

「　　しかもあの武装は、射角がほぼ無制限で撃てるようです」

「つまり……あの武装には”死角が存在しない”？」

「そういう事ですね……」

セシリア、真耶が解析と説明をしている。が、もう箒は聞いていな
かった。モニターの向こうでは一夏が、連射される衝撃砲を転が
るように躲していた。

一夏がダメージを受けるたびに箒の胸が痛んだ。

(一夏　　)

セシリアとの戦いよりも激しい戦いを目の当たりにして、筈は勝利よりもただただ無事を願っていた。

「クソッ……！」

「よく躲すじゃない。衝撃砲《龍咆》は砲身も砲弾も見えないのが特徴なのに」

そう、その通りだった。砲弾が目に見えないのはまだしも、砲身までもが目に見えないのは一夏にとつてかなり厳しい。砲身が見えないのでは相手がいつ此方に狙いをつけ、どのタイミングで撃ってくるのか読みにくい、そのためどうしても回避が上手くないかない。

狙撃手たるシオンならば鈴の視線と呼吸だけで相手の射撃のタイミングを見切るのだろうが、一夏にそのような技術はない。

加えて、《龍咆》には砲身斜角の制限が無いので真上真下はもちろん、真後ろに逃げようが展開して撃ってくる。

（ハイパーセンサーに空間の歪みの値と大気の流れを探らせてはいるが、これじゃ遅い。撃たれてからわかってしているようなものだ。どこかで先手を打たなくては……）

一夏はぎゅっと右手の《雪片式型》を握りしめ、先週の訓練を思い出す。

アリーナでの特訓。その日は珍しく箒もセシリアもない。そして代わりに千冬がいるのだから更に珍しい。

因みにシオンは、久しぶりに師に教えを請えると嬉しそうにしていたのだが千冬に『一夏の面倒を見るのに忙しい、自主練でもしてる』と言われ、アリーナの隅っこで一人寂しく射撃訓練をしている。

「
イクニッションブースト
瞬時加速？」

一夏が聞き返すと、千冬は小さく頷く。

「イクニッションブースト
瞬時加速とは、一瞬でトップスピードに乗り、敵に接近する奇襲攻撃。雪片を振るうにあたって核となる技術であり、出し所さえ間違えなければ、オマエでも代表候補生と渡り合える筈だ」

「そ、そんな技術が……！？」

「だが、あくまでも奇襲攻撃……通用するのは、一回だけだ」

千冬言葉に、一瞬舞い上がった一夏だったが直ぐに黙ってしま
う。

一回だけの勝負札。その一度だけで、全てを極める。
そんな奇跡のような事が、果たして自分出来るだろうか。

「せめて、白式にも飛び道具が有ればなあ……」

普通、ISというものには機体ごとに『初期装備』という専用装備
プレセット

と、初期装備の足りない部分を補うための『後付装備』^{イコライゼ}というものがある。

そして、後付装備のためにISには『拡張領域』^{バースロット}が設けられている。だが、雪片はその絶大な攻撃力の引き換えに本来あるべき拡張領域を全て使い潰してしまっている。そのため、白式は雪片以外の装備が使えない。

弱音を吐く一夏に、千冬は熱血教師の如く竹刀を突きつけて、言った。

「私は雪片だけで、世界一に上り詰めた。なら、お前も雪片だけで充分という事だ」

三年に一度行われる、ISの世界大会【モンド・グロツソ】。

その第一回大会優勝者こそが織斑千冬だ。

その際、彼女が使っていた専用機『暮れ桜』の武装は雪片一振りのみ。

第二回大会こそ、ある事情により優勝を逃したが、今も世界一のIS操縦者は織斑千冬だと誰もが認めている。

そんな生き証人に言われては一夏も反論のしようがない。

千冬はチラッと一瞬シオンの方を見た後、溜め息と共に言葉を吐き出した。

「大体、お前のような素人に射撃戦闘など………できるものか」
「うぐうっつ！！」

遂に打ちのめされ、顔を伏せてしまった一夏に千冬は苦笑し、静かに言った。

「お前には一つの事を極める方が向いているさ。変な所は私に似ているからな」

チャンスは一度きり。外せば、恐らくもう勝機はない。

鈴は強い。

代表候補生。それも専用機持ちともなれば、今の一夏では届かない。

セシリアに勝てたのは事前情報、対策練習、奇策、不意討ち、様々な誘因が上手く重なり奇跡的に勝利を拾ったに過ぎない。

しかし、鈴は違う。

事前情報無し。近接戦闘に強く、セシリアと違い戦闘中は冷静なため奇策も通用しない。基礎のすべてを高いレベルで習得し、それらが無理なく融合している。文句なしの強敵だ。

(あとは……気持ちで負けないってくらいだな)

技量に差があるのは仕方ない。ISに触れてきた時間が違うのだから。その経験は一朝一夕では埋まらない。

仮にその経験の差を『何か』で埋めるとしたら、やはり心しかない。そして『負けたくないという気持ち』だけ誰にも負けられないという自負が一夏にはある。あとは自分を信じ、実行するだけだ。

「鈴」

「なによ？」

「本気で行くからな」

「な、なによ……今更そんなこと言って……と、とにかく、格の違いを見せてあげるわよ！」

鈴はバトンのように両手に持つ両刃青龍刀を一回転させて構え直し、突撃。距離を詰め、青竜刀と衝撃砲の波状攻撃で一気に決める腹だろつ。

未だに衝撃砲を見切れていない一夏には有効な攻撃だ。が

「それを待つてたんだよツ！！」

こちらに突撃してくる鈴に向けて瞬間加速イケニッション・ブーストを発動。空気を破裂させ、音を置き去りにするほどの凄まじい加速。

ISの搭乗者保護機能がなければ、0.1秒と持たずにブラックアウトする程だ。

アリーナのグラウンド中央が爆発し、もくもくと黒煙を上げた。

「な、何が起きたんだ……!?!」

雪片が振るわれる直前、突如として 空から何かが、アリーナの遮断シールドを突き破り降ってきた。

『一夏、試合は中止よ!すぐにピットに戻って!』

鈴が悲鳴混じりの怒号が個人回線プライベートチャンネルが飛んできた瞬間、ISのハイパーセンサーが緊急通告を行ってきた。

警告 ステージ中央に熱源 所属不明のISと断定 口
ツクされています

アリーナの遮断シールドはISと同じもので作られている。それを貫通するだけの攻撃力を持った機体が乱入、こちらをロックしている。

「試合は中止よ。あたしが時間を稼ぐから、早く逃げて!」

「逃げるって……女を置いてそんなことができるか!」

「馬鹿! アンタの方が弱いんだからしょうがないでしょうが!」

「っ……!!」

一夏は黙るしかなかった。鈴の言う事あまりに正論だ。代表候補性である彼女の実力は本物だ、今の自分などとは比べるのもおこがましい。

だが、それでいいのか。

「あたしだって最後まで遣り合うつもりはないわよ。この異常事態、すぐに学園の先生が収拾　　」

鈴の言葉が途中で途絶えた。彼女は言葉を失っていた。

何故なら、黒煙と紅い炎の包まれたアリーナ中央からふわりと浮かび上がってきたからだ。

「なんなんだ、こいつ……」

シオンの『ストレイド・リンクス』に色やフォルムは酷似していたがその姿は異形だった。

何より異常なのは2メートルを越える巨体を覆う『全身装甲』フル・スキン。

本来、ISは部分的にしか装甲を形成しない。防御はほとんどがシールドエネルギーで行われるため、装甲というものはあまり必要ない。

物理シールドを搭載した防御特化の機体もあるが、それでも異常だった。

騎士の甲冑を模したスマートなフォームにそれを覆うマント型の装甲板。両の掌にはアリーナの遮断シールドを破壊して物であろうビーム砲口が照明の光りを受け、鈍い光を放つ。全身には姿勢制御用なのかスラスターが至るところに取り付けられている。頭部には単眼型のセンサーレンズがせわしなく動く。

「織斑くん！鳳さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生達が制圧に行きます！」

突然の個人回線による通信。それは管制室の真耶からの物だった。

「いや、先生が来るまで俺たちで食い止めます」

襲撃者のISは遮断シールドを突破するほどの火力を有している。つまり、今ここで誰かが相手をしなくては観客席にいる人間に被害が及ぶ可能性がある。だから、といって鈴に足止めを頼むということもあり得ない。

そんな選択肢は、織斑一夏には存在しない。

「いいな、鈴」

「誰に言ってるんのよ。カッコつけといて足引つ張らないでよね！」

一夏と鈴は横並びになってそれぞれの得物を構える。

そこで、ある違和感に気がついた。

「なんだアイツ、戦う気があるのか？」

「……確かに、先からなにもしないわね」

襲撃者は両腕をだらりと垂らし、空中に浮遊しているだけで戦闘行動をとる素振りも見せない。掌の砲口もあらゆる方向に向けている。それは、此方が得物を構えても変わらない。まるで戦う気がないようだ。

「なら、コツチから」

「ッ!？」

突如として一夏は、今まで体験したことのない感覚に襲われた。

全身が警鐘をならし、背筋が凍りつき、冷や汗が滝のように流れる。

一介の高校生である一夏には、それがなんなのかは理解できなかったが、それは間違いなく純然たる殺気であった。

反射的に振り返り、その殺気の発信源をへ視線を向ける。黒煙の晴れたアリーナの中央へと。

そこに、【黒】が、あった。

黒。真つ黒。全ての色を呑み込む艶消しの黒。夜闇を切り取ったかのような漆黒の全身装甲ISが静かに白式を見ていた。

「アレ（・・・）は……………ISなのか……………」

あらゆる無駄を極限まで削り取った細く鋭い、エッジの効いた鋭角的なフォルム。右腰には刃渡り二メートル近い野太刀状の物理ブレードを、左腰には銃身自体が刃になっているアサルトライフルを携えている。全身を埋め尽くす漆黒の中、唯一月明かりのような蒼い光を放つ頭部の無数の複眼。人ではなく、なにか悪夢から這い出てきたような、ヒトとはかけ離れた化け物のような姿。

漆黒のISは、あらゆる既存のISという存在とは、一線を画す存在であった。

「お前は何者で、何が目的だ……………！ 答えろっ！！」

「……………」
一夏がそれ（・・・）に向かって問い掛ける。漆黒のISは何も答

えず、腰にマウントされた物理ブレードとアサルトライフルに手をかける。

真正面。

「
ッ!?」

それは一夏どころか代表候補生である鈴にも、何も見えなかった。消えた。そう判断するしかないほどの動きで漆黒のISは一夏の真正面、手を伸ばせば届くような位置に現れた。

ギョロリと、規律良く並んだ無数の蒼い複眼が全てが一斉に一夏を睨んだ。

「ツツアアアア!」

それに本能的な恐怖を覚えた一夏はがむしゃらに雪片を振るえなかった。

真後ろ(……)から、振りかぶった右腕を漆黒のISに(……)
(……) 掴まれた。

漆黒のISは一夏の右腕を掴んだまま後頭部にライフルの銃口を

押し付け、機械で変換された男とも女ともつかない平坦な声で呟く。

「オセエヨ」

一発の銃声がありーナに木霊した。

VS 甲龍 降り立つ黒（後書き）

次回はジークの無双回予定。

語られぬ災禍（前書き）

ゴレム1戦とジーク無双回。因みに、ゴレム1は漫画使用です。

そしてファース党の皆様、すみませんでしたああああ！！（スライディング土下座）

語られぬ災禍

「オセエヨ」

一発の銃声がありーナに木霊した。

「えっ？」

一夏の口から間の抜けた声が出た。

ライフルから吐き出された弾丸は絶対防御を作動させるわけでも、一夏の体がを傷つける訳でもなかった。

漆黒のISは引き金を引く寸前にライフルの銃口を上空へと向けて、発砲した。

一夏も鈴も訳がわからず唾然となった。漆黒のISが口を開いた。機械で変換された平坦な声で。しかし、確かに失望と怒りを滲ませた声で。

「フツザケンナ」

漆黒のISの猛禽ように鋭い左爪先がぶれて見える程の速度で一夏の背に突き刺さった。

「ゲツ、がああっ!!」

逆くの字に折り曲がった一夏の体から手を離すのと同時に、漆黒のISはその身を右回転、トマホークのような回し蹴りを一夏の鳩尾に叩き込む。ミシリッと肉の軋む音がした。脚部スラスタールにより加速されたそれは、一撃で一夏を地表に叩き落とした。

「一夏!? このおお!!」

鈴は両肩の衝撃砲を展開、至近距離か不可視の弾丸を放つ。それを

「シッ
」!

漆黒のISは右腰にマウントされていた野太刀状の物理ブレードを抜刀、抜き打ちの一刀で至近距離から放たれた衝撃砲の不可視の弾丸を両断した(･･････)。

「なっ!?!」

目の前で行われた神業に驚愕する鈴には一切目もくれず、漆黒のISは無機質に光る無数の蒼い複眼で地を這う一夏を見下ろす。

どん、と空気が破裂した音がした。

全身に取り付けられた大出力スラスタから膨大な噴射炎が噴射され、瞬時に音の壁を突発し、漆黒のISは斜めの軌道で地表に突っ込む。隕石のように落下するISはその速度のまま立ち上がるうとしていた一夏の背を踏みつけた。

「は　　があ……………！！」

ISの防御機構を突破した衝撃が骨を軋ませ、肺を圧迫する。肺の中にあつた空気が全て吐き出され、一夏はまともに声にならないうめきを上げた。

漆黒のISは右手のブレードの鋒ホウと左手のアサルトライフルの銃口を一夏の頭部に向ける。しかし、直ぐに脱力して両腕を力なく下ろしてしまった。

「ンダヨ…………コレ…………」

漆黒のISの発した声には深い絶望が滲み出ている。空を見上げ、ソレ（・・・）は怒りの咆哮を上げた。

「フザケンジャネエゾオオオ！！　ナンナンダヨ、コノヨワサワヨオ！！　コンナザコノタメニ、オレワ…………オレタチワツ…………！！
！！」

駄々っ子のように両腕と頭を振り乱して叫ぶ。相変わらず機械に変換された男とも女とも分からない平坦な声だが、それでも深い

怒りと絶望は伝わってきた。

「モオ、イイ」

漆黒のISは弾かれるように飛び上がり、空中に静止する深い灰色をした騎士甲冑ISの方に向き直る。再び怒りの咆哮をあげた。

「テメエガヤレ、ドロンギョウ!!」

漆黒のISの命令を受け、今まで微動だにしなかった騎士甲冑ISが右の掌を掲げ、今だに地面に倒れる一夏に照準を合わせる。その掌の中心にあるレンズに光が集まる。

「危ないっ!!」

間一髪、鈴が一夏の体を抱き抱えてさらう。その直後にさっきまでいた空間が熱線で砲撃された。

「ビーム兵器……しかも、セシリアのISより、出力が上か……」
「ちょっと、一夏! あんた大丈夫なの!？」

息も絶え絶えといった感じの一夏に鈴は問いかける。いかにISに操縦者保護機能があるといえど、あれほどの攻撃を食らえば無傷で済むはずかない。

「な、なんとかな。もう大丈夫だから離してくれ」
「う、うん」

鈴が腕を放すと、一夏は呼吸を整えて雪片を正眼に構える。ダメージは確かにある。全身が軋むし、何より痛い。だが、戦えないという訳でもない。

騎士甲冑ISはそれを確認するとスラスタ―に点火し、飛翔する。

「先に灰色の方を叩くぞ！黒い方はやる気がないみたいだしな！！」
「分かってるわよ、そんなこと！」

一瞬だけ漆黒のISに意識を傾けると、ヤツは退屈そうに中継室の屋根の上に腰を下ろしていた。

ヤツの意図は全く理解できないが戦う気がないのら各個撃破するまでだ。

「よし……行くぜっ！！」

二人は突進してくる敵と、真っ向からぶつかり合った。

「もしもし！？ 織斑くん聞いてます！？ 鳳さんも！ 聞いてます！？」

プライベートチャンネルで呼びかけるも反応は返って来ない。

本来ISのプライベート・チャンネルは声に出す必要は全くないのだが、そんなことを失念するぐらい真耶は焦っていた。

モニターでは既に、騎士甲冑ISとの戦闘が映し出されている。通常のISバトルとは全く違う、スポーツではない紛れもない実戦だ。

観客席には防護シールドが下りており、生半可な攻撃ではビクともしない。

だが、ISを駆り戦う二人には危険が大きく伴う。

しかも、相手はISと同等の防御力を誇るアリーナの遮断シールドを容易く破壊した攻撃力を持っているのだ。下手をすれば命にさえ関わる。

生徒を守る教師として止めなければならぬと真耶は呼び掛けを続ける。

「本人たちが”やる”と言っているのだから、やらせてみれば良いだろう」

「お、お、織斑先生！？何をそんな呑気な事を言ってるんですか！？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

コーヒーメーカーからコーヒーを注ぎ、そしてスプーンを摘んだ。白い粒子を入れてかき回す。

「……………あの、先生。それ塩ですけど……………」
「……………っ!？」

千冬がぴたりとコーヒーに運んでいたスプーンを止め、容器を確

認。でかでかと『砂糖』と書かれた容器の隣に『塩』と書かれた容器があった。

開いていたのは塩と書かれた容器である。

「……なぜ塩があるんだ……？」

「さ、さあ……？ でも、大きく塩って書いてますけど……」

何とも言えない空気がその場を支配した。

「あつ！ やつぱり弟さんが心配なんですね！？ だからそんなミスを

……っ！？」

「……………」

嫌な沈黙。とても嫌な沈黙。真耶はそこまで言っ、自分が言っ
てはいけない事を言ったと気付く。が、時既に遅し。

「……………山田先生、コーヒーをどうぞ……………」

ずずいつと鼻先に突き出されたのは、千冬の入れたコーヒー。

「へ？ あ、あの、塩が入って……………」

「どうぞ」

再度押し付けられるコーヒー（微糖ならぬ微塩）。真耶は涙目で
それを受け取った。

「熱いので一気に飲むといい」

悪魔がいた。

「先生、私にISの使用許可を！ すぐにも出撃できますわ！！」
「そうしたいところだが、 これを見る」

ブック型端末の画面を数回叩き、表示される情報を切り替える。新たに表示された情報はこの第二アリーナのステータスチェックだった。

「遮断シールドはレベル4に設定……？しかも、扉がロックされてあのISの仕業ですよ！？」

「そのようだ。これでは避難することも救援に向かうこともできないな」

実に落ち着いた調子で話す千冬だったが、よく見るとその手は苛立ちを抑えきれないとばかりにせわしなく画面を叩いている。

「で、でしたら、緊急事態として、政府に救援を」

「すでにやっている。現在も、三年の精鋭がシステムクラックを実行中だ。だが、すぐには終わらない」

言葉を続けながら、益々募る苛立ちに千冬の眉がぴくつと動く。それを危険信号と受け取ったセシリアは悔しそうに、頭を押さえながらベンチに座った。

「はああ……。結局、待つていることしかできないのですね……」

「どっちにしろ、お前では足手まといだ。突入部隊には入れん」

「なっ、なんですって!？」

「お前のISの装備は1対多向きだ。お前が多に入れば要らぬ混乱を生む」

「そ、そんな事はありませんわ!」

「では、連携訓練はしたか? その時のお前の役割は? ビックトの使用方法は? 味方の構成は? 敵はどのレベルを想定している? 連続稼働時間」

「わ、わかりました! も、もう結構ですっ!」

「ふん、わかればいい」

放っておいたらそれこそ数時間は続きそうな千冬の指導に、セシリアは降参だとばかりに手を上げる。そしてガツクリと肩を落とした。

「はぁ……。言い返せない自分が悔しいですわ……」

どっと疲れた気がした、濡れたため息はさっきよりも深かった。それからふと、あることに気がつく。

「あら? 篠ノ之さんはどこへ……」

きよろきよろと周囲を見回すセシリアとは対照的に、千冬だけはさっきまでとは違う異様に鋭い視線をしていた。

シオンは第二アリーナAピットの中で避難するわけでもなく、夏に呼び掛けるわけでもなく、静かに戦闘を映し出しているモニタ―を見据えていた。

シオンが見ているのは自分のISと似た意匠をして騎士甲冑ISだ。

視線を反らさず、ぽつりつと、呟いた。

「あれは……『ゴーレム』？　じゃあ、あの黒いのはなんだ……」

彼が漏らした言葉の意味を知るものはいない。

襲い来る騎士甲冑IS。一夏と鈴は両の掌から照射されるビームを躲し、挟撃を仕掛ける。

「おらあつー!!」

「せいやあつー!!」

が、騎士甲冑ISは鈴の一撃をマント状の装甲板で受け止め、一

夏の刃を回避するや、強烈な蹴りを一夏に繰り出した。

「グウツ!?!」

「一夏……!! あうっ!!」

返す刀でマント状の装甲板を振るい、鈴を弾き飛ばす。そして、
両腕を広げ、一夏と鈴を照準^{ロック}

「やばっ……!?!」

「まずっ……!?!」

即座に回避行動に移った二人に対して、騎士甲冑ISはビームを照射しながら両腕をブンブンと出鱈目に振り回し、コマのように高速スピン。

「ああもっつ、めんどくさいわねコイツ!」

鈴が回避行動を続けながら衝撃砲を展開、砲撃を行う。がしかし、騎士甲冑ISは即座に攻撃を中断、マント状の装甲板が機体全体を包み込むように動き、衝撃砲の不可視の弾丸を受け止める。だが、視界が潰れ、動きも止まった。

「一夏っ!今よ!!」

「応っ!!」

一夏は瞬間加速を使い、高速接近。輝く白刃を、騎士甲冑ISに目^{イゲンションブースト}掛けて振り下ろした。

だが、騎士甲冑ISは全身のスラスタを吹かし、その場からすぐに離脱。間合いを取ると同時に両掌の砲門からビームを連射する。

闘を観察していた。

『彼』から見れば随分とお粗末な戦い、それこそガキの喧嘩と言いたくなるレベルだった。見ていても退屈で仕方ないのだが依頼主の命令を無視して此処にきているため、少しでも機嫌を取れそうな物を持ち帰る必要があるのでデータ収集を怠るわけにもいかなかった。

今優勢に立っている、灰色の騎士甲冑IS 彼がこの世で最も嫌う人間が言うには『ゴレム1』 に意識を傾ける。

アリーナの遮断シールドを撃ち破れる程の火力、アクティブに動くマント状の装甲板による高い防御力、全身に取り付けられたスラスタに裏打ちされた機動性。全てにおいて並のISを大きく上回っているだろう。製作者の相変わらずの完璧主義には呆れるしかない。

だが、その動きには幾つかの規則性があるのは遠目にみていた彼にも理解できた。まだまだ問題は多い実験機と言った所だろう。

次に中国製第三世代IS甲龍に意識を向ける。

実験機としての意味が強く、基本的に燃費が悪い第三世代の中で基本スペックや持久戦を重視したコンセプトは悪くない。第三世代武装である衝撃砲もいい武装だ。操縦している代表候補生の技術と合わさって強力な武器となっている。

が、些かそれに頼りすぎている所がある。いかに強力な武器とはいえ、乱発されれば対処法の一つや二つ考えつくものだろう。カタログスペックを引き出すには操縦者がまだ未熟。と、彼は結論づける。

キーン……とハウリングが尾を引く声が、足下から響いた。

「どうするのよ!? 何か作戦がないとアイツには勝てないわよ!

」?

「逃げたきや逃げても良いぜ?」

「なっ!? バカに! これでも代表候補生なんだからね!!」

ゴーレム1は地面を滑るように移動しながら、ビームを連射。回避しながら離脱する。

今までの攻撃全てが失敗している。普通ならかわせるはずのない速度と角度で攻撃しても、ゴーレム1の全身に付けられたスラストの出力は尋常ではなく、容易に回避されてしまう。

一夏も鈴木もエネルギーは、残り少ない。状況は圧倒的に不利。それでも退くことは二人のプライドが許さない。

「じゃあ俺も……お前の背中ぐらいは守ってやるよ!」

「えっ……う、うん。ありが　ヒイツ!？」

一夏の台詞と真剣な表情にドキツとした瞬間、鈴の眼前をビームが掠め、ひやつとした。

「集中しろ、鈴!」

「わ、分かってるわよ!」

二人が場違いなやり取りをしていると砲門が熱限界を迎えたのか、攻撃が唐突に止んだ。

ゴーレム1は自身の攻撃で生まれたもうもうと上がる煙に姿を隠す。

「……今の火力で、アイツのシールドを突破して機能停止させるのは確率的に一桁つてどこかしら?」

「ゼロじゃなきゃいいさ」

妙に力強い一夏の言葉に鈴は首をかしげる。

「……何か閃いたの?」

「あいつの動きつてさ……なんつーか、機械じみてないか?」

「? ISは機械よ」

「そうじゃなくてさ……あれって…本当に人が乗ってるのか?」

視界が塞がっていたにも拘らず変わらない反応。正確で規則性のある動き。いくら鈴が注意を引いても絶対に白式の動きから外さない集中力。生身の人間から感じる緩急や乱れ、そういったものが一切感じられない。

「……そういえばアレ、あたし達が話している時って……あんまり攻撃して来ないわね。まるでこっちの話に興味があるみたい……」

思い返すように鈴が今までの戦闘を振り返る。だが、直ぐに頭を振った。

「うつん、でも無人機なんてあり得ない。ISは人が乗らないと絶対に動かない。そういうものだもの」

「本当にそう言いきれるのか？ どこかの国が開発に成功して利権のために黙ってるのかもしれないだろ」

「そういう事もあるかもだけど……じゃあ、無人機だとしたらどうなるの？ それなら勝てるって言うの？」

「ああ、その通りだ。【零落白夜^{れいらくひやくや}】。雪片式型の全力攻撃だ。雪片の威力は高過ぎて、訓練や学内戦じゃあ全力を使えない。でも無人機相手になら、容赦なく攻撃しても問題ない……！」

「……零落白夜だかなんだか知らないけど……攻撃そのものが当たらないんじゃ、意味ないわよ？」

「大丈夫だ。次は当てる」

ニヤリと一夏が不敵に笑うと鈴も直ぐに不敵な笑みで返す。

「言い切ったわね。じゃあ、私はどうすればいい」

「俺が合図したらアイツに向かって衝撃砲を撃つてくれ。最大威力で」

「？ いいけど、当たらないわよ？」

「いいんだよ、当たらなくても」

考えが、あるんだから。

「よし、それじゃあ、作戦開始……！」

『一夏ああああああああああッ!』

「ッ?」

いきなりアリーナ全体に響いた声に、アリーナにいた全員がギョツとした。

「な、なにしてるんだ、あの馬鹿!」

アリーナの中継室を見るとそこにはマイクを持った篝の姿があった。

『男なら……男なら、それぐらいの敵に勝てなくてなんとする!』

大声。あらん限りの声を張り上げ、篝は叫ぶ。またキーンとハウリングが起こるが、それでもその場にいた全員にはよく聞こえた。

「そう、全員に……」。

「」

ゴーレム1は今の館内放送、その発信者に興味を持ったようだった。一夏達からセンサーレンズを反らし。

ひどくゆっくりと、砲門のついた掌を箒に向けた。

「オイ、ニゲネエトシヌゾ」

中継室の屋根の上から回避しようしていた漆黒のISが開放回線オープンチャンネルで気だるげに呼びかける。箒は一瞬、恐怖にその身を震わせたが、ギツと歯を食い縛って、それを睨みつける。

ゴーレム1の右腕が展開、内部の砲身がせり上がり、最大出力形バースト・モ態モードに変形していく。

恐らく、アレがアリーナの遮断シールドを撃ち破った一撃。放たれればISのない自分の命はないだろう。だが

「私は」

彼女は、悔しかった。ISを持たないから、共に戦うことの出来ない自分が。一夏の背を守れない自分が。

だから、せめて。

「私は、逃げない……!!」

一夏を信じる。確信を持って言える、一夏は絶対にあんなヤツには負けない。だから自分も死の恐怖から逃げない。否、逃げる必要など始めからない。

「へエ」

その強い意志と決意に満ちた瞳を無機質な複眼で見詰め、漆黒のISは少し愉快そうに肩を揺らした。

「鈴、やれ！」
「わ、わかったわよ」

両腕を下げ、肩を押し出すような格好で衝撃砲を構える、最大出力砲撃を行うため補佐用の力場展開翼が後部に広がった。

そして一夏は、その射船上に躍り出た。

「ち、ちよつと馬鹿！何してんのよ！？どきなさいよ！」
「いいから撃て！」
「ああもつっ……！どうなっても知らないわよ！」

ドンツ！と一夏は背中に衝撃砲の巨大なエネルギーがぶつかるのを感じ、ミシミシと体がきしむ音を聞きながら、一夏は加速した。

瞬時加速は、後部スラスタ翼からエネルギーを放出、それを内部に一度取り込み、圧縮して放出する技術だ。その際に得られる慣性

エネルギーを利用して爆発的に加速する。

それはつまり、外部からのエネルギーでもいいということだ。そして、瞬時加速の速度は使用するエネルギー量に比例する。

「オオオツ！」

右手の雪片が強く光を放つ。中心の溝から外側に展開したそれは、一回り大きいエネルギー状の刃を形成した。

零落白夜使用可能。エネルギー転換率90%オーバー

その情報を聞くではなく理解した。ISに初めて触れた時と同じ一体感。世界自体を把握できるようなクリアーな五感。そしてなにより、全身から沸き立つような力を感じる。

（俺は……千冬姉を、箒を、鈴を、関わる人の全てを……守ってみせるッ……）

必殺の一撃がゴーレム1の突き出した右腕を、バターを切るよりも軽く両断。攻撃の余波が嵐となって吹き荒れ、遮断シールドを引き裂いた。

「　　っ！！」

ゴーレム1は腕を両断された事も一切意に返さず、残った左腕で一夏の頭を鷲掴みにした。さらに接触面から熱源反応。どうやら密着状態からビームを叩き込むつもりらしい。

「「一夏っ！」「」

幕と鈴の悲鳴のような叫びが聞こえた。だが、一夏はニヤリと笑う。

「狙いは？」

『当然』

『完璧ですわっ！』

刹那、ゴーレム1の額と左肩にライフル弾が直撃した。その衝撃で鷲掴みにしていた一夏の頭から手が離れ、ぐらいと体勢が崩れる。その直後、上方から襲いかかるレーザーの雨。その全てがゴーレム1を撃ち抜いた。

IS装甲が弾け飛び、内部の無数のケーブルと人工筋肉が引き千切られ、完全に真っ二つになったゴーレム1は地上に落下した。

人間には予測出来ても無人機械には予測できない、認識外から

真つ二つになり地上に落下していく無人機を確認して箒は安堵の息をついた。

信じた通り一夏は勝って自分を守ってくれた。それが嬉しくてつい顔の筋肉が緩んでしまう。

「オイ、テメエ」

いきなり、真横から抑揚の無い機械的な声が聞こえた。振り向き、見えたのは夜闇を塗り固めたような漆黒のIS。中継室に入り込んできたそれは、無数の蒼い複眼で箒を視ていた。

「ナンデ、ニゲナカッタ？ ヘタシタラシンデタゾ」

それは純粋な疑問。ただ単純に箒の行動が理解できなかったから聞いたに過ぎない。だが、それでも箒の足は震えそうになる。目と鼻の先にいるのは恐らく先ほど倒した無人機よりも数段強い、自分などでは及びもつかない存在なのだ。

それでも箒は震え、逃げそうになる自分に渴を入れ、再度目の

漆黒のISは天を仰ぎ、その身を痙攣させるように震わせ、大笑した。心底愉快そうに、だけど何処か悲しそうに。

一頻り笑い終えた後、漆黒のISは未だに体を震わせながら愉快そうに口を開いた。肉声で、若い男の声で。

「イイね、イイねエ、最高だ！ 気に入ったぜオマエ！！」

瞬間、黒い閃光が弾け、漆黒のISのアーマーが粒子へと変換され、消えた。

現れたのは若い『男』だった。歳は二十代前半程、東洋人らしい黒い髪と瞳。山猫の彷彿させる一部の無駄も無い筋肉質な体と鋭いつり目。それが、漆黒のISの操縦者の正体だった。

「お、男……？」

箒は目と口を真ん丸に開いて、驚愕を露にした。それは当然の反応だ。ISは女にしか使えない。世界で唯一ISを動かせる一夏と世界唯一の男でも動かせるISを持つシオンは例外的に使えるが、それは共に世界で唯一の物のはずだ、つまり二人以外でISを使える男など存在しない筈なのだ。

「おう。ジーク・キサラギだ、宜しくな」

男　ジークは愉快そうに目を細め、あまりの事に硬直している

箒の顎に手を伸ばし、持ち上げる。そして

「な、っ！」

一秒未満の出来事。

開きかけていた箒の唇を、ジークのそれが塞いでいた。冷静に事態を理解する暇など無かった。驚きは後から訪れた。目をいっぱいに見開く事ぐらいしかできなかった。互いの唇が離れ、一瞬止まった息が「ぷは」と漏れる。

「お？　もしかして初めてだったのか？」

マグマが噴出するようだった。箒は怒りに任せて思いっきりジークを殴りつけた。ガツンといい音がした。

「あだッ！」

「貴様っつ……………！！！」

箒は怒りと涙で震える瞳でジークを睨む。かたく握った拳は震えている。怒りのあまり涙が溢れそうになるが、目の前の男に泣き顔をさらしたくないので堪える。

「そんなに怒るとは予想外だな。いや、悪かった」

箒の右正拳が入った頬をさすりながらジークは肩をすくめた。

そして、何かを感じとったのように中継室の外に視線を飛ばす。

「篝ちゃんを……泣かせたなあああああっ！！」

左前方の客席から怒りの咆哮と共に大量のマブルフラッシュと銃声が発せられた。

「ハッ！」

ジークは瞬時にISを展開、中継室の外に飛び出す。先ほどまでジークがいた中継室の一角がライフルとマシンガンの銃弾に蜂の巣にされる。だが、一発も篝を傷つけていないあたり怒りに任せた攻撃でもなさそうだ。

「つうか、テメエがキレんのかよ」

てつきり、織斑一夏がキレて襲いかかって来るのではないかとちよっと期待していたジークは残念そうに呟く。その間も、マシンガンによる弾幕とそれに紛れてライフルによる狙撃が飛んでくるが機体を軽く舞うように動かして、全弾回避。

「やてと、」

ジークのISの無数の複眼がそれぞれ独立して動き、第二アリアナ全体を視認する。

此方に向けてマシンガンとライフルを連射してきているストレイド・リンクス、背中のフィンアーマーからビットを分離させ全方位攻撃に移行しようとしているブルー・ティアーズ、両肩の非固定アンロックク・ユニット

浮遊部位を展開する甲龍、雪片を握りしめ飛翔する白式、それら全てを注意深く観察する。

戦いが始まる。

ジークの動きに相手が「ついて来られれば」の話だが。

ジークと名乗った男の予想外な行動は、ハイパーセンサーのお陰で一夏達にも表情までよく見えた。

自分の唇を奪った相手を殴った筈は溢れそうな涙を必死に堪えていた。

「あ、の……ヤロウ……」

一夏の視界がさっと血の色に染まった。雪片の柄を握り潰さんとはかりに握り締める。つい先ほどまでの戦闘のダメージが残っているとか、エネルギーが残り少ないとか、一切考えず一夏はジークに斬りかかるうとした。しかし、一瞬早く。

反応する暇も与えない。両の刃を振るう。いかな太刀筋を描いたのか、両腕のライフルとマンガンだけではなく両背中のミサイルポットすらも切り裂かれた。

ミサイルポットの爆発に飲み込まれるシオンを尻目に間髪入れず次の機動。再び、瞬時加速で疾る。

次に現れたのはセシリアの真横。刃のようなフォルムのアサルトライフルを振るい、セシリアの頭に狙いを定め発砲。

アサルトライフルの銃弾がセシリアの顎先を撃ち抜く、絶対防衛に守られているため怪我をすることは無いが衝撃は通る。

「あっ」

脳が激しく揺らされ、脳震盪を起こしたセシリアは崩れ落ちた。

「コイツっ!!」

鈴は肩の非固定浮遊部位アンロック・ユニットと後部力場展開翼を展開、衝撃砲《龍砲》をフルチャージ。した瞬間、野太刀状のブレードと刃のようなフォルムをしたアサルトライフルが砲身に突き刺さった。瞬時加速による高速刺突で衝撃砲を貫いたジークは鈴の腹を蹴って、両手の刃を引き抜くと同時に距離を取る。

「きゃああああ!？」

ジークに蹴り飛ばされた次の瞬間、圧縮された空間が炸裂し、それによって生まれた暴風に巻き込まれ鈴は吹き飛ばされた。

「弱エ。代表候補生でも所詮はガキか」

一瞬で、戦闘続行不可能になった三機を見てジークは退屈そうに呟いた。

「……………リポルバー・イグニッション・ブースト個別時間差瞬時加速だつて……………国家代表クラスの操縦者でも成功率四割以下の筈だろ……………」

ボロボロになりながらも爆炎の中から這い出てきたシオンはジークが行った超高等技術に信じられない物をみたように呻く。

確認出来ただけでも瞬時加速を時間差連続発動したのは三回。それだけでも国家代表クラスでも出来るかどうか解らない領域だが、それだけではない。ジークは視界から消えて見せた。例え、速さに特化したISの瞬時加速であろうともハイパーセンサーが認識できない速度で動くことなど不可能だ。恐らく、瞬時加速と同時に何らかの手を使ったのだろう。

シオンは自分の力に誇りと自負を持っていた。自分は未だISの性能を完全には引き出せてはいない、だが師である織斑千冬に教えを請い死に物狂いで身につけた自身の力は代表候補生にも劣らないと、そう思ってきた。

だが、目の前の男は余りにも次元が違った。自分と代表候補生二人を文字通り一瞬で倒した。その力には戦慄すら覚える。

そんなシオンの心中を知ってか知らずか、ジークは何気なく言った。

「おいおい、今の程度でそんなに驚くなよ。なんなら瞬時加速で反復横跳び測定でもしてやろうかア？」

「……………あ……………」

折れた。シオンの心を支えていた大事な何かが音を立てて折れた。
そこへ

「お……おおおおお　　！！」

上空から飛来した一夏が渾身の一刀を振り落とした。

「あぶねッ」

だがしかし、たやすく野太刀状のブレードで受け止められた。
かまわずそのまま全力で押す。白式に押し込まれながらもジークは
全力とは程遠いあっけらかんな声で問いかけた。

「なア、篠ノ乃箒てエのはテメエの女か何かか？」

「な、なに？」

今まさに刃を交えている相手にいかにも間の抜けたことを聞いて
くる男に一夏も戸惑う。

「だって、滅茶苦茶キレてるじゃねエかオマエ」

「てめえ、ふざけてのかっ！？」

吐き捨てるように返答しながら全力で押し続ける。ジークはそん
な一夏をよそに思案顔を深めている。

なめやがつてええええええッ！

ブレードをはじくように雪片を振り抜いて間合いをとり、中腰に雪片を構え直す。漆黒のISの無数の複眼が興味深く再び一夏をみやる。

その顔面へむけて一閃。

「ほ？」

ジークはのけ反ってその剣閃を避ける。

体勢を立て直す隙も与えない為に、間髪入れずに連撃を繰り返す。

「よ、おお？」

一夏の斬撃を捌き、回避するジークの声が純粹な驚きに変わっていた。一夏の太刀捌きが、明らかに想像を凌駕していたからだ。

箒は強い女の子だと一夏は思っている。けして弱音を吐かないし、彼女が泣いている所など一夏は見たことがない。そんな彼女が泣き崩れた。どれほど悔しかったのか、辛かったのか一夏には想像もつかない。

「てめえだけは、許さねええええ！！」

「あ……」

そして遂に、一夏の雪片がジークの手からブレードを弾き落としました。

「やッベ」

「もらったああああッ！」

どれだけ力の差があるうが関係ない。隙さえつけば、勝てる。抜けた声を出しているジークの胸に雪片を叩き込む。容赦しない、もとよりできる立場にはいないし、する気もない。ただありったけの力を込めて振り抜く。が、雪片は空を切った。

ほんの一瞬前まであった漆黒のISが消失し、目標を失った刀が走りバランスを崩す。

「よオ、結構がんばったじゃねエか」

声は背後。振り返るよりも先に背中に衝撃を受けて地面を五メートルほど転がった。

「ぐう、がああああ」

背骨が嫌な音を立てたのが聞こえ、身じろぎ一つで激痛が全身を走る。

元より勝ち目のない戦いだとは分かっていた。だけど、これほどとは。

「ISの操縦はてんで駄目だが、踏み込みは中々だし、剣術の基本も出来てる。筋は悪くねエな」

軽い口調でブレードを拾い直すジーク。その様はまるで平然としていて焦りなどといった感情は微塵も感じられない。

やはり、手を抜いて遊んでいたのだ。

「オマエは………いつたいなんだ………何をしに此処に来た!？」

雪片を支えにして必死に立ち上がろうとする一夏は、喉よ裂けよといわんばかり叫んだ。それが、一矢も報いることも出来なかった彼のせめてもの抵抗だった。

問うと、ジークは答えた。

いともあっさり。自分の中の当たり前を口にするように。けれど、芯のある強い声で。

「IS【ディザスター】のジーク・キサラギ。テメエの敵だよ、織斑一夏」

その言葉にどんな意味が込められていたのか一夏には分からなかった。

だが、男の言葉には覚悟が見えた。

覚悟は刃に似ていた。研ぎ澄まされ、磨き抜かれた一条の刃だ。

「目的は、もつと強くなつたら教えてやる。　　まア、それまで生き残れたら話だがな」

敵ISの再起動を確認！　　ロックされています！

「!？」

片方だけ残った左腕。ゴーレム1は装甲が完全に崩れ落ち砲身だけになったソレを一夏に向けていた。命ある人には不可能な、命なき機械だけが可能にする機体が完膚なきまで破壊されてからの最後の一撃。

次の瞬間、迫り来るビーム。一夏は、ボロボロの機体と悲鳴を上げる体に鞭を打ち、ためらいなく光の中へと光の中へと飛び込んだ。

真っ白な視界の中、刃が装甲を切り裂く手応えを感じた

語られぬ災禍（後書き）

ジークが異常に強いと思うとは人もいるかもしれませんが亡国企業の一員であるマドカさんの共犯者あいつですから、これぐらいの実力は無いと……えっ、それより幕のファーストキスを奪ったのが問題だ
って……ライバルポジションキャラですからヒロインにはちょっと
つかい出さないといけないと思ってやりました。ごめんなさい。でも、一夏もラウラに奪われてるし別に良いじゃん……えっ、関係ない……すみません。

黒と紅の宣戦布告（前書き）

お、終わりました。長らくお待たせして申し訳ありませんでした…

……

今回が今まで一番の難産でした……ぐだぐだ感を感じざるおえません（泣）

黒と紅の宣戦布告

確か、あれは、仕事で大怪我した時だったか。

どうやら丸一日以上寝ていたらしい。目覚めた時、貧血気味で頭がくらくらすると、目眩がするほどの空腹を感じた。起き上がるうとしても腹に力が入らないどころか傷口が痛み、ろくに身動きも取れない。天井を見上げたまま往復しかけたが、ふと、ベッドの真横に小さな気配があるのに気付いた。じわじわと感覚が戻っていき、ベッドに横たわる自分の手を誰かが握っていることによろやく気づいた。

「……『バティ』か？」

答えの代わりに、「ぐじつ」と鼻をすする音が返ってきた。

ぼんやりとしていた記憶が鮮明になってきた。確か爆発した戦車の破片が脇腹に刺さり、なんとか安全地帯まで逃げたところで力尽き倒れた。そして、そこを偶然通りかかった女に助けられたのだ。

肩を借りてどうにかこうにか歩く最中、残してきたバティのことを言ったような気がする。置いてけぼりにするわけにもいかなかったからだ。

ジークは、自分が死んではいなかったことと、バティがここにいることに全身から力が抜けるほど安堵した。

「悪いいな」

掠れた声でそう言うと、バティは俯きたまま頷いき、ただジークの手を握ったまま押し黙った。隙間風のような音が聞こえる。最初はそう思ったが、それがバティの細い泣き声だと気づいた時には流石に驚いた。俯いたままバティは顔をくしゃくしゃにして泣いていた。

「まっ、」

「……ま？」

ひくつ、とバティはしゃくり上げ、

「まっでた、わたしっ、ジークのこと、まっ、まっでた……ずっと、ず、つと、まっでた。わたし、どこも、どこも行かないからっ」

どこにも行かない。

どこにも行かないから、どこにも行かないで。

バティはそうした意味のことを言っていた。泣きながら、つかえながら、何度も何度も。

ジークにだってわかってる。バティにはもう、自分しかないことくらい。ジーク・キサラギがいなくなってしまったら、バティはもう本当にどうしようもない。だがその一方で、ジークにとってもバティしかいなかった。二人ぼっちの『揺り籠』の大きな秘密を共有した人間で、お互いにはお互いしかないのだ。バティはそれを実感したのだろう。いや、あるいはとづくにわかっていたのだろう。

か。

「泣くな。オレは死んでねエ。だから、泣くな」

バティはジークの返事を聞いてようやく安心したようだった。何度かしゃくり上げ、ずびつと鼻をすすって、ようやく泣き止んだ。

「……あのときは、泣けって言ったくせに」

「場合によるんだよ。オマエは、泣くより笑ッてる。その方がいい」
そう言っつて、手本を見せてやるように口の端を吊り上げ、不敵に笑っつてみせる。間違っつても年頃の女の子がやるような笑顔ではなかつた。バティは目を丸くして、少し不器用ながらも、ようやく笑った。

ずっと一緒にいると約束した。……約束したはずだった

「つうつ……ッ？」

刺す様な鋭い痛みが走り、一夏は目を覚ました。
目に映った天井は、寮のそれとは違っていた。

「ここは……………保健室か？」

自分がベッドに寝かされている事に気が付き、鼻腔をくすぐる消毒液の臭いで、そこが何処かを理解する。

「あの後、どうなったんだ……………？」

再起動した無人機に向かって雪片を振り下ろした　　そこから
が思い出せない。

「　あの後、黒いISは何もせず立ち去ったよ此方の追尾を振り
切ってたな」

「……………っ！？　千冬姉……………痛う！？」

仕切りのカーテンを引いて、姿を見せたのは千冬。思わず、一夏は体を起こそうとしたが背骨に激痛が走り、ベッドに倒れこんだ。

「全身打撲だから、無理に動くな。衝撃砲の最大出力を背中中で受け止めた上にあれだけ蹴り飛ばされてそれだけで済んだ事を幸運に思え。しかもお前絶対防御を解除していたそうだな？よく死ななかつたものだ」

「千冬姉、他のみんなは……………」

「全員軽症、軽い打ち身程度だ」

「そうか……………良かった……………」

安堵の息を漏らす一夏に千冬はいつもよりずっと柔らかな表情を向けた。それは、世界にたった二人だけ家族にだけ見せる表情だった。

「お前も無事で良かったよ。家族に死なれるのは目覚めが悪い」

「……………あっ……………その……………ゴメン、心配かけて」

なので一夏は謝る。自分が無茶をして心配をかけたのは間違いな
いからだ。

千冬は一瞬きよんとした後、優しく笑った。

「心配などしてないさ。おまえはそう簡単には死なない。なにせ、
私の弟だからな」

変な信頼の置かれ方だが、それは千冬の照れ隠しの一種だとわ
かっているので一夏には気にはならない。

「では、私は後片付けがあるので仕事に戻る。お前も、少し休んだ
ら部屋に戻っていいぞ」

それだけ言い残すと、千冬はすたすたと保健室を出ていった。

千冬が出ていったのを感じ、一夏は瞼を閉じた。

瞼の裏に浮かぶのは、自分達との次元の違いを見せつけ、蹂躪し、
去っていった黒の姿だ。

(俺がもっと強ければ……クソッ………)

一夏は自身の力不足を悔やみ、拳を握り締める。再び体に刺すよ
うな痛みが、さらに強く握り締める。

「あー、ゴホンゴホン！」

すると、千冬と入れ違いに誰かが入ってきたようだ。……という
か、そのわざとらしい咳払いは間違いなく幕だ。

「よっ箒」

「うっ、うむ」

ポニーテールの幼馴染みは、腕組みをしてふんと鼻息を漏らす。その姿は怒っているのか上機嫌なのかよく分からなかったが、取り合えず元気そうだった。

一夏はそれをキチンと確認して、体を起こし深々と頭を下げた。

「箒、ごめん！！お前に酷いことをしたヤツを一発、殴ることも出来なかった！！」

「い、一夏！？」

突然の行動に混乱する箒だが、一夏は構わず続ける。

「あいつはお前に泣き崩れるほど酷いことをしたつてのに、俺はなにも出来なかった。だから、ごめん！！」

痛む体を見捨て、ベットに手を付き、土下座のように頭を下げる。きつと、あの時の箒の方がずっと痛くて苦しかったと思って。

その一夏の行動に箒はえらく狼狽したようだった。

「と、とにかく頭を上げる！ 男がそんなに簡単に頭を下げるな！ 後、私は泣き崩れてなどいない、アレはシオンの攻撃に驚いて蹲っただけだっ！！」

「えっ、そうだったのか？」

箒の言葉に咄嗟に頭を上げる一夏。視界に映った箒は顔を真っ赤

にしてぶるぶると生まれたての小鹿のように震えていた。

「だ、だいたい、お、お前は何を考えているんだ!!」

「へ?」

いきなり怒られた、何を憤慨しているんだろうか。というか怒っているのかも分からない。なにか、別の感情を隠すために怒っているふりをしているように見える。何故かというと、頬の筋肉がピクピク痙攣している、どうみても必死に表情を取り繕っているようにしか見えない。

「無事だったからいいようなもの……お前より強いシオン達が三人がかりでも勝てなかった相手に一人で挑むなどと、死にたいのか!!」

はあはあと息を荒げる箒は、その肩を上下させるほど興奮している。一夏は何をそこまでいきり立っているのか理解できなかったが、ふと思いついた。

「もしかして、心配してくれたのか?」

「し、していない! 誰がお前の心配などするものか!」

箒は首を千切れんばかりに横に振り、全力で否定した。色々と台無しだ。

「と、とにかくだ! これで訓練のありがたみもわかったことだろう。これからも続けていくぞ。いいな?」

「あ、ああ。わかった」

「わかればいい。……ではな」

箒はゆでダコの如く真っ赤な顔を隠すように踵を返すとそのまま部屋を出て行こうとし、扉の前で足を止め呟いた。

「……………。一夏」

「ん？」

「その、だな。私のために怒ってくれて…………あ、あり、あありっ、」
「あり？」

「あ、ありりりがと……………な、なんでもないっ！！」

結局箒は逃げるような早足で保健室を出ていった。一夏は箒の不可解な行動に首を傾げていたが、疲労が限界まで貯まっていたせい、すぐ眠りの淵に落ちていった。

箒は早足で廊下をズカズカと進む。その顔は耳まで真っ赤だったし、先程までは一夏の前だったので耐えていたが今は決壊したようにニヤけていた。

彼女の頭にあるのは一つの事だけだ。

（一夏が私の為に怒ってくれた、私の為に戦ってくれた。一夏が、

「うっ……うわあああああんっ!!」

「のわっ、日本刀は洒落にならない!? 死ぬ、死んじゃう!!」

襲い来る日本刀を義手である左腕でブロックし続けるシオン。いくら泣きながら振り回さる滅茶苦茶な太刀筋とはいえ相手は真剣。命がけである。

「……あの、少しは、落ち、着いた？」

「……………すまん」

打ち合うこと約五分程度。フラフラになって力尽きた二人は休戦協定を結び、取り合えず事なきを得た。

「うわっ、左腕がターミネーターみたいになってる……………」

「うっ……………す、すまない」

シオンの左腕はえらいことになっていた。被せられていた人工皮膚や人工肉は切り刻まれ、所々剥がれ落ち、内部のサイバネティックな機械義手が顔を出している。かなりキモイ。

「それでき……………いったい何があつたわけ？」

「む、むう……………」

迷惑をかけてしまったバツの悪さから、箒はポツリポツリと喋りだした。

そして。

「で、結局何も言えずに出てきちゃったと」

「う、うむ」

「全然だめじゃん」

「うぐううっっ」

容赦ないシオンの言葉に篤は俯いて喘ぐしかなかった。

「結構ピンチじゃない？ セシリアだけじゃなくて鈴ちゃんまで来ちゃったし、しかも二人共篤ちゃんに比べると積極的だしね」

「そ、そんなことはわかっている……！」

「やっぱり最大のアドバンテージであった同室を失った………
のは、良いとして」

篤にギロリと睨まれ、思わず視線を外す。入学当初は一夏のルムメイトは篤だったのだが、同じ男であるシオンが転入してきた事によって当然部屋替えが起こり、シオンが一夏の同室になり篤は別の部屋になった。部屋替えの際に篤が自分を見ていた目をシオンはたぶん一生忘れられない。

「やっぱ、今すぐにも告白するべきだね。事件の後の今がチャンスっ……！」

「今すぐだと……！？ そんな……心の準備も出来ていないのに、出来るはずがないだろうが……！」

「心の準備なんてもの何時まで経っても出来ないよ。それにさ、

秘め事って楽しいけど気持ちには表に出さないと通じないって

思っておかないと後悔することになるよ」

そう箒の背中を押そうとするシオン顔は何処か儂げだった。だから箒はつい、

「お前は、誰かに伝えられずに後悔したのか？」

と、聞いてしまった。シオンは目を大きく見開いて、無言で驚愕を表れにする。だが、それも一瞬で直ぐにいつも通りの楽しそうな笑みを浮かべた。

「ん〜、内緒かな？」

「こちらは話しているのにそちらは黙りか」

「今の箒ちゃんに他人の事に口を挟む余裕があるとは思えないんだけど？」

「ぐう………！」

あまりの正論にぐうの音を出してしまった箒。その箒にバレないように小さく安堵の息をついた後、シオンはかなりグロいことになっている左手の親指を立てて、サムズアップする

「という事で告白、レッツトライ!!」

「い、言いたい事は分かるが……その、一夏が私をどう思っているか分からなければ………」

「む〜、どうしてこう踏ん切りがつかないかな箒ちゃんは。じゃあ、あの手を使ったら？」

「………？」

「ほら、小学4年の時やった」

「

それからどれ程かの時間が経った頃、一夏は顔の間近に人の気配を感じてうつすらと目を開いた。

視界一杯に入ってきたのはツインテールが特徴的な少女　凰鈴音の顔である。

鈴は目を閉じて、鼻先三センチの距離まで一夏に迫ってきていた。

「……………?」

「……………ッ!？」

「ジョバツ! と、とてつもない勢いで一夏から離れる鈴。その動きはディザスターを彷彿させる程に速かった。」

「鈴か……………どうかしたのか?」

「いや!?! 何でもないわよ!?!」

「声が裏返っているが、寝起きでボクっとして一夏には理解出来ない。」

「起きていても理解できたとも思えないが。」

「あー、そういえば試合はどうなったんだ? やっぱり無効試合か?」

「え、ええ。当然でしょ。あんなことが起きたんだから」

恥ずかしさと気まずさを誤魔化すように、鈴は早口で答える。

「 やっぱりか。あ、そういえば……あの賭けってどうなるんだ？」

「 ふえっ！？ し、試合は中止だし……む、無効でいいんじゃない？」

そういえばそうだったと鈴も思い出したのか、顔を赤らめて慌てる。が、夕焼けが保健室全体を赤く染めてくれていたお陰で一夏には分からなかった。

もう完全に日は沈み、ただ赤い空が広がるのみだ。ふと、その夕焼けの赤で鈴と約束した時のことが蘇ってきた。たしか、小6のときだ。場所は教室。今みたいに夕暮れに染まっていた。

「 正確には『料理が上達したら……あたしの酢豚、毎日食べてくれる？』だったけ。で、どうだ？ 上達したか？」

「 え、あ、ううう……」

さらりと口走られた言葉に、鈴は夕焼けの赤では誤魔化せない程に顔を赤くして、鈴は右へ左へ視線をやったあと、うつむいた。

決死の想いでした告白を言った相手にリピートされるとか、どんなプレイだ。

「 なあ、あの約束つてもしかして、”違う意味”だったのか？俺はてつきりタダ飯を食わせてくれるって事だと思ってたんだけど

」

「ち、違わない！ 違わないわよっ！？ ほ、ほら、誰かに食べてもらったほうが料理って上達早くなるでしょ！？ だから、そう、だから！ そういう事よ！」

「た、確かにそうだよな。別の意味じゃ『毎日味噌汁を』なんて事になっちまうもんな。いや、深読みしすぎだろ、俺。恥ずかしいな」

「へえっ！？ そ、そうね！ 深読みしすぎじゃない！？ あは、あはは、アハハハハハ！！」

引きつった顔で、鈴はやけくそ気味に笑う。というか完全にヤケになっている。

「こつちに戻ってきたってことは、またお店やるのか？ お前の酢豚だけじゃなくて、また親父さんの料理も食べたいぜ」

「あ……。その、お店は……。しないんだ」

「え？なんで？」

「あたしの両親、離婚しちゃったから……」

……。え？一夏の口から間抜けの音が洩れた。そんな一夏かり視線を外し、鈴は窓の外を見遣った。その表情は普段の快活として物とは真逆の暗く沈んだ物だった。

「あたしが国に帰ることになったのも、そのせいなんだよね」

今にして思えば、あの頃の鈴はひどく不安定だった。何かを隠すように明るく振る舞うことが多く、一夏はそれが妙に気になっていた。気前のいい親父さんの顔を思い出す。活動的なおばさんの顔を思い出す。家族がバラバラになる。それは絶対にいいことじゃない。けれど、そうせざるを得ないくらいの、何かがあったのだろうか。

どうして。どうしてなのだろうか。

けれど、鈴に訊けることではない。一夏はそこまで子供ではないつもりだ。

「家族って、難しいよね」

鈴の溶けて消えてしまいそうな小さな呟きに一夏は答えることが出来なかった。

一夏にとって家族は姉である千冬だけだ。両親の事は知らないし、知りたいと思つた事もない。だから、鈴の言葉の重さを知ることが出来ない。

「なあ、鈴。今度、どっか遊びに行くか？」

「えっ……それってもしかして、そのデー」

バシユン！、というエア音がしてドアが開く。

「一夏さん、具合はいかがですか？わたくしが看護に来て
あ
ら
？」

つつかかと金髪ロールをなびかせて、やって来たのはセシリアの足と言葉が止まる。ベッドの傍らにいる鈴を見つけたからだ。

「どうしてあなたが……？一夏さんは一組の人間、二組の人にお見

舞いされる筋合いはなくつてよ」

「何言つてんの？あたしは幼馴染みだからいいに決まってるでしょ。あんたこそただの他人じゃん」

「わ、わたくしはクラスメイトだからいいんです！それに、今は一夏さんの『特別』コーチでしてよ！」

『特別』という部分を妙に強調された。セシリアはついでに「代表候補生ですから」と続けたが、むしろ墓穴を掘ったと言える。

「じゃあ明日からはあたしが特別コーチになつたげる。代表候補生だし」

「そ、そんなのダメですわ！」

ぎゃあぎゃああと開始されるどちらが特別コーチに相應しいか、というかどちらが一夏のパートナーに相應しいかという討論。もちろん当事者は完全に蚊帳の外だ。

（ああ、まったく……早く部屋に帰って休みたい……。ていうか風呂に入りたい……）

一夏の憂鬱は確実に無視されていた。ぎゃあぎゃあと言い合いを続ける二人の間に、ため息だけがぽつんと落ちた。

夕焼け染まる、一年校舎の屋上に一つの人影。

柵に背を預け、何を見るわけでもなくと赤色の地平線を見詰める
灰色の髪をした少年。

「 想いを伝えられなかった相手は君。なんて言えるはずがない
じゃないか……」

流石に筭にあんなこと言われた時は焦った。上手く誤魔化せたか分
からないが、たぶん大丈夫だろう。一夏程では無いが彼女も結構鈍
感なのだから。

未だに失恋とさえ言えないような物を引きずっている自分に呆
れるしかない。髪をがしがしと乱暴にかきあげて、空を見上げる。

もう、空の一部が黒くなってきていた。

その、夜の黒がどうしてもあの襲撃者を連想させた。漆黒の全身装
甲IS【ディザスター】とその操縦者ジーク・キサラギ。筭の唇を
奪い、自分達を圧倒した謎の男。

あの男共に現れた謎の無人IS『ゴーレム1』の事はシオンは少な
からず知ってはいるが、あの男については一切分からない。

あのISがなんなのか、何故ISが使えたのか。男でも使えるIS
はシオンが持つストレイド・リンクスだけの筈だ、IS開発者であ
る篠ノ乃東自身がそう言っていたしシオンも束以外が造れると思
えない。ならば、一夏と同じ男でもISが使える『特別』な人間な

のだろうか。推論は何個か上がるが、それを確かめる術は無い。

だが、そんな小難しい事などシオンは考えていなかった。今シオンが考えているのは酷くシンプルなことだ。

次元が違った。

実力差とか、そういうことではない。本当の意味で戦う次元が違った。想像もつかない、シオンでは理解の及ばない、そんな「領域」にあの男はいた。辛うじて理解したのは、その程度のことだった。そして力だけではなくあの男には意思と覚悟があった。言葉に込められた磨き抜かれ、研ぎ澄まされた一条の刃のような意思と覚悟が。

その次元の違う力と刃のような強い意思の前にシオンの心をあつさり折れた。なのに、

「……………どうして一夏は立ち向かう事ができたんだ？」

一夏は立ち向かった。シオンや代表候補生であるセシリアや鈴が束になって懸かっても瞬殺された絶望的な相手にシオンよりも弱い一夏は立ち向かった。結果として傷一つつけることも出来なかったがそれでも心が折れ、動くことも出来なかったシオンと違い立ち向かう事が出来たのだ。

何故、出来た？

力の差が理解出来なかったのか？いや、そんな筈は無い。一夏はそこまで馬鹿ではないし、シオン達が蹂躪される所を一夏も見ていたのだから理解出来なかった筈がない。

怒りで我を忘れていた？否、それを言ったらシオンも怒りで我を忘

れていた。第一、アレは怒りなど洗い流す程に暴力的な強さだった。何故、どうして。と、シオンは自問する。

どうして、僕には出来なくて一夏には出来るんだ？その『理由』は一体なんだ……………

そこまで考えてシオンはある答えに至った。そして、堪えきれずに笑いだした。余りにも簡単な事に気づかなかった自分が可笑しかったのだ。

「ふ、アハハ。そうだよ、『理由』だよ。なんだ簡単じゃないか、なんで気づかなかっただろう」

理由だ。そう、理由なんだ。

「理由が『有る』か『無い』かの差だったんだ……………」

強く在ろうとする理由。戦うべき理由。引けない理由。それは一夏やジークには有ってシオンには無いものだ。

一夏には余りにも純粋な願いがある。ジークにもきつとあの刃のような意思の原動力となる叶えたい願いや果たすべき目的があったのだろう。

ならばこちらはどうか。シオンには何の目的もない。確かに、ISを手に入れたと言ったのは他ならぬシオン自身だった。そうした理由が一夏への対抗心とかつて己を蹂躪した「力」への歪んだ憧れのようなものだと何となく自覚している。なってしまった後は、

ただ千冬の教えを無駄にしない為に、彼女の期待に報いる為に戦い続けた。言い換えれば、「ただそれだけ」だった。それは「戦うために戦う」とでも言うべき、どうしようもない愚昧さではないのか。

彼等には、理由があり、信念がある。敵対する相手の「覚悟」と相対して、それを押し伏せるだけの意志力がある。ところがシオンはどうだ、さしたる覚悟も信念もなく、ただ力を求めて銃を取り、敵をひたすらに撃ち倒すだけだ。

思う。

俺は、何のために戦ってるんだっけ

学園の地下、五十メートルの位置に存在する隠された空間。

そこは、レベル4権限の持った者しか入れない場所である。

一夏達によって破壊されたゴーレム1はそこにすぐさま運び込まれ、解析が続けられていた。

千冬はモニターに映る戦闘映像を繰り返し見続けながら真耶の報告に耳を傾けていた。

「あれは、やはり無人機でした。コアも、登録されていた物ではありませんでした」

世界中で開発が進むISのそのまだ完成していない技術。リモートコントロールスタンドアロン作と独立駆動。

更に、467機存在するコアは全てが登録済み。つまりは、誰かがコアを（……………）作った可能性がある（……………）。

この事実に対してすぐさま、学園関係者全員に緘口令が敷かれた。

「それと、織斑くんの最後の攻撃で機能中枢が焼き切れてます。修復は不可能ですね。そして、もう一機の黒いISですが」

モニターに夜闇を塗り固めた漆黒の全身装甲ISと黒髪の青年が表示される。

「あらゆる国家のデータバンクに確認を取りましたが、ディザスタというISもジーク・キサラギという操縦者も存在しませんでした」

ISはその絶対の力から操縦者やデータも含めて全て開発した国家に登録、保管されている。だが、学園を襲った異形のISといえるはずの男の操縦者はどの国家のデータバンクにも存在しなかった。

『存在しないIS』と『存在しない操縦者』。報告している真耶自身が信じられないと言った風体だったが、

「そうか。やはりな」

どこか確信じみた発言をする千冬。

「なにか心当たりが……？」

「いや、無い。今はまだ　　な」

そう言つて千冬はまたモニターを鋭い視瞳で見つめる。

その姿はかつて世界最強の座にあつた、伝説の操縦者ブリコンヒルデのモノと寸分
違わないものであつた。

「うーん……シオンのヤツまだ帰つて来ないのか」

なんとか鈴とセシリアの戦いからの退避に成功した一夏は寮の部
屋のベッドでぐったりと横になつていた。

時刻は夜。先程八時を回つたというのに何故かシオンは帰つて来
ない。

「……まあ、寝るか。考えても仕方がないし」

シャワーを終え、部屋着に着替え、歯も磨き終え、後は寝るだけで
ある。

そつえばと、今までの事を振り返る。

ISを偶然動かし、この学園にやって来て、箒やシオンと再会した。さらには専用機 《白式》を与えられてセシリアと戦い、鈴とも再会した。

そして、無人ISと自らを敵と名乗ったジーク・キサラギという謎の襲撃者。

(なんつーか、色々あり過ぎだろ……)

まさに波乱万丈、事實は小説よりも奇なりとはよく言ったものだ。だが、悪くない。親しい人達との再会や新たな出合いは喜ぶべきものだ。そうやって出来ていく人との繋がりがこれからの自分を支えて行くのだと一夏は思っている。

「……寝るか」

照明を消し、一夏は再びベッドに横になった。

）
）
）

「っ……!?!」

いきなり鳴り響いた電子音に、一夏は起き上がり音源である携帯電話を掴む。

一体誰だと画面を見ると『着信 非通知』と書かれてある。間違い電話か、いたずら電話か。取り敢えずは出ることにして一夏

は通話ボタンを押した。

「はい。もしもし?」

『ああ〜、そちら織斑一夏君の携帯ですか?』

聞き覚えのある声だった。今日、記憶に強く刻み込まれた男の声だ。背筋が凍る。一夏は震えた声で電話の向こう側にいるであろう男の名を口にした。

「……ジーク……キサラギ……」

『お、声だけで分かってくれるとは嬉しいねエ』

電話の声は飄々と愉しげに笑う。

「お前、なんで」

『おつと。なんで番号を知っているとかつマンネエ話題は無しにしようぜ。そんな話を話す為に電話したわけじゃあねエしな』

出鼻を挫かれた一夏は深呼吸して自身を落ち着かせる。相手の目的が何かは解らないが冷静に対処する必要がある。

「なんの用だ?」

『まア、そつだな。ちヨツとした警告だな』

「警告?」

『そつ、警告だよ。テメエだつて今日や三年前の事件みてエな事は嫌だろ?』

「　　ッッ!？」

その言葉に冷静であるうとしていた一夏の感情が爆発した。

「てめえ、あの事件に関係してやがったのかッ!！」

『落ちてけよ。あの時テメエを拐ッたのはオレじゃなねエしオレ自身は関係してねエ。まア、オレの依頼主クライアントは関係してるらしいがな』

烈火のような怒声に対してもジークは飄々とした態度を崩さず受け流す。

「依頼主クライアント……?」

『オレは傭兵なんでな、今日の事も仕事の内ッて訳だ。言ッとくが依頼主の事は話させないぜ』

傭兵つウのは信用商売なんだ。と、ジークは続ける。一夏は肩で息をしながらも自分を落ち着かせるように心がけた。相手のペースに乗せられて手がかりを逃すわけにはいかない。

暫くの間が空き。ジークが口を開いた。

『　　でよオ、結局テメエと篠ノ之箒はどういう関係なんだ?』

「　　………は?」

『いや、キスしたら泣かれた上にテメエにキレられたからな。まさか、他人の女に手を出したんじゃないやねエだろうなッとおれも珍しく罪悪感なんてもんを感じた訳だ』

「　　………」

つい先程までのシリアスはどこに行ってしまったのか、凄く微妙な空気が場を支配した。

だが、真面目に聞いてきているみたいなので一夏は一応答えた。

「箒は……大切な幼馴染みだ」

「へエー、幼馴染みねエ。なるほど。じゃあ、あの中国とイギリスの代表候補生は？」

「鈴とセシリアは友達……仲間だよ」

「へエー。なるほどなるほど」

こいつは何を聞いてきてるんだろうか？　そして俺は何を律儀に答えるだろうか？　一夏はだんだんアホらしくなってきた。

ジークはフムフムと何度か一人で頷いた後、こんな事を口にした。

「じゃあ、警告だ。織斑一夏。テメエはもツと強くなれ」

その声に背筋がゾツとした。声には冷たい気配と刃のような意思を伴っていて、まるで首筋にナイフを当てられているようなプレッシャーを一夏は感じた。

「……どういう意味だ……」

『言葉通りの意味だ。テメエには強くなッて貰わねエと困るんだよ、オレの目的為にな。』

もしもテメエが弱いままならどんな手を使ッてもオレがテメエの大事なモノを根こそぎ潰してやる。テメエの仲間とやらも幼馴染みも姉も、テメエに関わる全てのモノをだ。

だから

守りたいなら強くなれ。オレと戦える程に』

あらゆる感情を秘めた、地の底から響くような低く冷たい声だけを残してプツリつと電話は切れた。

「さてと、スコールにはどうやって報告するかねエ……………」

ジークは慣れない事をした疲れを吐き出すように深くため息をつく。

言葉で相手を動かしたり騙したりする口八丁はジークが得意とする物では無い。依頼主への誤魔化しを含めた報告をする事となると憂鬱にもなるというものだ。

『やあ、どうだったかなあ？ 白式との対決は？』

脳に直接この世で最も嫌いな声が響いた。首筋にの人工皮膚に埋め込まれた情報端末がハッキングされ、外部から無理矢理操作されているのだ。残念ながらいつものことなので文句を言う気にもならない。

「黙りやがれクソヤロウ。テメエ、オレが白式を潰さない事を分かッててぶつけやがッたな」

『ん〜、さてそれはどうでしょ？』

殺気を込めてもいつも通り相手は気にも止めない。

弱い第四世代など倒してもジークにはなんの意味も無いのだ。彼が倒すべき第四世代は最高のISでなければ彼の目的は達成できない。恐らく、通信の相手はそれを分かッていてまだ未熟な一夏にジークをぶつけたのだろう。

それに、何の意味が有ったのかはジークには解らないが。

『白式はまだ君の敵にはなりえないみたいだけど、君はこれからどうするのかな？』

「んなもんアイツがオレの敵になるまで待つしかねエだろ。一応、そのための理由も造ッてやッた所だしなア」

人が戦い、強くなるには「理由」が必要だ。

宗教、金、名誉、生存本能、友情、思慕、または敵愾心や競争心。理由は数あれど、それが有ると無いではモチベーションに雲泥の差が出る。

一夏が近しい者の為に動く人間だというのは一度戦った時に分かッた。だから、ジークは一夏に脅迫ともいえる警告をしたのだ。

一夏がジークの言葉をきちんと受け止めたなら、彼は大切なモノ

を守るために強くなるだろう。それこそジークの倒すべき敵となりえる領域までに。

本当の意味で、大切な誰かのために動ける人間は強い、ジークはそれをよく知っている（……………）。

「アイツがしやがるまでは、もう一つの探し物でも探すとするさ」

「もう一つの探し物って女の子だけ？」

「ああ。生きてれば今頃13〜14歳のガキだよ」

そう言うジークの表情は彼らしくないとても優しい笑みを溢していた。

それを感じ取った電話の相手はプツと笑いを吹き出した。

『幼女を探して三千里なんて…………君は素晴らしいロリコンだねえ』

『黙れ殺すぞ』

『キヤアー、怖い!!』

腹の立つ黄色い声を最後に通信が切れる。ジークは腹立だしげに舌を打ち、ツカヅカとベランダに移動して不機嫌全開の顔で夜空を見上げる。

探すといっても、探し物の少女が生きているとは限らない。かえってもうこの世にはいない確率の方が高いだろう。それでも、例えやっとの想いで見つけ出したソレが無惨な死体であったとしても、ジークは少女を見付けなくてはならない。

「 バティ」……………」

此方を見下ろすように煌々と輝く星々を睨みながらポツリと、少女の名を口にする。

それはジークが様々な人達に託され、守ると誓い、守れなかった一人の少女の名だ。

「なんだってんだよ。いつたい……………」

ベットに横たわり目を閉じるが一向に眠れる気がしない。一夏の頭の中は、ジークが言い残した宣戦布告と呼ぶべき警告の事で一杯だった。

「奪われたくなくや強くなれだと……………なんだよ、それ……………」

ジークが強くなれと言った意味と目的は全く理解できない。だが、それでもヤツが本気なのは一夏にも分かった。あの声にはそれだけの重さがあった。

ゴーレム1との最中一夏は、千冬を、箒を、鈴を、セシリアを、関わる人すべてを守ると決めた。そして、ヤツは一夏の関わる人全てを潰すと言った。だから、

「強くなるしかないのか……俺が……」

あの男から皆を守れるくらい強く。

それは途方もないことなのではないかと一夏は思う。ジークは余りにも強かった。一夏だけではなく一夏よりもずっと強い代表候補生クラスが三人がかりでも一撃与える事も出来なかったのだ。

一夏の脳裏に今日の戦いの記憶が浮かんでは消えて行った。そして最後にジークと箒をキスシーンが浮かんできた。

「……………いや、何を考えてるんだ、俺」

すぐに忘れようとするが脳裏に焼き付いてなかなか消えてくれない。あんなものは野良犬に噛まれてようなものだし、箒の為にも気にせずささつと忘れるべきだ。だが、どうしても忘れられない。

心の中がモヤモヤとイライラで一杯になって、しかし、それを晴らす術が解らない。

コンコン。

「……………ん？」

コンコン。

「……………何だ？」

悶々と悩んでいるところに、誰かがやって来た。ドアはまだノックがされている。

このまま出なければ諦めるだろうと、一夏は布団を頭からかぶった。

ドンドンドンドンドズドズンッ！

「なっ、なんだア！？」

いきなり荒々しく鳴り響くドア。どう考えても拳の音だ。跳ね起きて、慌ててドアを開ける。

「はい、どちらさままで」

「……………」

「ほ、筈……………」

果たして、そこにはむすっとした顔の筈が居た。

「何だよ、一体……………」

「う、うむ……………その、だな……………」

「まあ、取り敢えず部屋に入るねよ」

「……………いや、こっで良い」

「そうか」

「そうだ」

「……………」

「……………」

沈黙。なんでもない事は普通に答えられる。だけど、肝心の話となると箒の口は動いてはくれなかった。

「……………箒、用がないなら 俺は寝るぞ」

「っ！？ 用ならある！！」

痺れを切らした一夏がドアを閉めようとするのを見て、箒は慌てて大声を出して呼び止める。

『気持ちには表に出さないと通じないって思っておかないと後悔することになるよ？』

(私は……………後悔したくない)

喉は緊張でからからに渴ききつている。顔から火が出そうな程に熱いのが、自分でもよく分かる。

「ら、来月の、学年別個人トーナメントだが……………」

「ああ、それがどうかしたのか？」

「……………っっ！ー！」

箒は震える体を動かし、ビシッ！と、指を一夏の鼻先に突きつけ

る。

「私が優勝したら……っ、っっっ……！」
「っっっ……？」

「っ、っ……付き合ってもらおう……！」

「……は？」

その日。織斑一夏は一日に二度も宣戦布告された。

黒と紅の宣戦布告（後書き）

取り合えず漸く一巻終了です。長かった……………

今後とも何卒宜しくお願いします。

幕間 亡霊達の間奏曲（修正版）（前書き）

番外編。

この話にはプラシド12さんに考えていただいたオリキャラとオリISが名前だけ登場します。

犬吉さんの小説、IS「ツイン・ソウルズ」に登場する瞬速超過も使わせて頂きました。犬吉さん、許可して頂いてありがとうございます。

幕間 亡霊達の間奏曲（修正版）

その日、ジークは妙な夢を見た。

「ここは……？」

ジークは自分が、何処とも分からない場所にいる事に気が付いた。視界全てを黒で埋め尽くす夜の世界、空には煌々と満天の星達。そして、その中心には此方を見下ろす巨大な蒼い眼のような満月。

「I Daisy, Daisy

Give me your answer do……」

「ん？ この歌は……？」

どこかで、誰かが歌っている。とても馴染みのある歌だ。ジークは声の方に歩き出した。

カツカツと乾いた荒野を踏みしめて行くと『黒い女』が立っていた。

女、いや人と呼んでいいのか解らない存在だった。

髪も、身体も、その全てが夜の黒よりも黒い漆黒、体の輪郭もボヤけている。だが、ジークは自分でも分からないが目の前の存在を女だと認識した。女の月明かりのような蒼い両の瞳がしっかりとジークを睨んできていた。

「誰だ……テメエは？」

「……この歌がナンなのか理解シテいるカ？」

女は問いには答えず逆に問いかけてくる。まだ何処からか歌が聞こえてくる辺りどうやら唄っていたのは目の前の女では無かったらしい。

しかし、問いの意味が分からない。

「どういう意味だ？」

「まだ、ソノ時では無イカ……まアイイ。せいぜい美味ク育てヨ」
「だから……なんだ、テメエは!？」

「て」

「なに……？」

背後から新たな声がした。慌てて振り替えるがそこには誰もいない。

「しのいて」

声は聞き取れない。そして、ジークの意識が遠くへと消えていった。

ギリシャ国土の二割を占めるエーゲ海の西部と本土の横に横たわる

エヴィア島。そこに存在する外周数十キロメートルという広大な敷地を持つ研究施設。

国立軍事技術局。この国の国防に関わる技術が終結する国家最重要拠点の一つ。

その外周部を真夜中だというのに歩く一組の男女の姿があった。

デートの最中だとか、そういう色っぽい事では決してなく、単に仕事の最中なだけだ。

「しかし、最近オレ達のシフト滅茶苦茶じゃねエか？ 世界中飛び回ってるぞ」

黒コートに身を包んだ青年が隣を歩く、同じく黒コートに身を包んだ少女に話かける。

「そうだな。どこの馬鹿がIS学園で大立ち回りするという大問題を起こしたあげくそれを幹部の一人の力を借りて誤魔化したからな、スコールが腹いせに緊急シフトでも組んだのではないか」

「うッ、悪かッたよ」

少女から返ってきたのは冷たい視線と遠回しに責めてくる言葉だった。青年 ジークはやぶ蛇をつついてしまったと後悔する。いつも無口な癖に饒舌になっっているあたりか間違いなく機嫌が悪い。

「まったく。互いの目的のために協力するとは言ったが尻拭いまでするとは言っていないぞ」

「だから悪かッた。その内埋め合わせするから勘弁しろ」

「そうか。期待しないで待っている」

それだけ言ってジークの共犯者^{あいつ}である少女 織斑マドカ。亡国^{ファン}機業^{ム・タスク}のエンジニアント、コードネーム『M』は歩調を早めてジークを置いて行くこととする。

ジークは面倒くさそうに頭を掻きながら歩調を早める。元々、ジークの方が背も高く足も長いので直ぐに追いついた。

「で、今回は何をやればいいんだ？」

「今回のミッションは、新たに『イグニッション・プラン』のトラ^{ケラヴノス}イアルに参加予定のギリシャ製第三世代IS【神砕雷】と【暴風竜^{テュポーン}】の強奪だ」

それだけ言ってマドカはデータメモリを投げて寄越す。ジークのそれを受け取って、首筋の人工皮膚を剥ぎ取り、ジャックにメモリを接続する。脳にメモリの中身、亡国機業が掴んだ標的のISのデータをダウンロードしていく。

あらかたデータを閲覧し終えた所でジークは感嘆の息を漏らした。ケラヴノスとテュポーン^{ケラヴノス}の性能が予想を大きく上回っていたからだ。

「スゲエなこりゃあ。イギリスのティアーズ型^{モデル}、ドイツのレーゲン型、イタリアのテンペスト？型を出し抜いてヨーロッパの防衛を独占しようつつウギリシャの考えも領ける。で、強奪したら誰かが使うのか？」

「ストームと『欠陥^{バグ}』が使用する予定らしい」

「……ストームは分かるがバグがか？ 部隊長は確か査問委員会の方に行ってるはずだろ、なんでまた強奪した機体を使わせんだよ？」
「そんなこと末端のエンジニアントである私が知るはずが無いだろう。私もスコールからそう聞いたただけだ」

ジークは深めのため息をついて後、マドカの頭の上に手を置いた。そしてわしわしと撫でた。

「毎回毎回、そんな情報も渡されない傭兵の扱いに涙が出そうだけ。オレは」

「そういつお前は毎回毎回、何故作戦前に私の頭を撫でる」

頭を少し強めに撫で回されながら上目で此方を睨んでくるマドカの姿を見て少しジークは呆気にとられた。完全に無意識だったのだ。

「なんつウか、昔からの癖なんだよ。嫌ならやめるけどよ」

眩しいものを見るように細められたジークの眼が見ているのはかつて自身の隣にいた一人の少女だ。

それを知ってか知らずかマドカはふいっとそっぽを向いて、口を開いた。

「……好きにしる。別に目くじらを立てる程の事でもない」

どうしたんだこいつ。

眉根を寄せるジークだが、マドカの頬が僅かに赤らんでいることを気付き、だんだん意味がわかってくる。ははア、こいつさては慣れないことに照れてやがるな。そうアタリを付けてにやりといたずらっ子の笑みを浮かべる。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

「……………」

わしわしわし。

「……………」

わしゃわしゃわしゃ。

「……………」

がしががし。

「うん。やっぱり頭の位置が丁度いいな」

「ふんっ！！」

めきりっっ！！ と、ジークの顔面にマドカの右拳が突き刺さった。

「ほぐウツ！？　　いってエ！　　いってエ！！　　テメエいきなり何しやがる！！！」

「黙れ。調子に乗るなよ大馬鹿者が」

なんだやんのかてめえ上等だコラボケカスとガン付け合戦に発展した二人。そんな事していると目的地である正面ゲートに辿り着いた。ジークは気だるげに問いかける。

「で、今回の作戦は？」

「そんな事を決まっている。いつも通りの　　正面突破だ」

マドカの口元が狂暴に歪み、鋭い犬歯が見えた。

闇に紛れて黒い高速機体をに動かし、時には視認さえ許さないまま敵を撃破する戦い方を好むジークにとってはハチャメチャなやり方だがマドカと一緒に仕事をする時ではいつもの事だ。

「展開」

マドカの澄んだ声が響くと同時に、その全身に光の輪が集まる。それらはすぐに物質構成をはじめ、数秒で彼女の全身は鎧武者を彷彿させる鉄色の装甲に包まれた。

第二世代IS打鉄。安定した性能を誇るガード型で、初心者にも扱いやすいことから多くの企業並びに国家、IS学園においても訓練機などで使用されている。もつともマドカが使っている打鉄は亡国機業の手によって軍事戦闘用に魔改造されたものであり通常の打鉄とは一線をかくす存在であるが。

「残業はごめんだからな、ささツと終わらせるか」

ジークも自身のIS、ディザスターを展開、装着する。

ハイパーセンサーをスキャンモードで起動。塙の向こうの施設内を探る。そこを動いているものを視て、ジークは感心を通り越して呆れた。

編隊を組んで施設内を警備しているのは全長2・5メートルほどの大きさの金属の塊だった。

青と灰色の都市迷彩を施された機体は、それぞれ二本の手足を持ったロボットのような『装甲』で、指も五本ついている。しかし、人間らしいかと言われれば、答えはノーだ。頭にあたる部分が巨大で、膨らんだ胸部装甲もあるせいか、まるでドラム缶を被っているようにも見えた。首はなく、胸に直接固定された頭部が回転している。

「警備の人間全員が駆動鎧装備^{パワードスーツ}ツて、どんだけ嚴重なんだよ」

警備している者全てが戦力としてはISには遠く及ばないとはいえ最先端技術の結晶で身を固めている。それだけで目の前の施設がどれだけ堅牢な守りを誇っているか分かるというものだ。

労災とか下りねエかなエと、若干現実逃避を始めたジークにバイザー型ハイパーセンサーで顔を隠したマドカの冷たい言葉が降りかかった。

「国家の命運を担うものを守るのだから当然だ。怖じけついたらのなら帰れ」

「へいへい分かりましたよ。アサルトライフル一丁くれ、一気に蹴散らす」

マドカはジークが愛用している銃身自体が刃になっているアサルトライフル『狼牙』を一丁展開オープンしてジークに投げつける。ジークはそれを見ずに左手でキャッチして右腰にマウントされている『狼牙』を引き抜く。

続いてマドカは大型荷電粒子砲を展開して肩に担ぐように構える。

「では、始めるぞ」

マドカの静かな言葉にジークは「ああ」と頷き、目を瞑ったまま、集中する。

《接続》が始まる。

首筋のジャックとISのコアに繋がるケーブルを門として、彼の脳とISのコアが接続される。

瞬間、脳髄に衝撃が走る。情報と感覚が濁流となって脳に押し寄せ、中、ジークはしっかりと自己を保ち、ISを 鋼の肉体を掌握する。

ハイパーセンサーによって五感が先鋭化されていき、その先にある第六感をも覚醒させるような感覚。

《LINK。戦闘モード、システム起動》

接続の感覚はある種の心地良い酩酊感もあれど、それは彼にとって決して好ましいものではない。

ジークは知っている。

これは、呪いだ。

ISに乗って戦い続ける自分への。そうすることでしか前に進めない自分への。結局お前は逃げられないのだと、心の中で誰かが言った気がした。その声はどこか自分のものに似ていた。ジークは振り払うためにより深くディザスターと接続する。

閉じていた眼を開く。その両の瞳は金色に、光り輝いていた。

「踊るぞ、亡霊のパーティータイムだ」

荷電粒子砲から照射された破壊の光が正面ゲートを撃ち貫き、戦闘の火蓋が切られた。

『……………つつ！？　ISだ！　所属不明のISが　　』

言い終えることさえ許さなかった。

素早い二段階発動によって従来の物よりも高い推進力を得る瞬時

加速　　ダブル・イグニッション二段階瞬時加速。それにより恐ろしい程の加速をしたデイ

ザスターは爆炎を切り裂き、影のように敵機の背後に回り込んだ。

反応する暇も与えない。至近距離で発射されたアサルトライフルの銃弾を受け、駆動鎧が一機沈黙した。

間髪入れず次の機動。その体を竜巻のように旋回させ、両手に携えた《狼牙》を連射し、編成を組んでいた駆動鎧を次々と沈黙させる。

『いったい何処のISだ、こつも堂々と……………！』

まるで迷彩化されていない通信波が傍受され、警備兵の呻きが聞こえてくる。

速い。

デイザスターは、恐るべき速度で駆けた。ジークの飛ばす寓意を貪欲に呑み込み、更にその先を求める。ジークはそれに応えた。休む間もなく的確な寓意を叩き込み、デイザスターもそれに応える。速く、鋭く、通常兵器など及びもつかない領域で。

叫びが聞こえる。

『撃て、撃ちまくるんだっ！ 同じ人間だ、やれる筈だ！』

同じ人間、か。

思考の大半をディザスターにさいている中、ジークは思う　悪いが、それは全く違う、と。

黒が駆ける。人間の反応速度を明らかに逸脱したペースでディザスターはジークの脳の電気信号を拾い、獰猛な戦闘意思として表現する。

ともすれば持っていかれそうな意識を繋ぎ止めるため、ジークは奥歯を噛み締めた。砕けるほどに強く。

どうあろうとオマエを使うのはオレだ。オレがオマエを飼い慣らしてやる。他の誰でもない、このオレが！

太陽が消え、月が支配する夜の世界。夜闇を塗り固めたような漆黒のISは、間合いに入る全てを片端から斬り、撃ち、蹂躪する。

しかし不思議なもので、ジークはそれが可能であるにもかかわらず、兵士たちを殺してはいなかった。もちろん使っているのは実弾だが、ギリギリ致命傷を免れるように狙って斬り、撃っている。

(面倒だな……。殺さないつウのは)

しかし、襲撃任務のさいにジークとマドカにはスコールから『ISを使つての殺害はしないこと』と命令されている。従順というわけではないが、とりあえず二人とも従うことにしている。

漆黒のISは間合いに入る全てを食らい尽くした所で、ようやくその動きを止める。

『此方は終わッたぜ。ソツチはどうだ？』

プライベート・チャンネル
個人通信で呼びかけると上空を飛んでいた打鉄がジークの隣に降下してきた。

『こちらも防衛機構を潰し終えた。後はケラヴノスとテュポーンを奪って回収班を待つだけだ』

『じゃあ、さつさと　　ッ!?!』

背筋に冷たいものを感じて、二人はISがアラートを鳴らすよりも早く、その場から離れた。

その刹那、先程まで二人がいた空間を茶褐色の旋風が引き裂いた。

「ハ、ハハハハハハッ!! この【アテランテ】の強襲を避けるとは歯応えのある相手のようで嬉しい限りだ!」

旋風の正体は茶褐色のライトアーマー軽装鎧状のフォルムのISを装備した金髪の女性だった。右手に持った長槍と左手に持った短槍を華麗に振り回して空気を引き裂き、その表情は戦いを前にして酔いしれている。

「貴様は……」

「ギリシャでISテストパイロットをやっているアレシアという者だ。そしてこの機体は初期型第三世代IS【アテランテ】。

君たちは報告書にあったIS学園を襲撃した謎の男IS操縦者とその仲間という事でいいのかな?」

「……オイ、なんかオレは有名人になツちまツたみてエだぞ」

どうしようと、首を傾げるジークの脇腹にマドカは拳を叩き込んだ。ゴインつと金属音が響き、ジークはたたらを踏んだ。

アレシアは目の前の光景に少々呆れた笑みを浮かべる。

「君達はよくこの状況でそんなことが出来るな。感心するぞ」

「いや、それほどでも」

「褒められてないぞ馬鹿者」

「ああ、因みにその黒い彼の情報はギリシャの諜報部が独自に掴んだ情報だからそこまで有名じゃないぞ」

残念だったね。と楽しそうに笑うアレシア。それは残念と言わんばかりにジークは肩を竦め、マドカはそんなジークをバイザー越しに睨み付けた。

実際問題、悪の秘密結社（自称）である亡国機業は当然所属している人間はその存在を隠さなければならぬが、ジークははっきり言っただけでそんなことどうでもいい。

「で、オレ達は奥の研究所の中にある物に用があるんで退いてくれねエか？」

「それは出来ない相談だな。ケラヴノスとテュポーンはギリシャとこの国の未来を左右する重要な物だ、簡単に渡すわけにはいかない。それに」

アレシアの顔が凶悪な物に変わる。それは、殺し殺され合う戦場に身を置くことを肯定した者の表情だった。

「折角のISを使った本物の戦場だ。存分に楽しもうじゃないか！！！！」

「そうかい」

ジークは瞬時加速でアレシアの左斜め後ろに踏み込む。身を捻り、左のアサルトライフルで刺突を放つ。IS学園で披露した、代表候補生ですら反応することさえ許さなかった神速の踏み込みからの一撃。

「フハ、速いな君は！」

だが、ギリシャのテストパイロットはそれに反応した。短槍を振るって刺突を弾き、間髪入れず長槍で瀑布のような横薙ぎの一撃を放つ。ジークは上空に飛んで回避。両腕を下に向けて照準、トリガーを引いてフルオート射撃。アレシアは後方に大きく飛んでそれを回避。外れた銃弾は強化コンクリートの地面を粉々に噛み砕いて粉塵を巻き上げた。

「だが、ギリシャ神話最速を誇る英雄アテランテの名を冠するこのISも速さが自慢でね！」

「では、その速さを披露する前に消える」「つつ！？」

回避コースに先回りして飛び込んでいたマドカが新たに展開した日本刀型近接ブレードを居合いに見立てて中腰に引いて構えていた。必中のタイミングから放たれる必殺の一刀。

あの女のあばら骨を砕けばどんな感触だろうかと邪悪な考えを浮かべた瞬間、

「いや、今披露させて貰うとするよ」

アレシアはなんの予備動作もなく、一切の体を動かすこともなく、横に（・・・）弾けるように（・・・）飛んだ。

「な………に!？」

慌てて飛んだ方向に見るが、再び予備動作無しに弾けるような軌道で跳んだアレシアが長槍で打鉄のバリアを打ちすえてきた。

「ちっ………!!」

衝撃で吹き飛ばされる直前に体を回転させてスラスタを逆噴射する。しかし、そのわずかコンマ五秒の静止すら見逃さずアレシアは追撃を仕掛ける。

「な、めるなっ!!!」

回避は不可能と判断したマドカは迎撃するべくブレードを振りかぶった所で、

「油断慢心はオマエの悪い癖だぜ、治せ」

閃光の如く軌道で疾走してきた漆黒のISに連れ拐われた。マドカを片手で抱えたままジークは両足で前方への慣性を殺し、その場でドリフトターン。鋼鉄が軋みを上げながら、強化コンクリートの大地を削る。火花と二本の轍を造りながら制止した。

「驚いた。本当に速いな、君は」

「まア、それしか取り柄がねエからな」

「……………」

両目を眼球が落ちるんじゃないかというぐらい見開いて驚愕を露にするアレシアに、軽い調子で答えるジーク。マドカはというと、ジークの脇に抱えられ不貞腐れた顔で無言。

「で、コッチの取り柄は速さだがソッチの取り柄は”ソレ”か？」

ジークはアテランテの肩部装甲を指差した。

アテランテの肩部装甲は展開し、内部から現れたコイル状のパーツ(……………)が紫電を放っていた(……………)。

302

「ああそうだ、これがアテランテの第三世代兵器。君達が狙っているケラヴノスに搭載されているPDSプラスマトライブシステムの試作型だ」

人類最速の女狩人の名を冠するISに見に纏った女は歌うように告げる。

「所詮は試作兵器の試作品だからな、随分とお粗末な出来でケラヴノスに搭載されているものと違って磁力場を造ることしか出来ない。しかも兵器としては使えないレベルでな、出来るな事といえば」

「

「機体表面と機体周辺に磁力場を形成して反発力を利用して跳ぶ、か？」

ジークに言おうとしたことを先に言われ、アレシアは一瞬息を飲んだ後、獲物を前にした肉食獣のような獰猛な表情を浮かべた。

「素晴らしい観察眼だ。やはり君は上玉だな」

「熱烈なラブコールをアリガトウ。じゃあ、速さ自慢同士ケリをつぶん！！」ケルバアアツ！？」

脇に抱えられていたマドカは体を回転させ脚を鎌のように振った。静かに殺気の応酬をしていたジークの側頭部にマドカの爪先が突き刺さった。

パキッと、ディザスターの頭部に並べられた複眼状のセンサーレズの数個に輝が入り、衝撃でジークは吹き飛び地面を滑走した。

ジークの腕から解放されたマドカは華麗に着地し、自身が蹴り転がした漆黒のISを見下ろして憮然と口を開いた。

「私を置いて話を進めるな」

「口で言えエエエエ！！なんでオマエは毎回毎回先に手を出すんだよオ！？今回は足だったけども！」

「人を物のように抱えるヤツなど足で十二分だ」

「だったら何か！？お姫様抱っこで華麗に助ければ良かったのかよ！？？」

「ヤメロ、ヘドがでる」

「コツチだツてゴメンだよ、バカヤロウ!!」

「君達、仲が良いのは分かるが戦闘中にイチャつくのはどうかと思うぞ」

「仲良くないし(ねエシ)、イチャついてもいない(いねエ)!

!」

「……息ぴつたりだな」

アレシアの最もな突っ込みを受けてジークとマドカは互いを視線で射殺さんとばかりに睨みつける。お互いヘルメットとバイザーで顔は隠れているから効果は半減だが。

ガンを飛ばし合うこと数秒、ジークが先に折れた。ため息を吐き出すと共に肩を揺らす。

「今回の敵はオレに任せて貰った方が早く終わると思うんだが?」

アテランテの磁力の反発力に利用しての無拍子高速移動は結構厄介だ。勿論、ジークもマドカが負けるとは思ってはいないが改造機とはいえ打鉄であるの速度に対処するのは骨が折れるし、時間をかければ敵の応援が来るかもしれない。そうすれば強奪どころでは無くなってくる。

「……好きにしろ」

「へーい。頑張りまーす」

マドカも同じ考えらしく不本意ながらも賛成してくれた。

ジークは左手に持っていた浪牙をマドカに投げて返すと腰にマウントされていた野太刀型近接ブレード《首斬り》を抜刀した。

「もう良いのかな？ だったら早く始めよう。そろそろ此方は我慢の限界だ……！」

「了解。早々に終わらせてやるよバトルジャンキー戦闘狂」

「そうつれないこと言うなよ。互いに楽しもうじゃないかっ!!！」

アレシアの狂暴な笑みのまま、磁力反発により一切の攻撃の予備動作を起こさず跳び、長槍を突き出す。日本の武術で無拍子と呼ばれるそれをジークは半身捻っただけで避け、浪牙の銃口をアレシアの額にあわせた。

「なっ!?!」

アレシアは即座に右に磁力場を形成して、左に跳躍して距離をとった。が、ジークは二段階瞬時加速の踏み込みで距離を消し飛ばす。入った。こちらの間合い。

アレシアは驚愕の表情。首斬りが雷光のように振るわれアテランテのバリアと胸部装甲を切り裂く。

「まだ、速くなるか!?!」

今度は下に磁力場を形成、同時にスラスターを吹かしてアレシアは大きく上空に跳躍。ジークもそれを追う。

空中でまるで跳び跳ねるような動きをして戦う二機のIS。幾度も互いの武器が火花を散らせながら激突する。押されているのは、アレシアの駆るアテランテの方だ。

いくら磁力反発による高速攻撃、高速回避を行ってもジークのディザスターはそれ以上の速度で動いて防ぎ、追いついてくる。

(特殊装備を使用しているようには見えない。つまり、単純な速さだけでこのアテランテを追い込んでいるのかっ!?)

アテランテの実際のスピードは並のISと大差無い。アテランテを高速戦闘型足らしめるのは磁力反発による無拍子機動だ。

一切の予備動作をスキップして誰にも予測できない動きで、誰よりも『早く』動くことによって結果として誰よりも『速く』動いているのだ。

だというのに

「速さで早さを越えるなど非常識にも程があるぞ!？」

「それしか取り柄がねェんだよ!！」

圧倒的な速さの暴力。ジークとディザスターの力は正にそれだ。速さを活かして、ただひたすらに攻める続ける。誰より速く接近し、誰より鋭く抉り込み、誰より激しく喰らい付く、それだけだ。

「ならば、これでどうだ!！」

アテランテの肩部にあるコイル状のパーツが紫電を放ち、連続で磁力場を形成、予備動作の無い連続跳躍。一瞬でジークの背後に回り、長槍を空間を穿つような速度で繰り出す。

「オ、ウラアアアアアアッ!！」

ジークはそれにすら反応して魅せた。瞬時加速を右半身スラスト

「のみに発動させての、高速ターン　イグニッション・ターン　通称、**瞬時旋回**。それにより、瞬時加速の推進力を利用しての回避行動と連動した回転斬りをアレシアに叩き込んだ。

余りの速度の一撃にバリアは冗談のように斬り裂かれ、直撃した腹部装甲は粉々に弾け飛んだ。

「が、あああああああああ！！！」

派手に吹き飛ばすアレシアを逃す気はない。次の機動で全て終わらせる。

「極める　　ッ！！！」

相手に出来た決定的な隙。それに喰らい付く。今こそ、ディザスターの真価を発揮する時。

一足　縮地

ジークは縮地を使い、一気に距離を無効化する。

「　　ッ！！！」

アレシアは即座に反応。崩れた体勢のまま右へと磁力跳躍。そのまま両手に持つ槍を構え　　。

二足　風切

「　　ッ！？」

ジークは一瞬で、アレシアの左側面に踏み込んでいた。驚愕するアレシアに、その勢いのまま腰の回転で左の首斬りを振るう。

が、アレシアは前方に磁力場を形成、背後に跳躍。刃は空を切った。

そして今度こそと、双槍をジークに向け。

三足 震雷

「でエエエエアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」

ジークはそこから更に加速。正面のアレシア目掛けて突貫。首斬りと浪牙で刺突を放つ。

「……………っ!!!」

オーバーアクセル
瞬速超過

イグニッションブースト
瞬時加速は、

一瞬で最高速に乗る技術だが、瞬速

超過は一瞬だけ、”トップスピードを超える速度を得る”技術だ。

オーバーアクセル

瞬速超過は発動距離が短い。故に、その真価を発揮するのは連続発

動させた時である。

間合いを一瞬で詰める一足の縮地。回避行動を追撃する二足の風切。そこから更に迫撃する三足の震雷。至近距離で、その速度を躲せる者は世界にもそうはいない。

ドライブシステム

ジークの一撃はアテランテの肩部装甲のコイル状のパーツ、試作

プラズマ

型PDSに突き刺さる。

「吹き、飛ばやアツ!!」

巨大な弾丸と化したディザスターの、全ての速度をを一点集中させた刺突は、再びアレシアを吹き飛ばした。

「つ、うおおっあああ!?!」

吹き飛ばされたアレシアはスラスターとPICで機体を振り回して体勢をなんとか立て直そうとする。

「下、気を付けた方がいいぞ」

下方に熱源。 ロックされています

「つつつつ!?!」

地表では、マドカが正面ゲートを破壊した大型荷電粒子砲を上空、アレシアに向けて照準をつけていた。

「先程の礼だ。受けとれ」

砲口から照射された眩く輝く超高圧縮エネルギー体の奔流はアテランテの背装甲とスラスターを融解させ、アレシアの体をさらに上空へと弾き上げた。

「うーっ、あああああああああ！？」

そして、そこに先回りする漆黒のIS。

今度は右腕を高く掲げ、胸部装甲に出来た切断面に浪牙の銃身を突き下ろした。

「サービスだ、コイツも貰ッとけ！」

一秒たりとも無駄はなく、一分の容赦さえなかった。浪牙のマガジンに残ったありったけを叩き込んだ。銃弾は無秩序に暴れ回り、装甲を撃ち抜き、食い荒らし、胸部装甲を完膚なきまでに破壊、アレシアを強化コンクリートの大地目掛けて叩き落とす。

「が、は……………！」

墜落の最中、アレシアが見たのは居合いに見立てて刀を中腰引いて構え、此方に飛翔してくる鉄色のISと、頭部の高さまで上げた腕をゆるく交差し、袈裟と逆袈裟の軌道で十字を切る、振り下ろしの構えで落雷じみた速度で此方に降下してくる漆黒のIS。

スラスターとPDSを破壊された今、回避することは絶対に不可能。

「貴様は」

「オレ達の前に立った」

それが彼と彼女の敵を斬り捨てる絶対理由。相手の事情など関係ない。何が立ち塞がるうとも踏み越え、自らの望む結果を掴み取る

と、言葉に込められた覚悟が言っていた。

「……済まない、皆。守りきれなかった……」

申し訳なさそうに瞳を閉じたアリシアの意識を二条の刃が刈り取った。

地上に着地したジークは、無言でマドカに向けて首斬りを掲げた。マドカはその意味を理解したらしく露骨に嫌そうに口をつぐみ。掲げられた刃に力任せに自分の刃をぶつけた。

ガィィン！という、小気味にいい金属音が辺りに響いた。

【損害報告 X X 6 0 / X X . 0 4】

国立軍事技術局を襲撃した二機の所属不明のISは『イグニツション・プラン』^{ケラヴノス}に提出される予定であった第三世代IS【神砕雷】と【暴風竜】^{デュボーン}を奪ったのち、あらゆる警備網を潜り抜け逃走。尚、襲撃の際に施設の防衛機構を破壊され、重軽傷者は多数出るも死亡者はゼロ。襲撃者と戦闘を行ったテストパイロットも使用ISを破壊され、重傷を負うも命には別状は無し。
犯行の手口から今事件は、『亡国機業』^{ファントム・タスク}の犯行と断定する物とする。

ジークは何処を見るわけでも無く、目の前の虚空を見詰めていた。

彼が今いるのは、亡国機業の回収班の移送ヘリの中だ。今回は物が物だったので、光学迷彩を始めとする数多のステルス機構を持った特殊移送ヘリでの帰還となった。すぐ近くの座席には、マドカが目を摘むって座っている。下のハンガーには奪ってきたISが眠っていることだろう。

思えば、随分と遠くに来た気がする。

独りに戻った時から、第四世代ISとバティを探してがむしやらに生きてきた。そうしている内に、今では新たに出来た共犯者あいはつと共に世界の影で足掻き続ける日々。

自身の選択と歩いてきた道のりを否定する気はないが、時々あの『揺り籠』の中にいた者達が今の自分を見たらどう思うだろうと、考えてしまう時がある。

「 Daisy , Daisy

Give me your answer do……」

気がついたら、唄っていた。あの悪魔達に管理された『揺り籠』の中で幾度と無く聞いた平凡な幸福の歌。ジークの魂にこべり付いた一つの思い出の歌。

「……また、その歌か……」

マドカが目を閉じたまま、ポツリと呟いた。

「悪リイな、起こしたか」

歌で睡眠を妨害してしまったのだろうと思いき、ジークは口を閉じたが、次にマドカが口にしたのは意外な言葉だった。

「いい、続ける。……その歌は結構気に入っている……」

ジークは空を飛ぶ鯨でも見たかのような間抜け面で数秒硬直した後、年相応の柔和な微笑みを浮かべた。

「じゃあ、リクエストもあつた事だし張り切つて唄いますかねエ」

Daisy, Daisy

Give me your answer do

I'm half crazy all for the

love of you

It won't be a stylish marriage

age

I can't afford a carriage

But you'll look sweet upon

the seat

Of a bicycle built for two...

デイジー、デイジー

どうか答えておくれ

僕は気が狂いそうなほど、きみへの恋に夢中

お洒落な結婚式にはならないかもしれない

馬車をしたてるお金はないからね

でも君はきつと素敵だろう

二人乗りの自転車に乗るその姿は

亡霊達を運ぶ、鋼鉄の箱の中でどこにでもある幸せの歌が紡が

れていく。

マドカは心地よさをそつにその歌に耳を傾けた。

幕間 亡霊達の間奏曲（修正版）（後書き）

アレシアさんとアテランテは完全に噛ませ用のオリキャラとオリIS。ギリシヤ神話のアテランテの武器は弓なのですが、超高速戦闘での弓の使い方が分からなかったのでお蔵入りしました。いつかリベンジしたいです。

この作品のマドカはジークという共犯者共犯者が入るので、独りぼっちな原作のマドカに比べて色々色々と丸くなっています。

行間3(前書き)

今回は短いです。すいません。

行間3

ゼンマイ仕掛けの猫が窓辺でつぶやく
人は人を殺せる　そう作られた

世界を覆い尽くす灰色が見える。ずっと昔　彼が「始まった」あ
の日から、記憶の深淵にあった色だ。

それは、完膚なきまでに破碎された建造物と大地が上げた粉塵の色
だった。同時に未だ地面で燻る炎が吐き出す煙の色であり、あるい
はあの地獄のような空の色だ。

どこでどこに向かつて歩いているのかさえ分からない。全身を苛む
膿んだような痛みに耐えながら、覚束ない足を踏み出す。足にもは
や現実味はなく、死に逝く者の最後の足掻きとしか思えぬほど頼り
ない歩みだった。

人の残骸ばかりが見える。甘ったるくて、胸が悪くなるような腐臭
が辺りに充満していた。

何もかも灰色の世界でそこだけが紅く彩られている。砕けた地面に転がる肉色の「ソレ」は、崩れすぎて「何」が「どこ」なのかもわからない。部位の名さえ解れない程に崩れた臓物が赤い絨毯のように大地を飾っている。それをグチャグチャと踏みしめてただ歩く。時折なんとか原型を留めた肉塊を見つけるが、それ故に前衛的なオブリジェに見える。有り得ない角度に折れ曲がり、ただ一本だけ空へと伸びた腕は誰かに手を振っているようにも思えた。自分より一回りも二回りも年下の女の子が、半分だけになった顔で物言いたげに此方を見ている。混じり合ったみんなの血と膿の溜まりで足がずりりと滑り、転びそうになる。

立ち昇る甘ったるい臭いに耐えられず、何度も嘔吐した。内臓ごと吐き出すような逆流してきた吐瀉物は、その臭気さえ腥いなまぐせ血肉に呑み込まれた。一度や二度は確かにあつたと思われる胃の内容物が出てきたが、それ以降は黄色い胃液しか出ず、ついには赤い何かか混じり始めた。

自分のものとも思えない足はそれでも動き、虚ろな瞳で愚直に何かを探し続ける。

やがて、死体を見つけた。

辛うじてそれは「死体」と呼べる物体だった。原型を留めぬ程に錯乱する肉塊の中で、とても、とても綺麗に原型を留めたものだったのだから。しかしそれは全体と比較した相対的な評価に過ぎず、「彼女」らもまた、人としてあるべきどこかが取り返しのつかない程に破壊されていた。

実に致命的な位置に、効率的な角度から穿たれた、見事でさえある

弾痕だった。

よく知っている筈の人々だった。憧れている幼馴染みだった人、想い慕った人、自分を救ってくれた人。彼らの身体は、一部が、あるいは半分が、あるいはその殆どが銃弾で穿たれていた。

瓦礫に潰され無くした筈の少年の左手は、じくじくと赤い血や黄色い脂肪を滴ながら、「ソコ」にあった。異形の鈍色のパーツが肉を侵食している。機械が身体を喰らっている。グロテスクな左手は、今にも腐り落ちそうだというのに異様なほどしっかりと銃を握っている。とつくに死んだ筈の左手から銃の質感が伝わってくる。引いたトリガーの重さを、銃口から吐き出される弾丸の感触を覚えていく。鼻がおかしくなるような腐臭は、地面を埋め尽くす死体よりも、その左手から発せられていたのだと初めて気付いた。

死体の向こうにただ一人ぼつんと小さな《ぼく》が立っていた。この灰色の世界で死んだはずのぼくが。左腕のないぼくが。名前と存在を失ったぼくが。

『シオン・スミカ』と全く同じ顔の己が灰の世界を写し取った瞳で、じつと自分を見ている。

オルゴールの歌姫　しとやかに歌う
人は人を殺せる　そう作られた

跳ね起きる。

夜の静かな暗闇と、ジメツとした不愉快なシーツの感触があった。
全身の汗腺からブワツと汗が噴き出してくる。シオンは空気を必死
に求めるように激しく呼吸を繰り返した。だが上手くいかない、体
に全くと言っていいほど酸素が入ってこない。心臓が破裂しそうな
程バクバクと脈打つ。

左腕が、痛い。

ファントム・ペイン
幻視痛と呼ばれる現象がある。

体の欠損に見舞われた者のみが味わう、ある筈もない部位の痛みだ。
電流を流した万力でゆっくりと潰されてゆくような痛み。脳が部位
を欠損したことを忘れ、その部位を求め「痛み」を発するが故の症
状だと聞いた。

だが、シオンの左腕は既に失われてからかなりの月日が流れている。義手だって完全に馴染んでいるし、第一義手が無い頃の記憶などシオンの中には殆ど無い。その部位があった頃の錯覚により引き起こされるのが幻視痛なら、シオンはもうそんなものとは無縁な筈だ。だが、痛む。撫でさすろうとも掻き毟ろうともけして消えぬ激痛がシオンを蝕む。それは、「あの夢」を見て飛び起きた夜、必ず襲い来る痛みだ。

シオンは、疼く左腕を右手で掻き毟るように抑え込んだ。表面上は人の皮膚と肉を再現しているものの、中身は光学神経と人工筋肉、合成骨格などの機械部品で造られた冷たい機械的な感触。なにも感じない機械のパーツは、生物にしか感じえない痛みを訴え続ける。

「ヤメロ」

震えながら呟く。

幻視痛は脳が失われた身体を求める為に起こるといだが、それはシオンには当てはまらない筈なのだ。生身の右手があった頃の感覚など、一切覚えていないのだから。

それでも脳は求め続ける。

なら。

「やめてくれ……っ！」

この脳は、一体何を求めているんだ。

不意に激しくなる 風にあおられて
ゆりかごは転がる おまえは落ちる
そこで目が覚める 何かを見る前に
くり返すその夢 覚めては眠る

早朝。IS学園第一アリーナ。

六条左回りの螺旋を描く鋼鉄の孔を、白式のハイパーセンサーを通して一夏はただ凝視していた。

アリーナの中央にぽつんと浮かぶのは拳銃が付けられた実戦型の訓練用ターゲットだ。

拳銃はわずか二十メートルの距離を取って立つ一夏の眉間をポイントしている。

両手をゆるく広げ、一夏は懸命に黒い孔を睨む。

時間感覚はとうに失せている。もう何分間こうしているのか見当も付かない。この訓練の仕様はいたって単純だ。スタートしてから五秒のカウントダウンを経て、一夏を自動照準する拳銃がその瞬間から三十分後のいずれかの時点で弾丸を発射する。

もちろん普通なら何もできないが、ISを装備している状態なら拳銃のマズルファイアが見えた瞬間最短の時間で反応すれば、ちゃんと避けられるように弾速と距離を設定してある。

しかし問題は、三十分間のどこで弾丸が発射されるのかまったく判らない点だ。軌道やタイミングを読む材料は皆無。できるのは、眼を見開き、集中を維持することだけだ。

しかしそれが事の外難しい。もともと長時間の集中力には絶対的に自信がない。このトレーニングを始めた直後は、ほんの二、三分で緊張が途切れ、ついその日夕食のおかずについてぼんやりと考えていたところを容赦なく撃たれたものだ。

だが一夏は、意固地になってこの訓練を続けた。

何せ相手は動かない銃だった一つのなのだ。あの閃光の如き軌道で相手に反応すら許さず撃破する『あいつ』の攻撃に比べれば、果てしなく甘つちよろいと言っべきだ。一夏の計画では慣れたらだんだんターゲットの数を増やしていく予定だったが、いまだに一つが発射するたった一弾に苦戦している。

才能がない。そんなことは最初から解っている。

しかし、訓練での伸びしろすらないのなら、永遠に『あいつ』のいる領域には辿り着けないのではないか。

くそ。くそつ。俺はもっと速く、もっと強くならなくちゃいけないんだ。あいつより強くなって、あいつから皆を守れるように。

一夏の心中に生じた焦りが、ノイズとなってISの手足を強張らせた。

と、まるでそれを待っていたかのように。

かり、とかすかな金属音を立ててトリガーが動き。ハンマーが撃針を叩き。スライドがブローバックすると同時に重厚からオレンジ色の閃光が吐き出された。

「ッ……！！」

一夏は全力で右に跳ぼうとした。

しかしほんの僅かに初期反応が遅れ、轟音とともに飛来した弾丸が左の頬に直撃した。ISの絶対防御によって怪我をすることはないが衝撃と痛みは通る。

巨大な金槌で強打されたかのような衝撃にひとたまりもなく吹き飛ばされ、地に叩きつけられたから、改めて襲ってきた痛みに一夏はうめき声を上げた。

「っあ……うあああ……！！」

両手で顔を押さえ、痛みを耐え続ける。今日、この痛みを味わうのはこれで三回目だ。トレーニングを始めてからでは、もう合計何回になるのか見当もつかない。

こんな訓練、ごく初歩的な反応速度の向上を狙ったものでしかない。なのに、どれだけ繰り返し返しても避けられる確率はせいぜい二割から三割に上がった程度だ。

ゆっくり強くなればいい、と皆は言うてくれる。だが、それでは駄目なんだ。あいつは　ジーク・キサラギと名乗った男は強くならなければ大切な物を根こそぎ奪ってやると言った。だからもっと強くならなければ。

強くなって、大切な誰かを守りたいと思ってきた。大切な誰かを守る強さがほしいと願ってきた。

力がなければ誰も守れない。そんなことは守られて生きてきた一夏が一番よく知っている。

だからこそ、それが欲しい。あの絶望的なまでに強い敵から守るために手に入れなければ駄目なんだ。

なのに、訓練すらマトモにこなせない自分の弱さに、苛立ちが膨れ上がる。

やはり、自分は何も変わっていないのか。

強くなりたいと願い、それでも弱いままなのか。

力が 欲しい。だが、それはない。

絶望と諦めが、一夏の心を押し潰さんとのし掛かってくる。

強く。強くなりたい。

行間3 (後書き)

実は、ちゃんとジーク視点の話も入れるつもりだったんですが出
来が微妙だったので見送りました。

亡霊達の日常（前書き）

1ヶ月振りの投稿。しかも書き方忘れた性でぐだくたです、スミマセン。言い訳しようにも単純に忙しかっただけで、しようもありません（泣）

亡霊達の日常

「おい、そつちのケーブル全部持ってこい！！」

亡国機業支部のハンガーブロックは、ギリシャから強奪してきた二機のIS、【神碎雷^{ケラヴノス}】と【暴風竜^{テュポーン}】の解析と調整で上を下への大騒ぎとなっていた。ツナギを着た作業員達が怒号を跳ばしながら忙しく動いてい。その中で、

「ジーク！こつちに特大レンチと高周波カッター持ってこいや！！」

「こつちは液晶ディスプレイを二十！あと、発電機もだ！！」

「テメエら、オレは雑用じゃねえんだぞ！？」

ジークは雑用係としてブロック中を駆けずり回っていた。ようやくスコールの腹いせとしか思えない任務ラッシュも終わり、報告も済ませ、ディザスターの調整でもして帰ろうと思いい立ち寄ったら捕まっつて、何故か手伝われされている。

「おい、おやっさん！なんで、オレがこんなガシャコンガシャコンの手伝いなんてやらなきやいけねえんだよ！？」

ジークが叫ぶと全体に指示を飛ばしていたオレンジのツナギを着たガテン系の五十代半ばのオヤジが「あん？」と反応して、ジークに向かつて叫んだ。

「人手が足りねえんだ、仕方ねえだろ！後、ガシャコンガシャコンじゃねえガツシャンウィーンガツシャンだ間違えんな！！」

「知るかア！！」

ジークは律儀に特大レンチ、高周波カッター、液晶ディスプレイ、発電機を運んでから亡国機業の整備主任でありジークを捕まえて仕事を押しつけた張本人であるおやつさん　コードネーム『修理』^{リペア}に大股で歩み寄った。

「オレの仕事はISを奪ってこることで、整備することはオレの仕事じゃねエんだよ！」

「細かい事はきにすんなよ。『GOに入ればGOにエビバディ』つつったか？」

「微妙に合ッてること言ッてんじゃねエぞゴラア！！」

掴みかかるジークであるがリペアは「ガハハハハ」と豪快に笑ってスルー。この腐れオヤジどたまかち割ッてやるうかと拳を握る。

ジークが傷害事件を起こそうとした時、バシユツと空気が抜ける音がして開いた入口からISスーツを着た女性がハンガーブロックに入ってきた。

すらりと背の高い、率直に言ッて美人の女性だった。身長は男の中でも長身なジークと目線が並ぶほどで、ショートボブに切り揃えられたブロンドの髪がよく映える。鼻が高く、首も長い。恐らくイタリア人だろう。

女性はジークを見つけると切れ長の目を細めて、ニカツと端正な顔面を無邪気な笑みで歪めた。ジークはその笑顔に対して眉根を寄せてしづい顔をする。

「……そういや、テュポーンはアンタの機体になるんだッたな。ス

トーム」

「その通りだ。私の新しいISを手に入れてきてくれて礼を言うよジーク君。後私のことはストさんと呼んでくれといつも言っているだろう」

爽やかに笑って駆け寄ってくるストームにジークはため息をついた。あの爽やかな雰囲気は、なんか浄化されそう気がしてどうも苦手なのだ。リペアはというと駆け寄ってくるストームをガン見している。

「あれだよな。ISに関わる仕事してて一番の役得はエロイ格好の女を見れることだよな」

「……それには同感だぜおやっさん」

ISスーツを押し出して、はちきれんばかりに胸の大艦巨砲主義がこれでもか自己主張していた。でかい。言葉は不要。

だが、あえて言うなら肌にピチピチに密着するISスーツを着ているのでかなりドえらい事になっていた。更に言うなら亡国企業が使用しているISスーツ（当然ジークは別）は胸元の部分がダイア型にかなり大きく露出しているので、ストームの豊かすぎる胸の谷間を惜し気もなく披露しているのでドえらい事になっている。重要なことなので二回言った。ジークもそれを俯瞰的に見つめてこう思った。

（スゲエな相変わらず。マドカも同じデザイン着ちゃいるが、ああはならねエ。別にアイツが貧乳ツてわけじゃあねエんだけど）

この男、案外ゲスである。

「アハハハハ。セクハラだぞ二人とも！」

二人どころではなくハンガーブロックにいた男達全員に見られていたがストームはからからと笑ってスルー。リペアは黄緑色の瞳をストームの胸から一切外さず、顎髭を擦りながら至って真剣な顔で口を開いた。

「テュポーンの方の準備は今しがた終わったところだ。このままやるか？」

「ああ、頼む。サポート宜しくお願いするよ」

「任しときな。オマエの専用機として完璧に仕上げてやるよ」

「そういうカツコイイ台詞は胸見んのやめてから言ッた方がいいぜ、おやつさん」

「ヨツシヤアアア！！ 始めるぞ野郎共ッ！！」

「無視か」

ジークの冷やややかな言葉など全く気に止めず、リペアは整備員達を引き連れてバタバタと動きだした。ディザスターの整備に来たのだがこの状況では出来そうにないと悟り、ジークは面倒臭そうに髪を掻きながらハンガーブロックを出ようと足を動かした。

「ジーク君、少しいいかな」

振り返るとストームがいつも笑顔とは違って変わって神妙な顔でジークを見詰めていた。彼女がそういった顔をする時は決まって他人を心配している時だ。

「君は、大丈夫か？」

「んだよ、いきなり？」

「テュポーンとケラヴノスは多くの人達の夢の結晶であったことは

想像に難くない。それを君は奪い、踏みにじった。君はそういつたものを背負っていくことになるんだ。それは君だって分かっていることだろう……」

ストームの声も表情も雰囲気も、その全てが純粹にジークを心配しての物だと告げていた。ジークは心底呆れたように深いため息をつく。だからコイツは苦手なんだ。何故、この女は闇の世界の住人の癖にここまで善人なんだ。

「……んなこたア今更だろうが。オレはずつと生きるために、自分の目的のためになんだってやってきてる。今更悪事を重ねた所でもないと思わねエよ」

「そうじゃない。私は君がIS強奪の任を担っていること自体が問題だと言っているんだ。君にとってISに関わる夢を踏みにじることは他人事ではないだろう!？」

適当に言葉を濁してその場を立ち去ろうとしたジークにストームは語気を荒らげ、核心を突く言葉で呼び止めた。何事かと整備員達がストームとジークを怪訝そうな顔で見てる。

そういえば昔、酒の席で酔って口が軽くなりストームに自分の過去、目的、理由についてうっかり口を滑らしてしまったことがあったなつとぼんやりとジークは思い出した。

ジークはストームから視線を外して両手の黒のグローブ 待機状態となったディザスターをひたと見つめる。そして一拍おいて強く拳を握りしめた。

「なんとも思わねエッて言ッてんだろ。
には慣れてんだよ」

背負って歩くこと

ジークは全て記憶している。アウラが唄っていた歌も、バティとの想い出も（かこ）、自分達を産み出した夢も、犠牲にしてきたモノも、守れなかったモノも、奪ってきたモノも、その全てを。

目的のために立ち塞がるものは全て斬り捨ててきた。そうやって、あらゆるものを踏み越え背負ってきた。

呑み込んだ覚悟の量は計り知れないし、これからも増えていくだろう。それらから目を背けるほどジークは弱くない。

ジークは、まだ何か言いたげなストームに背を向け、自分が歩く前のみを見据え、大股でまっすぐ歩き始めた。歩く際には前しか見ない。上も下も後ろも見ない上に、周囲の景色にもまるで頼着しない。

まるで、己が歩く道にしか興味がないと言わんばかりに。

そんなこんなで、ジークはIS学園調査の拠点となるIS学園から最も近い位置にあるマンションにようやく帰ってこれた。

ジークが住んでいるのは家族向けの4LDK、しかも一生賭けて家賃払っていくレベルの物だが幸いIS強奪などの危険度の高い任務をするジークの年収は超一流メジャーリーガーにも匹敵するので経費が落ちなくとも問題なく買えた。

もっともIS学園を監視するには一番いい場所なので買ったはいが一人で暮らすものとしては些か広すぎるので持て余しているのだが。

ジークはいつも通り静脈認証を済ませてロックを外してマンションに入り、エレベーターで自身の部屋がある最上階である十階に上がり、自身の部屋の鍵穴に鍵を差し込んでロックを外して、玄関の扉を開けた。

それはいつもの行動であり、本来誰もいない筈の自宅の玄関を開けただけなのだからジークには非はなどなかっただろう。だが、あえて言うなら間が悪かった。

「.....」
「.....」

玄関から伸びる廊下の先、リビングへのドアが開いており、リビングには人がいた。瞳に暗い負の感情を滲ませ、闇の如き黒髪をし

た少女だった。ジークには物凄く見覚えがあった。というかどう見ても彼の共犯者だ。そして着替え中だったのか下着姿だった。あどけなさを残しつつも、女としての萌芽が見られる身体を包んでいるのは白に花柄等の刺繍の入った下着でジークは意外と可愛い使ってるんだなつと凄く失礼な事を考えた。

そして、マドカが手に持っているのは、何故かスクールがおそらく冗談で送ってきたジーク用のIS学園制服（女子使用）であった。

数秒の硬直の後、取り合えずジークは時を巻き戻すべくドアを閉めた。

そして首を大きく横に何度も振り、目を擦り、ラジオ体操の1番から2番を全てやり、そして最後に大きく深呼吸。準備運動を完璧にこなしたジークは、意を決して玄関を開けた。

「シッ!!」

玄関を開けた瞬間、着替え終えていたマドカがジークの眉間目掛けてナイフを全力投球してきた。

「そオオい!?!」

ジークは変な声を上げて、飛んできたナイフを左手で叩き落とす。ナイフはからんからんつと音をたてて玄関を転がる。投げた張本人である殺人未遂現行犯織斑マドカは心底悔しそうに「チッ」っと舌打ちを一つ付いた。

「こ、殺す気かアアアア!? なんで自分の家に帰ってきただけで殺されかけなきゃなんねエんだよ!?」

「黙れ。さつさと死ね、女の敵」

「オレに非はないからな! 悪いのは他人の家に勝手に上がった勝手に着替えてたテメエだからな!! オレに罪はないからな!？」

ガー! と、正論で喚くジークだがマドカはそっぽを向いて完全にスルー。もういくら叫んでも無駄だとジークは今までの経験で理解する。

仕方ないのでジークはため息一つ漏らして取り合えず聞かなきゃならないことを聞くことにした。

「……まず聞きてエんだがオマエなんでこんなモン着ようとした?」
「……………」

ジークはひよいつと床に落ちていたスコールが送ってきた女子用IS学園の制服を拾い上げ、マドカの前に突き出した。マドカは視線をそらす。しらばつくれる気だ。

「ひヨツとしてアレか? 『姉さんが私ぐらい頃は学生服着て、こんな感じだったのかな?』とかしようとしたのか?」

「……………」

ジークの指摘にマドカは変わらず無表情で視線をそらしたままだったが少なからず付き合いのあるジークは気付いていた。殆どの人間は見逃するう小さな変化だったがマドカの口元がほんの僅かだが引き吊り、額に汗が一筋流れていることに。

「凶星かよ」

「……………」

「オマエ本当にアレだよな、姉が絡むと暴走するつウか本当に残念な子になるよな。それに振り回されるコツチの身にもなってくれる嬉しいモンなんだがなア。いやア、本当にマジ」

最後まで言い終えることが出来なかった。何故なら、ズッドオオオオオオオオオ、とマドカの全身から暗黒オーラが湧き出てきていたからだ。

低い声でマドカは言う。

「遺言があるなら聞いてやる。言え」

「ア、アノ、おおおお落ちて着いたら如何でしょうかマドカさん!？」
「死刑執行」

冷や汗を滝のように流すジークにマドカは獣のように飛びかかった。

「ぜ……………ハア、ハア、ハア……………オマエ、照れ隠しで、人を殺そうと、するとか、マジで、ヤメロよ」

「う……………煩、い。わ、私は、からかわれるのが、嫌いなんだ」

数分間の命懸け（ジーク限定）の格闘後、息も絶え絶えになった二人はリビングの床に座りこんでいた。これ以上不毛な争いは絶対に御免なのでジークは一番気かなければならない事を聞くことにした。

「……服のことはもういいとして　　なんでオマエが此処にいらんだよ？」

IS学園の調査はジークの任務でありMには関係ない物の筈だ。何やら日本で別の仕事でも出来たのだからかとジークは考えたがマドカが言った答えはジークの予想の遥か上を行っていた。

「スコールから聞いていないのか？　問題を起こした貴様の監視役として私が派遣されたのだぞ？」

「……………は？」

呆然とするジークをよそにマドカは「一部屋貰うぞ」と言って荷物なのであろうキャリアケース一つ持って適当な部屋に引っ込んでいった。

リビングに一人取り残されたジークは状況を確認する。

自分に監視役を付けられたのは仕方ない、それだけの問題は起こしたのだから。その程度のペナルティで済むなら本来は御の字だ。だが、その監視役がマドカならば話は別だ。

織斑マドカの目的は織斑千冬への復讐である。そしてジークが調査しているIS学園には織斑千冬がいる。否応なしに接触することが出てくるだろう。それによってマドカが何時耐えられなくなり復讐に走るか分かったものではない。

つまり、ジークはこれから何時核爆発するか分かったものではない爆薬庫マドカと一緒に暮らす事になるわけだ。

亡霊達の日常（後書き）

総合評価100pt越えしそうなのですが、したら何かした方が
いいんですかね？

転校生は波乱の予兆（前書き）

うおおお！ スライディング土下座！！ Orz|||||3
ザ
シヤアアアアアアツツ

再び更新遅れてすみません！！ 誰か私に時間を下さい！！
一夏パートの書き方も教えて下さい！！！！ 後、

今回も短い上にグダグダです！！

転校生は波乱の予兆

イタリア軍の基地から一機の飛行機が日本へと飛び立った。

生憎の悪天候であり、乱れた気流で機体がガタガタと激しく揺れる。

「……………」

が、機内にいる一人の女性は平然として空間投影型ディスプレイを展開してデータを閲覧していた。

結って纏められた脱色した白い髪と空調で気温、湿度共に快適に整えられている筈なのに白い毛皮のコートに枯れ草色のマフラーを身に纏っている以外はコレといった特徴の無い女性だ。瞳の色は生気を余り感じない白に近い灰色で、ディスプレイを見詰めて動かない顔の表情も人間らしい感情が見え隠れするが、それも曖昧で、『彼女』という存在自体がどこか臆気でさえあった。

「『引き続き査問官として動きつつ、現地のエージェントと接触し、そちらの任務に協力せよ』。現地のエージェントは……………ジークですか……………」

本部から送られてきた辞令書を読み終わった彼女は次々にディスプレイを展開し、瞳を目まぐるしく動かして情報を閲覧していく。

展開されたディスプレイに表示されているのは本部から送られてきた情報や査問官としての彼女が今まで得たきた情報、彼女がこれから行わなければならない任務についての情報など、彼女取り巻く状況についての物だ。

彼女はデータを全て閲覧し終えた後、顎に手をやりこれからの行動について考えた。

ふと、内包している感情が読み取れない彼女の表情があからさまな程に愉快そうな笑みで歪んだ。

「これならばプランの短縮が可能　いえ、単純にこれは……..
面白い事になりそうだ」

彼女が漏らした笑みと言葉の意味を知るものはいない。

六月。学年別トーナメントを控えたIS学園ではちょっとした騒動が起こっていた。その中心になるのはやはり、学園で唯一男子生徒を有する一年一組になるわけなのだが

「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「え、何の話？」

「だから、あの織斑君の話よ」

「いい話？悪い話？」

「最上級にいい話」

「聞く！」

「まあまあ落ち着きなさい。いい？絶対これは女子しか教えちゃダメだよ？女の子だけの話なんだから。実はね、今月の学年別トーナメントで」

「何やら騒がしいが……何だ？」

「さあ。なにか噂話でもしているようですけど……」

箒とセシリアという珍しい組み合わせがクラスのざわめきに首を傾げていた。

「おはよーっ」

『っ！！』

一夏が教室に入ると、一気にざわめきが大きくなった。

「なんか賑やかだな。何の話してるんだ？」

と、大した考えもなく聞いてみる一夏。

「……………何でもないよッ！！」「……………」

返ってきたのは、絶対何かある返事だった。
かといって、女子達が話してくれるとも思えないので、取り合えず
近くにいたシオンに聞くことにした。

「どうしたんだいったい？シオン、何か知らないか」
「……………知らない」

一夏の問いにシオンはムスツとして答える。女子のテンションに反
比例してシオンの機嫌は悪かった。というか最近はずっと機嫌が悪
い。
自分が何かしたのかと思ったが思い当たる節がない。

「は〜い、皆さん席に着いて下さいね〜」

訝しんだ一夏が頭を悩ませていると、真耶と千冬が入ってきた。
一夏は、仕方なく自分の席に着いた。

「う〜ん……………分からん」

悩んだところで、答えは出てこない。ならSHRと授業に集中す
るべきと考えを切り替えた。

千冬の出席簿アタックなど誰も喰らいたくはないのである。

教壇に真耶が立ち、その脇に千冬が控えるという定位置でSHR開
始。

因みに、千冬は一夏が自宅に帰った時に出しておいたサマースイツ
に袖を通していた。それに満足感を覚えつつ、一夏は意識を教壇に
戻した。

まず千冬が口を開いた。

「今日から本格的な実戦訓練に入る。訓練機ではあるがISを使う以上危険が伴う。なので、各人は気を引き締めるように。それぞれのISスーツが届くまでは、学校指定の物を着用する事。忘れた者は学園指定の水着を着る。それさえ忘れた者は、下着で良いだろう」

「いやいや、それは構うでしょうよ。と、クラス全員が心の内で総ツッコミである。さすがに千冬も本気で言っている訳ではないだろう。無いはずだ。たぶんきつと。」

「では、山田先生。ホームルームを」

「は、はいっ！……ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！ しかも二名です！」

ざわ。とクラス中がどよめいた。

只でさえ珍しい転校生。それが二名となれば尚更であり、事前情報さえも知らなかったのだ。この反応も仕方ない事だろう。

自動ドアがエア音と共に開き、教室に足を踏み入れたきた二人の転校生を見て、ざわめきがぴたりと止まった。

何故なら

ジークはマンションから少し離れた所にある定食屋、五反田食堂で遅めの朝食をとりながら右手で書類を持ち、目を通していた。

学年別トーナメントに向けて慌ただしくなっていくIS学園に比例してそのIS学園の調査を行っているジークも様々な雑務が増え、忙しくなっている。故に、自炊する気力が沸かず最近はずばら美味い、安い、店員の愛想が良いの三拍子揃ったこの五反田食堂で食事を済ませている。

忙しくて自炊できないなら同居人に頼めばいいじゃん？ とか、浅はかにも考える人もいるかもしれないが、そう考えた人は織斑マドカという人間を分かっていない。ヤツは忙しい同居人のために料理を作ってやるうなどと考えるたまではない。むしろ忙しいジークを放っておいて自分だけ出前とって食うようなヤツである。

だから、ジークは美少女の手料理を家で食べられるとかそんな妄想は自身の手でとっくの昔に欠片も残さずぶち殺している。

ジークが書類に視線を向けながら器用に箸で煮魚の骨を取り除いている様子に真向かいの席で同じく遅めの朝食をとっていたマドカが不思議そうな視線を向けていた。

不思議そうな視線と言っても今のマドカはサングラスで目を隠しているのでジークがそういった雰囲気を感じただけだが。

「やけに器用だな。おまえは箸を使う文化圏の人間だったのか？」
「……一応、中国出身だぜ。まア、ガキの頃は箸使うような物なんざ食ってなかつたから覚えたのは最近だけだな」

ジークの答えにマドカは自分から聞いておきながら「そうか」と、興味なさそうに頷くだけで直ぐに食事を再開した。

マドカは塩鮭と白米を口に放り込み、咀嚼し味わった後物足りなかつたのか「塩味が足りん」とかぶつぶつ言いながらテーブルの上に置いてあつた塩を手に取り、塩鮭に振りかけた。その様子を見ていたジークがポツリと一言。

「塩分のとりすぎは太るぞ」

「っ！」

ガスッ！と、テーブルの下でマドカの蹴りがジークの脛に突き刺さつた。

「~~~~~！！!?」

テーブルの突っ伏するように倒れこみ声にならない悲鳴を上げて悶えるジーク。マドカは不機嫌そうに鼻を鳴らすと苦しむジークを放って食事を続けた。

二十秒程して未だに引かない脛の痛みにぶるぶると生まれたての小鹿のように震えながら顔を上げたジークの視界に不可解な物が入つた。

「んだこりゃあ、怪しいにも程があるだろ」

「何がだ」

眉間にシワを寄せて顔をしかめたジークの言葉にマドカも不機嫌ながらも反応した。ジークは不可解な物。IS学園への転校生の情報記された書類をマドカに手渡す。

書類を受け取ったマドカは書類に目を通し、ジークと同じく顔をしかめた。

「確かにIS開発後進国であるフランス、しかもあの（・・・）デユノア社が今の今までコレ（・・・）を隠してきた理由は見当たらない。何かあると考えた方が妥当か」

マドカの意見にジークも頷いて同意を示す。

ジークはビシッ！と箸で書類に貼り付けられた件の転校生の顔写真を指して言った。

「調べて見る必要があるみてエだな、その『二人目のIS操縦者』を」

何故なら、その内一人が男子だったのだから。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

転校生の一人、シャルルはにこやかな顔でそう告げて一礼する。

人なつっこそうな顔。礼儀の正しい立ち居振る舞いと中性的に整った顔立ち。髪は濃い金髪。黄金色のそれを首の後ろで丁寧に束ねている。体はともすれば華奢に思えるくらいスマートで、しゅっと伸びた脚が格好いい。

印象は、誇張ではなく『貴公子』というのが相応しい。

「お、男……？」

誰かがそう呟いた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

「シャルル!? なんだって君がこんなところにいるんだ!? しかもその格好」

シオンが珍しく語気を荒げて椅子を蹴飛ばし、立ち上がりシャルルに詰め寄った。クラスの視線が集まるがそんな物、今のシオンには気に止めない。

「ちょっと、シオン、落ち着いて、ね？」

「いや、でも」

ズガンッ!!

「ほぐつ!?!」

「旧知の仲の者に会って驚いているのは分かるが、まだHR中だ質問なら後にしろ」

「む、……了解です」

千冬に殴られ幾分か冷静さを取り戻したシオンは渋々ながらも自分の席に戻った。

「では、気をとりなおして皆さんよろしくお願ひします」

シャルルも安心したように息をつき、ぺこりと礼儀正しくお辞儀をした。

「きゃ」

「はい?」

「きゃあああああああー!」

何処かデジャブを覚える黄色い声のソニックウェーブが巻き起り、比喻ではなく本当に教室を揺らした。

「男子!三人目の男子!」

「しかも、またうちのクラス!」

「美系!しかも織斑くんやスミカくんとは違った守ってあげたくない系!」

「我が世の春がキター!」

クラスの女子達は先程までのやり取り何ぞ気にも止めていない、というか気が付いてもいないという体で盛り上がりだしたがった。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから〜！」

忘れていたわけではない　というより意識の外に追いやるのが難しいもう一人の転校生は、見た目からしてかなりの異端であった。輝くような銀髪。ともすれば白に近いそれを、腰近くまで長くおろしている。そして左目には眼帯。開いている右目は赤色を宿しているが、その温度はかぎりなくゼロに近い。

彼女はクラスをまるで下らないものを見るかのように一瞥した。しかしそれもわずかのことで、今はもう視線をある一点……千冬を見つめていた。

「……ラウラ、挨拶をしろ」

「はい、教官」

千冬が言うとラウラと呼ばれた少女は、いきなり佇まいを直して、口を開いた。

「ドイツから来た、ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

それ以降、口を閉じ、何も言わない。クラスが何とも言えない沈黙に包まれる。

「あ、あの……以上、ですか？」

「以上だ」

真耶が出来る限りの笑顔で聞くが、ラウラはそう短く返した。

先ほどのシオンとシャルルの事といい、今日は何やら変な事ばかり起こるなど一夏が思っていると、ラウラと視線が重なった。

「貴様が」

「……ッ！」

その瞬間、一夏はラウラから激しい憎悪にも近い敵意を感じた。

ラウラが数歩、一夏に向かって踏み出す。

そして、容赦なく無駄の無い動きで一夏の頬目掛けて平手打ちを繰り返した。

「おい……いきなり初対面の相手を叩くのが、ドイツの挨拶なのか？」

振り抜かれたラウラの右手が、一夏の頬を叩く事は無く、空を切っただけだった。

打たれる直前、一夏は顔を後ろに反らしていたのだ。妙な所で弾丸回避訓練の成果が出た。どうやら続けてきた無駄な訓練も実を結んできているようだ。

「私は認めない。貴様があの人の（…………）弟であるなど（…………）
…………（認めるものか…………）！」

敵意を剥き出しにした言葉に、一夏も敵意を持って返す。

「生憎と、お前に認められなきゃいけない理由が分からねえな…………
！」

その言葉に激情を顕にするラウラ。睨み合う両者を止めたのは、
鶴の一声だった。

「いい加減にしておけよ、貴様ら」

「申し訳ありません、教官」

ラウラは一瞬で激情を表情から消し、千冬に敬礼して、元の所に
戻った。

啞然とする教室に、チャイムの音が響いた。

シャルル・デュノアと、ラウラ・ボーデヴィツヒ。そして、蠢く
亡霊達。

巻き起こされる、波乱の一ヶ月。

そしてその中で、少年少女達はそれぞれの在り方を見つめ直して
いく事となる。

転校生は波乱の予兆（後書き）

評価が100pt越えたので、三巻の後やる予定のジーク過去編で出すキャラの名前を募集したいと思います。

キャラの名前は『A』、『B』、『D』、『Z』を除く、アルファベットが頭文字の女性の名前をお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3886s/>

IS【Three Heroes ~白・黒・灰~】

2011年11月13日10時35分発行